

ロンドンのチェリングクロス駅からヘイスティングス行き
列車に乗って小一時間、「イングランドの庭」と呼ばれるケン
ト州の美しいカントリースाइドの一角に、十六世紀から続い
たブリックスクールがある。所謂クレランドン・スクールズから
は漏れているもの、数年前イートン、ハーロウ、ウインチェ
スター等の校長を歴任した人物が校長の椅子についてから、順
調に学業成績を伸ばしている進学校だ。

完全な全寮制ではなく、少数だが通学の学生も在籍する。
十三歳 (St John) から十八歳 (Upper St John) の学生たち
を集める男子校で、ロンドンから比較的近いため、都市部から
やってくる学生が多い。パブリックスクールに息子を通わせる
のは中・上流階級家庭のステータスであり、地理的条件も反映
して、この学校では比較的裕福な一般家庭の子弟が大半を占め
ていた。一般家庭の、というのは、所謂貴族はほとんどがイー
トン、ハーロウなどのクレランドン・スクールに行ってしまう
からだ。

ロンドン郊外の銀行員の元に次男として生まれたカミュ・
ルーファス・パーロウもまた、そのような大多数の一人だっ
た。真面目で優秀な兄と美術的なセンスに恵まれた弟の間に挿
まれ、あまり両親の手を煩わすことのなかった彼は、家庭でも

学校でもあまり目立たない存在だった——「赤毛」という名
前通りの鮮やかな赤い髪と、それに跳えたような赤茶色の瞳
以外には、実際、彼の容姿は初対面の人間にある程度以上の
印象を与えなかった。人付き合いもよく、勉強もそこそこ出来
ていくのだった。クラスで問題を起こすわけでもない。どこにでもいる、普通
の少年だ、と。彼の最も非凡な部分は、ひそやかに彼自身の
世界にしまい込まれていて、限られたごく一部の人間にしか
垣間見ることができなかった。

そんな彼が、それと知られることなく行った主張があると
すれば、この音楽奨学生を多数輩出している学校を選んだこ
とだった。父親は、兄のようにイートンを選ばなかったカミュ
に最後まで不満を抱いていたが、カミュにピアノを買い与え
た母親の方は、黙って息子を新しい学校に送り出した。……ど
んな助言や薬、質の高い友人よりも、この子を支えるのは音
楽だと、彼女の血がそう告げていたので。

そんなわけで、カミュの両親や友人も、カミュ本人も、新
たな生活に際してそれほど劇的な変化を期待してはいなかつ
た。そこで、進子率のよいパブリックスクールを出、オック
スプリッジに進学し、たまたま、音楽で気晴らしができればいい。
その程度の認識であったものが、親類縁者どころか友人、知
人の類に至るまでが驚愕の渦に叩き込まれるほどの激変の幕
開けだったとは、このとき、カミュ自身でささ想像もつかなかっ
たのである。

新 朝 文 庫

英国寮生物語
(1)

祥曲星祈/和海 共著

仔牛ともぐら舎版

目次

- 一 ある秋 (Side vision of Camus).....(二)
- 二 ある秋 (Side vision of Aiolos)(三二)
- 三 ある幽霊.....(五七)
- 四 ある観察(マイケル・ガーネットの手記より).....(七二)

ある秋 (Side vision of Camus)

「ああ、フェアファックスか……」
彼と授業で同じ班になるのは初めてのことであった。入学してから、まだ喋ったことはない。

最初のホームルームで、名前を読み上げられた時に、造りの繊細な顔に似合わない大声で返事をして、クラスの笑いを買っていた。それは決して馬鹿にした笑いではなかったのだが、白い頬を真っ赤に染めたまま、一言も紡がず黙って正面の黒板を睨み付けていたのが印象的だった。フェアファックス、というのはスコットランド起源の姓だから、北の方の出身なのかも知れない。……もっともその後の彼の行動は、黙ってれば女の子と間違えそうな容姿とはかけ離れたもので、カミュの印象としてはむしろ活発で少し騒がしいくらいのものであったのだが。

すぐに教壇に視線を戻すつもりが、カミュはなかなかその少年から視線を外せなかった。少年が、あまりにも真剣な眼差しで、教授の手元を見つめていたので。

「ものすごい集中力だな……」

カミュ自身、それなりの集中力には恵まれているつもりだったが、こんな人目をひかずにはおかぬ程の集中力にはついぞ出会ったことがなかった。

「……と言った。では作業上の注意を二三述べろ」

フリッツ教授のよく通る声が聞こえて来て、カミュははつと教壇に視線を戻した。

「一つ。横着をしてスポイドと毛細管を同時に作るなどということは考えないように。長く引き延ばしすぎると曲がる。一つ。

ガラス管の廃物利用はしない。火傷したくなければケチらずに長いものを使うこと。一つ。これが一番大事だ。熱した部分は当然だが数百度になっているので、完全に冷めるまで絶対に触らない事。以上、作業開始！」

一気に、教室は喧騒に包まれた。教壇の前に学生が殺到し、早速誰かがガラス管を削って教授に怒られた。カミュが自分の分のガラス管を手に入れて自分の班に戻ってくる時、四人のうち二人は既にベアを組んで作業を開始していた。バーナーは二つだから、カミュは残った一人と組むことになる。待っていたのは、フェアファックスだった。

「……まじろく。」

その声をかけて、この華やかな外見をもつ少年のファーストネームを忘れてしまったことに気付いた。皆は『赤毛』と呼んでいるが、本人はどうも気に入らないらしい。カミュは物心つく前から『赤毛』と呼ばれているので気にならなかったが、彼は慣れているのだろうか。

「……ごめん、君の名前覚えてないんだ。……なんて呼ばばいい？」
既にクラスの有名な男子になりつつある彼の名前を覚えていないとは、却ってわざとらしくて気を悪くするかも知れないと思っただが、少年はほんの少し両目を見開いただけで、ミロ、が、いい、と返してきた。

そういえば、彼と同室のアイオリア・エインズワースがそう呼んでいたよき気がする。

「じゃあ、宜しく、ミロ。」

のならば『困ったな』という類いの笑みであることに気付いたかもしれない。

ポールは、この学校でのカミュの唯一の知り合いだった。案内されたハウスの自分のベッドの横にポールの姿を見つけたときは、びつくりすると共になるほど、と納得もしたものだ。自分だって音楽目当てでこの学校に来たのだから、ポールにとっても当然の選択だったに違いない。……もともと、カミュを見つけたポールが椅子を蹴って立ち上がり、「ルーファス！」と大声でぶちまけた時には、ほんの少し彼の選択を恨んだものであるが。

ポールと知り合ったのは、地元付近の町の聖歌隊が集まって合同コンサートを行ったときだった。当時アルトを歌っていたカミュが、デュエットで組まれた隣町の合唱団のボーイソプラノがこの少年だったのだ。ポールはカミュの声とサポートがいたく気に入ったらしく、二人の間にはその後しばらく文通が続いた。カミュは地元ではミドルネームで呼ばれているので、ポールもカミュのことを『ルーファス』と呼ぶ。カミュはこの、父親が自分と同じ赤毛を持って生まれた息子につけた名前を好んではいたが、あまりにも無視され続けているファーストネームの響きも気に入っていた。誰も知らない環境に移行するにあたって、ミドルネームは秘密にしておこう、そう思った矢先の出来事だったのだ。

「ポール、悪いけど……僕は、まだスクール・クワイヤに入るとは決めていないんだ。」

「ルーファス！ ルーファス！」

堅牢な石畳の小道を軽い足音と共に駆けてくる小さな人影をみとめて、カミュは化学棟に向かう足を止めた。カミュより頭一つ分ほど小さな同室のクラスメイト、ポール・ラエリック・ス・リッジウェイが、華奢な右手を精一杯にふって駆け寄ってくるどころだった。

「きてきたよ！ スクールクワイヤの練習、今日の夕方やってるって！」

ライトブラウンの巻き毛を汗で張り付かせ、きらきらした二つの瞳がカミュを見上げる。弾んだ息の間から零れたその声は、鈴のようなボーイソプラノだ。

「情報が早いな、君、この学校の聖歌隊に知り合いがいるの？」「勿論！うちの町の聖歌隊から何人もここにきてるし、従兄弟もいるもの。従兄弟は、君の声を聞くのをとても楽しみにしてるんだ！僕が何度も君のことを話したから……」

カミュは、首をかきつけてほんの少し笑った。その微笑みは、夏の名残の陽光を浴びて涼やかに見えたが、彼をよく知るも

弟と大して変わらない背丈の少年と並んで歩き出しながら、カミュは唇の端に笑みを残しつつ慎重に言葉を選んで言った。「そりゃ、僕だってそうだよ！　ここには、スクール・クワイヤの他にまだ二つも聖歌隊があるんだもの。当然、他の二つも聞いてから決めるだろう？」

「どうじゃなくて……合唱をやるかどうか迷ってる。少なくとも、歌はやらないうもりなんだ……入るなら、伴奏で入れてもらえたら、と思ってる」

「ええ？」

恐らくかつてのカミュを知る誰かが聞いても驚くであろう、しかしカミュにとっては自明の返答に、小さな少年の足取りが鈍る。「どうして？　君みたいなアルトは滅多にいない逸材だって、リード先生も言ってたのに！」

「その評曲は有難いけど……実はあの後、僕はオルガンに転向したんだ。だから、二三年ほどは主に伴奏を受け持っていて、あんまり歌っていない」

「ええっ？」

二の腕を強く引かれ、カミュは小径の途中でやむなく再度立ち止まった。大きなブルーグレイの瞳が、こぼれ落ちそうなほど見開かれて、カミュを見上げている。何故、どうして、と訴える眼差しが、二年前の事件を思い起こさせる。

カミュがオルガンに転向する、と言った時の、主席を争っていたボーイソプラノ二人の凍り付いた瞳……

「そ……どうだったんだ……知らなかった……」

て、それぞれの班の席に別れる寸前、ポールはもう一度カミュの袖を引いて言った。

「ルーファス！　きつとだよ！」

最初の化学実験は、ガラス細工から始まった。つまり、これから化学実験で使うガラス器具を自作せよというわけだ。直径六ミリ、長さ三十センチほどのガラスチューブが教壇の前に山と積み、一班に二つずつガスバーナーが配布される。まずガスバーナーの扱い方を全員が学んだ後、化学教授のモニター・フリッツがおもむろに洗面器一杯の水を一班にひとつ配り始めた。ざわつく生徒を前に、教壇の前に立つたフリッツ教授はひととき大きな声を上げた。

「紳士達君！　あらかじめ言っておくが、この実験は必ず毎回火傷をする者が現れる。今、君たちの前にポール一杯の水を用意したが、これで足りる怪我でとめておくように！　万が一、酷く痛む場合は、我慢せずにすぐに申し出る事。医局も準備を整えておる。よろしいですか？」

教室がしんと静まり返る。一体何をさせられるのだろうか、と、どれも不安げな眼差しだ。

「作ってもらったものは二種類ある。一つはスポイトだ。これから三年間使うから、予備も考えて四五本あればよろしい。もう一つは毛細管だ。試験管内の液体を熱する時に突沸を防ぐため、沸騰石の代わりに入れる。太さは三ミリ程度、これも五

明らかに気落ちしてうつむいたポールを見て、カミュは遂に己にも聞こえないほど小さく嘆息した。：ポールのカミュに向ける眼差しは、純粋だが複雑だ。彼のソプラノを引きたせるアルトに対する所有欲、年の割に大人びた友人に対する憧れ、同世代の子供たちから明らかに抜き出でてしまっている、音楽に対する知識を共有出来る仲間への同族意識、そして、彼自身が一番よく知っている、少年合唱の寿命の短さ思う時の情愛の念……

頭では理解出来ても、カミュには真面目な受け止める勇氣はなかった。自分には、同じ強さの情愛を返せない、と思うからだ。……同じ理由で、二年前、アルトをやめてオルガンに逃げた。自分の適性を考えれば結果的に正しい選択だったと思っ

ているが、逃避であつた、という事実は変わらない。

音楽をやるなら、一人がいい。少なくとも大人になるまでは、あれからずっとそう思っているのに、こんなにも素直に容れ

られてしまつと、その決意が揺らぐ。

ポールはまだ変声までゆうに一年、うまくなれば二年あるかもしれないが、カミュは自分の変声までを長く待てど、一年と見積もつていた。もともと、歌が嫌で止めた訳ではない。ならば、一生で最後の一年くらい、歌つてもいいのではないか、と思つてしまふのだ。この一年を捨ててしまつて、その後後悔する羽目にならないか、と……。

結局、見学に行かないとも言えず、カミュは化学の実験が終つたら聖歌隊の練習を見に行く約束をした。化学棟に着い

本程度作成すること。作り方を真演してみせるから、よく見ているように。」

フリッツ教授はガラス管を一本とると、両手に捧ぎ持ち、その中央をバーナーの火で炙り始めた。一見したところでは、火からのガラス管と異なる部分はない。教授は何度かガラス管を炙り返した。変化は一瞬で起こった。四度目に火から外された時、ガラス管を捧ぎ持った両手が一気に左右に離れたのだ！　学生たちがあつと息を飲んだ瞬間に、ガラス管は炙られた部分が細く引き延ばされ、左右に二対のスポイトの形が出来上がった。

「すごい！」

一気に教室がざわめいた。まるで、手品を見ているかのようだったのだ。

「静かに！　御覧の通りだ。理屈はわかるな？　ガラスを溶かし過ぎると、重みでガラスが垂れて真直ぐなスポイトが出来ない。一気に引つ張る事が重要。力を込めなければ引つ張れないようでは加熱が足りない。これをもっと長く引き延ばして、真ん中の部分を切つたものが毛細管だ。御覧の通り」

騒ぎたいさかりの学生たちが、固唾をのんで教壇を見守つて

いる。カミュも真剣に演説を見つめていたが、ふと、目の端に

斜めから差し込んで来た反射光に教壇から視線をそらした。

光の主は、斜め前に座っていた。ポールに負けるとも劣らず小さな身体をした、金髪少年だ。

の二本の柱のもと、今のところ、この大オーケストラは音楽・人間関係共に非常に良好な状態を保っているが、彼等が心配するのはこの十二月以降、自分達が抜けた後のことだつた。

来年はどうしても少しレヴェルダウンするだろう、と、彼等の常任指揮者で、コントラバス弾きでもある音楽部の教授ミスター・ブレインが彼等に言ったことがある。もともと、彼等の学年は人数が多いのだ。それに反比例するように、彼等の一つの学年は人数が少ない。そのまた次の学年は、歴代一、二を争うヴァイオリン経験者が入つたことと、全てのパートに比較的バランス良くメンバーが散らばつたことで安定しているが、更に下の第四学年は、残念ながらやはりあまり人が入らなかつた。——したがって、気が付けば彼等の話題は、今年入団する第三学年の新生活を如何に集めるか、になつてしまつたのである。下級生の面倒ばかりみて自分の練習が出来ないコンサートマスターの常で、リハーサル開始時間より一時間早くホールにやつて来たシオンは、リハーサル室の扉を開けた途端に聞こえて来たティンパニの音に驚いた。彼の耳には、童鹿の叩くティンパニの音を聞き分けるなど雑作もないことであり、聞こえて来たのはまぎれもなく、この五年間練習時間五分以上前に現れた事のない童鹿本人の音だつたからだ。

「童鹿！ どうしたんだ、こんな早く——」
残り三か月になつて魔が差したか、と続けようとして、シオンは言葉を飲み込んだ。バス・ドラムの陰から、小さな赤毛の少年が顔を出したからだ。

「シオン！ 見学者番だ！」
新生活にティンパニを得意げに叩いてみせた童鹿は、遠目にも分かるほど明らかに胸を張つてみせた。

「見学者？ パーカッションの？、この時期に？」

思わず個人練習の予定を忘れて駆け寄ると、その小さな新人生は礼儀正しく頭を下げた。
「カミュ・ルーフラス・パードウと言います。パーカッションの経験はないのですが、是非見学させて頂きたくて参りました。どうぞよろしくお願いします。」

「こちらこそ！ よく来たね……びつくりしたよ。パーカッショんはいつも最後まで人が来ないから？ 私はシオン・ハーシェルだ。ヴァイオリンを担当している、よろしく！」

手を差し出すと、赤毛の新生活は臆する事なく握り返してきた。こういう反応の良さは、特にパーカッションパートには重要な資質だ。細身の身体に似合わず、手がしっかり育っているのもいい。シオンは、『人当たりのよい』と教授陣に受けのよい笑顔全開でカミュに笑いかけた。何事も、第一印象が肝要だ。折角の金のタマゴ、逃してなるものか。

「よろしければ、動機を伺つてもかまわないかな？ 何故パーカッションを？」

「それは……」
少年が所在なりに俯いた。おや？ と不思議に思つてその顔を覗き込むと、童鹿がははは、と笑つて縮まつている新生活の肩を叩いた。

「君が？」

「カミュ・ルーフラス・パードウ。呼ぶのはこれでいいよ。」

「カミュ・ルーフラス・パードウ……じゃあ、カミュ。」

笑つて手を差し出したら、意外に大きな手が握り返してきた。ピアノ弾きのカミュと大して変わらない大きさだ。身長が頭ひとつ分離れていることを思えば、かなり大きな手と言つてよいだろう。

交代でパーナーを使い、まずはスポイドを作る作業が始まつた。ガラス管を持つ左右の手にかかる張力を確かめながら、一気に引く。スポイドの口をガラス管の丁度中央に持つてくるには、ガラス管をまわしながら、引き延ばす部分を均等にあたためなくてはならないが、これがなかなか難しい……引き延ばされた部分が溶けたガラスの重みで下に垂れ下がり、スポイドの口が傾いてしまうのだ。
二本ほど傾いてしまつたが、漸く指定の五本を作り上げると、ミロが先の凄まじい集中力でパーナーに向かつていた。何とほなしに、彼の作り上げた作品を見て、カミュはぎよつとした。

工芸品のように美しく形のそろつた完成品が、綺麗に並べられていたからだ。

意外だ……

思わず、不躰なほどまじまじと眺め直してしまつたが、ガラス細工に全神経を集中している少年は気がない。

まっすぐな眼差しが、青い炎から引き上げられた透明なガラスを見つめていた。その視線の先には、他の四本と同様、完璧

な曲線を描くスポイドが出来上がつている。

ふと、カミュは奇妙な違和感に捕われた。目の前の少年の集中力が、先ほどとは別のところに向いているよな気がしたのだ。
ミロが左手をガラス管から放した。漸く冷えて来たガラス管は、スポイドの形を保持したまま固まつている。ミロは暫くその中心を眺めたあと、ふとその指を今火にかざしたばかりの細いくびれに伸ばした。

「あ——」

「熱つ!!!」

小さな悲鳴が上がつて、小さな少年は半歩ほども飛びすざり、折角上手く出来た作品を取り落とした。軋るよきな言葉をたてガラス管が粉々に砕け散る。後ろの班のベアがぎよつとして振り返り、床に散つたガラス片を見て、納得したようにまたすぐに自分の作業に没頭していった。

「ミロ！ 大丈夫か？」

カミュは慌てて机を半周し、眉をしかめて左手の指先を見つめているミロの近くへ寄つた。きつかりと焼きこめて押したように、入さし指と親指の先にガラスに触れた痕が残っている。すぐに手を離れたお陰で、それほど酷い火傷にはならなかつたようだ。

「え？ ああ、大丈夫……びつくりした……熱いんだ……」

「当たり前じゃないか……すぐに氷水で冷やした方がいい。絆創膏を貰つてくるよ。」

失礼、とあとの二人に断つて水のボールを取り、ミロの目の前に握えておいて、カミュは教壇に絆創膏を取りに走った。よく見渡してみれば、既にどの班も一人や二人は氷水のお世話になっていて、なるほどフリッツ教授の注意は誇張ではなかったのだと納得したのであるが。

「……それにしても、普通、わざわざ触るか？——」
目の前で起こった出来事をもう一度頭の中で再生してみる。……あれは、不注意ではない。あきらかに、わざと触ったのだ。どうやら、熱い、ということをおぼえていたようだが、それにしても……

直前に感じた違和感は、突拍子もない何かをやらかしそうだし、という予感だったのか。

つらつら考えながら机までもとつてみると、ミロが肩を疊めながら、氷水に左手を浸していた。

「もう出してもいいかな？　なんだか痺れてきた。」

「仕方ないよ、火傷した分は冷やさないよ。でもまだ毛細管を作っていないから、とりあえず傷を覆って先に作ってしまわないか？」

傷の痛みより何より氷水が冷たかつたらしい。ミロは一言えうする、と咳くと、ほつとしたまうにボールから手を引き上げた。きょんとアイロンの当たったハンカチをポケットから出し、傷を避けて手を拭う姿を横目に見ながら、貰つて来た絆創膏を差し出そうとして気づく。人さし指と親指をやられているから、絆創膏の紙を剥がせない。

おもむろに絆創膏の紙を剥いて差し出したら、またびつくりしたような瞳がこちらを見上げていた。
光の加減で、少し頬がかつて見える。本立当に、綺麗な青の腫だった。

「手、かして。」

嫌がるかな、と思つたが、とりあえず否定の言葉がないので、なるべく傷が擦れないように絆創膏を巻く。親指を手当てして、人さし指にも巻こうとしたとき、傷の近くに小さなたこがあるのに気付いた。

「……あれ？」

よく見ると、他の三本の指にもあるようだ。不意に身長の割に大きな手の理由に思い当たり、カミュはああ、と納得の形に口を開きかけた。

何か放棄品をやつているのか。

尋ねようとしたまきにその時、背後からフリッツ教授に肩を叩かれた。

「ほう、とうとう六班もやつたな。大丈夫か？　フェアファックス」

「大丈夫です」

「よろしい。実験を続けたまえ。ただしその前に床の残骸を片付ける事。掃除機はあとでまとめてかけるから、大きな欠片だけ帚でまとめて前の廃棄バケツへ。くれぐれも破片で手を切らんようにな」

「はい」

「それと、ちゃんと時間内に終わる事！　丁寧な仕事は結構だが、まだ毛細管を作っておらんのは君たちだけだぞ？」

気が付くと、既に日は傾きかけていて、早い班は既に後片付けを始めている。慌てて引つ張りだこの帚を借りて来て破片を片づけ、毛細管を作り、後片付けを済ませた頃には、すっかり授業の終了時間も過ぎていた。教室の出口で、じりじりしながらボールが待っている。仕方なく、カミュはまだ今日の実験記録を書いているミロに声をかけた。

「ごめん！　ちょっと約束があるんだ。先に失礼してもいいかな？」

「え？　ああ、ごめん。どうだい」

「それじゃ、また！」
ブックバンドで留めたノートと教科書を抱えて、化学棟から駆け出す。遅いよ、もう！　とふくれるボールに謝り、音楽棟に向かいながら、カミュはミロの放棄経験を聞きそびれたことを思い出していた。

2.2nd week

音楽棟の最上階に、リハーサル室がある。この学校のオーケ

ストラは三つあり、いずれもこのリハーサル室にはお世話になっているが、十曜の夕方は一番大編成のオーケストラが占有出来る事になっていた。

一番大編成のオーケストラだからといって、一番上手だと言う訳ではない。

実際、もつともメンバーの実力が高いのは、一番目の規模を持つ室内オーケストラだ。ここは殆どが音楽院生で占められているので、初心者も勿論中レベル程度の経験者ですり入れない。大編成であるのは初心者を歓迎している性質でもあり、ソリストイックな難曲を得意とする室内オーケストラに比べ、よりサークル的な雰囲気強いオーケストラになっていた。

とはいえ、その演奏会の曲目は決して難易度の低いものばかりではない。

現に今年も、メインプログラムはサン・サンスの交響曲第三番『オルガン付』で、美しいメロディーと華やかなワイパーレの陰で、放棄品はアンサンブルの難しさに泣かされるといった具合だった。

現在の団長は、ドウコ・ジェファーソン・オルダレン、中国系でファーストネームは漢字で書けば『童虎』となる。パーカッションのパートナーだが、上級生八年生の彼は、この十二月の定期演奏会で引退し、アレベルテストに備えて最後の追い込みに入る。同じくこの十二月で引退するコンサートマスターのシオン・メルベリ・ハーシェルは、童虎と同じロゼッタ・ハウスで去年まで同室であり、誰もが認める童虎の親友だった。こ

していただろうと思うのだ。ただしオルガニストとして、だが。ポールの従兄弟グレッグは、スクール・クワイヤと教会聖歌隊の両方に属している。スクール・クワイヤの方はそれなりにメンバーがいるのだが、教会聖歌隊の方が危機的状況にあるのだ、とポールは訴えた。理由は日曜日の午前中が礼拝でつぶれるからで、なるほど、よほど信心深い人間でなければ続かないに違いなかった。

「それ、總習は、オーケストラと重ならないかな？」

思いがけず前向きな返答が得られた事に、ポールはびつくりして顔を上げた。

「勿論……あ、土曜の夕方が重なりちゃうけど、それはオーケストラを優先していいって言うってたよ。君ならもう声も出てるから大丈夫だつて。……本当に、考えてくれる？」

「教会聖歌隊の方だけなら……。礼拝には、もともと出るつもりでいたし……」

「本止む!? ありがとろー! ルーファス!」

ポールは、小さな両手でカミュの右手をがっしりと掴み、ブンブンと振り回した。カミュは、同学年の中でもかなり落着いて大人びている。そんな彼が自分を見下ろして優しく微笑ってくれているのを見て、ポールは有頂天になった。クラスでは、ミロウエアファックスが『美人』だと騒がれている。だが、ポールの目には、ルーファスの方がよっぽど美人だと映っている。……自分の小さな背丈がもどかしく、早くルーファスのようになりたい、と思うのだ。

優しく微笑んでいた赤茶色の瞳が、ふと小さな少年から外れて、何かを追った。ポールがつかれて振り返ると、丁度ミロウエアファックスがヴァイオリンケースを抱えて音楽棟に入ってきたところだった。一瞬、視線が合ったが、ミロはそのまま一番入口近くの練習室の鍵を差けて入ってしまった。おそろく、選択音楽の課題の練習に来たのだろう。

「……彼はどうかかな……」

ふと、カミュが独り言のように呟いた。

「……え? 何が?」

「いや、あの身体なら、まだ半分ソプラノが出るんじゃないかと思つて……。聖歌隊、人が少ないんだろう? 勧誘してみたらどう?」

その瞬間、ポールの頬にかつと朱がさした。彼以外のソプラノにルーファスが目を奪われた。そのことが、たまたま悔しかつたのだ。

「フェアファックスなら、先輩が勧誘したよ! でも、ものすごい勢いで断られたつて。あいつ、ちょっと見た目がいいからつて、すぐつんけんしてんだ。性格悪いよ!」

口にした途端に言い過ぎたと後悔が差したが、止められない口だった。大体、先日の化学実験で同、班になって以来、カミュはどうもあの金髪少年に興味を引かれているらしい。それはカミュ自身さえ気付かないような僅かな変化だったのだが、ずつとカミュの視線を追っているポールにはそれが分かるのだ。

「オレがスカウトした」

「お前か? どこで!」

「礼拝堂、この間のスクール・クワイヤの練習だよ。バスが足らんとかいうんで手伝いに行つたんだが、そうしたらもうチビっこいボーイソプラノと一緒に彼が見学に来ててな。練習が終わつてもパイオルガンをずつと見上げてたから、オルガン弾きたいのか、と声をかけたんだ」

「……お前、まさか……」

「そ、正確には、うちのオケは今オルガニストを募集していると言つたんだ。今入ればもれなく、サンⅡサインスのオルガンパート付きだぞつてな」

「……童虎……」

流石に目眩を感じて、シオンはカミュの前であることも忘れ、右の親指と人差し指でこめかみを押さえた。……人様のサークルに見学に来た新人生を横取りし……いや、この際、それはお互い様だと忘れてもいい……しかし、いくら次の定期演奏会が『オルガン付き』だからつて、『オルガニスト募集』はないんじゃないか?! そんないたいけな新人生を騙すような真似をしてもよいのだろうか。

常に閉古鳥が鳴いているパーカッションの老翁には、何もせずとも希望者が殺到するヴァイオリンの人間では太刀打ちできないということなのかも知れないが。

「すみません、あの!」

思わず考え込んでしまったシオンに、漸く狼狽から脱したカ

ミュが声を上げた。

「……動機が不純なのは認めます。サンⅡサインスのオルガン付と聞いて、どうしても弾いてみたくて……普通にオルガンが弾ける程度では、絶対にそんな機会はないですから、でも、オーケストラにも興味があるんです! 僕はオルガンの他にはピアノくらいしか弾けませんから、何をやつても初登場ならパーカッションパートも面白そうだと……」

本当は、パーカッションを選んだにはもう少し理由がある。パーカッションならば、誰か特定の一人とペアになることはあるまい、と思つたからだ。

先週の金曜日、化学実験の後に、ポールと合唱の見学に行つた。噂通りのレヴェルで、団員も数少ないアルトの見学者であるカミュを大歓迎してくれたにも関わらず、カミュは結局入団届を出さなかつた。

それが、帰りに呼び止められた童虎から『オーケストラ』と聞いた途端、あれほど音楽をやるなら一人で、と決めていた決意がゆらいでしまったのだ。

もともと、合わせることは好きなのだ。ただ、そこで起る人間関係のいざこざが嫌いなだけで……

合唱は、人が多いようできて、実はコミュニケーションとしては結構狭い。なにしろ、パートが四つしかないから、大所帯の割には家庭的な雰囲気が強いのだ。そこへいくと、オーケストラはもつと色々な人種が集まつていて、もう少しドライな関係を保つてさうだった。

だが、それは流石に口には出来なかつた。カミュは後ろめたさも手伝つて、『こんな動機ではだめですか?』と上級生二人の顔色をうかがつた。

シオンはたつぷり五秒ほど呆氣にとられ、それから漸く我に返つてぶつと吹き出した。彼の盟友は、お気楽な性格だが人間観察で失敗をやらかしたことはない。オルガニストのエキストラ代を浮かせる一方で、ちゃんと見込みのありそうなのを引つ張つて来たというわけだ……

「失礼! 君を笑つたのではないよ。なりふり構わぬ童虎の勸誘が可笑しくてね……だが、彼の目は確かだつたようだ。カミュ、君の動機は、オーケストラへの動機としては満点だと思ふよ。」

「……え? どうしてですか?」

「オケに興味を持つ人間の殆どは、あの楽器がやりたい、この楽器なら弾ける、と売り込みに来る。室内オーケストラの連中なんぞは、『私はこの楽器が得意です』と自信満々の人間ばかりだ……だが、我々は、個々のプレイヤーである前にオーケストラの一員だ。まず、オーケストラという集合体への興味がなければ、何事も始まらないんだよ。」

その上で、自分の適性や興味を考えてパートを選んだらいい。あまり強すぎる得意意識は、アンサンブルの邪魔になる……そう付け加えて、シオンはカミュの肩に右手を置いた。「我々は、君を歓迎するよ。早速、今日の練習で弾いてもらつてかまわないかな? 練習なので、本物のオルガンは用意でき

ないが……」

「勿論です。……ありがとっ、はい、います。」
「では決まりました。童虎、YAMAHA の DXT の使用許可は貰つてあるか?」

「ほ! 御大を持ち出すか? オレは、今日のところは電子オルガンで間に合わすつもりだつたんだが」
「どうせなら、デビューは派手な方がよかろう? このところ、休みボケで気合いが入つていない奴が多いからな。なるべく生に近いオルガンの音をスピーカーでガンガンに聞かせて、是非本番まであと三か月しかないことを思い出して貰おう。」

「わかつた。コンマス様の、指名だ。カミュ、思ふ存分弾いていいぞ。オレは DXT とスピーカーを借りて来るよ。あ、これが楽譜だ。オレので悪いが。」

カミュはヨレヨレに使い古された楽譜を喜んで受け取つた。なにしろ、オーケストラの伴奏なんて初めてだ。しかも、オルガン弾きでなくとも一度は憧れるサン||サーンズだ。

第四巻までページをめくり、オルガンパートを覗き込む。一瞬、そこに記されているものが分からずに眉をひそめ、それから何とも言えない表情になつた。

「……この楽譜、音程が全部アルファベットで書き込んである……!」

「あ、オレはリズム譜しか読めんから、音符には全部肩書きをふつてある。読みやすいだろう?」

「ええ、まあ……。すみませんが、電子オルガンをお借りでき

ますか? 少し練習しないと……」

「勿論だ。練習時間まで好きに弾いてくれていいぞ!」

「ありがとっ、います!」

カミュは丁寧に頭を下げ、移動の時間もどかしく部屋の隅のオルガンまで走つた。……真つ黒に書き込まれた音符が邪魔して、音符がよく読めない。早く練習して暗譜しないと、とても合奏で合わせるなんて無理だ……!

暫くして、人が集まり始めたホールに『オルガン付き』の終楽章のテーマが流れ始めた。いつもの辿々しいタッチと打つて変わつて流麗に流れる旋律に、団員たちのどよめきが広がる。「誰? あれ!」という囁きや指差しにも、カミュは気付かない。必死の形相で童虎の楽譜と取っ組み合う新入生を、一人事情を察したシオンが遠くから気の毒そうに眺めていた。

3rd week

一週間後、カミュが大オーケストラに入団した事実は、下級生争奪戦の勝者の喜びに満ちた噂と、敗者の恨めしい噂に分かれて伝播していた。勝者の噂というのは、ほかでもない同じオーケストラの団員とその友人たちの間でかわされるものであ

り、それは次の合言葉で始まつていた。

「オルガニストが入団した! エキストラ代が飲み代にまわされるぞ!」

一方、敗者の噂は、合唱団の一部の人間とその周辺で囁き交わされていた。最終的に所属団体を決めるのは新入生本人とはいえ、優秀なアルトと出来る伴奏者を奪われた痛手は深い。カミュの声を知っている人間が数人居た事が、更に喪失感を煽つていた。大体、オーケストラは声が変わつても出来る。だが、優秀なボーイ・アルトの声は、一年も過ぎたら失われてしまうのだ!

上級第六学年のメンバーの中には、本気で童虎に恨み言をいに行つた者も居たが、童虎の軽いあしらいを受けて「すこ」と引き下がらずを得なかつた。

「頼むよ、ルーファス、変声するまでいいんだ! スクール・クワイヤじゃなくて、教会付きの聖歌隊でいいから、入つてもらえないか? 僕……従兄弟のグレックに言つちやつたんだ。すこいアルトがいるつて……グレック、すこく喜んでたんだ……!」

慌てた合唱団の度重なる勸誘を尽く辞退してきたカミュは、三週間目に音楽棟で泣きついて来た同室の少年を見下ろして、どうとう来たか、と溜息をついた。

もともと、合唱団への入団を全く考えていなかったわけではない。ボーイの存在は予想外だったが、彼がいなくても遅かれ早かれ合唱団の練習は見に行つたであらうし、そこに童虎がいればサン||サーンズの話を振られたりしなければ、おそく入団

て『今日の練習は終わった』と返す。目に見えてすっかりしたミロの姿に、ほっとして漸く冷えた頭が、ほんの少し良心の呵責を訴えた。

大体、彼は何故人の弾くピアノなんぞ聞きたいのだろう。

つかえたり、同じところを繰り返したり、もどかしいばかりの練習なんて……

「君、ピアノも弾くんか？ 凄いな」

なんとか元氣を取り戻して欲しくて、カミュはミロ自身の話に話題を移した。

「たしか選択音楽はバイオリンだったら？ オーケストラではコントラバスだし……どっちか経験者？」

「あーっと……コントラバスは全然初めて。ヴァイオリンは少しだけ家……」

「やっぱ。ボウイングがきれいだから、きつと弦楽器の経験があるんだと思ってた」

カミュにはその難しさは分からないが、弦楽器初心者者が最初につまづくのは運弓の難しさだといわれる。同じコントラバスの二年上の先輩であるアイオロス・エインズワースに指導を受けるミロの姿は、明らかに弦楽器の弓の特殊な扱いに慣れている、ミロはどうやら弦楽器経験者らしいと、既に上学年では噂になり始めていた。

「どうしてヴァイオリンに入らなかつたの？」

納得ついでにもう一つ尋ねたら、意外な答えが返って来た。

「……だって、サガがいるから……」

「どう……かな……」

カミュはミロの姿の消えた練習室のドアを見詰めたまま、注意章ばにボールの過激な評に答えた。ミロが選択音楽でヴァイオリンをとっていたというのは、意外なようで、納得できる気がする。手先の器用さは折り紙付きであるし、あの凄まじい集中力も音楽の助けになるだろう。

行動が派手、先輩に対して生意氣、売られた喧嘩は必ず買う、等等、ミロに対する噂は既に十指に余るが、カミュにはそのどれもがミロの本質を表していないような気がするのだ。

「ルーファス、ルーファス！」

ボールに袖を引かれ、カミュは慌ててボールに向き直った。何故か、ボールは面白くなさそうだ。理由に思い当たる前に、たたみかけるように言われた。

「今日の夕食、いっしょに食べない？ グレッジにも紹介したいし……あ、グレッジもうちのハウスだよ！ 今第五学年なんだ」

「ああ……ありがとう。でも少し遅くなるかも……今日はこの上のリハーサルホールでオーケストラの練習なんだ。四時からだけだよ」

「わかつた。じゃあ、六時半に食堂で！」

礼拝堂に走り去って行くボールを見送って、カミュは再び練習室に視線を投げ、それから最上階への階段を上り始めた。まだ所属サークルが決まっていらないミロ・フェアファックスが、ひよつとしたら見学に来るかもしれないな、と思いがから。

「え？ サガ先輩苦手なのか？」

ミロが挙げた人物の名前は、カミュもまた童謡とシオンを除きほとんど最初に覚えた上級生の名前だった。オーケストラではヴァイオリンを受け持つ。歴代でも一二位を争う腕だと言われており、実力だけ比べれば現在のコンサートマスターであるシオンよりも上だという……伯爵家の出自もさることながら、姿、立ち居振る舞い、ヴァイオリンの音に全てにおいて優美な上級生だ。

「苦手なんかじゃないよ！ そうじゃなくて……すく尊敬して……」

ふわつと、ミロの頬が赤くなった。カミュはびつくりして、ミロをじつと見詰めた。

「だからつまり、気後れするっていうか……その……あの人に聞かれるのは恥ずかしいっていうか……あんなに弾ける人が居るんだから自分が入ったら邪魔じゃないかって、そんな感じ」

間の悪い時というのは、存在するものだ。カミュが口の練習風景を見られたと悟ったときも、あと数分ミロの到着が遅れてくれば、と思つたものだった。

カミュは勿論、ミロ本人もまた、このとき、ミロがこの練習部屋に一人早くからやって来た本当の理由を忘れていた。すなわち、ミロは、とある先輩から呼び出しを受けていたのだ。

はたして、ミロが赤くなりながら俯いてはそぼそと喋っている最中に、その人物は八角堂の扉を開けて部屋に入ってきていた。カミュが先に気付き、あ……と驚きの形に口を開けたが、

4th week

九月も第四週目になると、夏の名残もほとんど消え去り、冷たい秋の気配が大気に満ちて来る。

天候の変化に添うように、慌ただしい新入生の生活も漸く落ち着き始めていた。

教室の移動で戸惑う事もなく、同学年や同じハウスの先輩の顔にも馴染んできた。先週の水曜日から土曜日にかけて行われた各クラブの新入生歓迎行事で、所属するクラブも殆どの学生が決めている。カミュの周りでは、小さな出来事がいくつもあった。カミュ自身、オーケストラと教会聖歌隊に入団届けを提出したし、ボールはスクール・クワイヤと教会聖歌隊のかけもちをする事になった。そして、あのミロ・フェアファックスが、オーケストラのコントラバスパートに入団した。

いつも同室のアイオリアと二緒に飛び回っているミロがオーケストラに入団したことは、クラスでもいくらか話題になっていた。アイオリアはさっさとラグビー部に入団届けを出していたので、当然ミロもラグビー部に行くのだろうと思われていたからだ。口がきかない連中は、ミロの身長が足りないのでラグビー

部に入れなかったのだ、入部してみたらチアガールの衣装を渡されてその日のうちに退部したのだという加減な噂に興じていたが、これらの噂を口にする者にはミロ本人がたつぷりと報復を食らわせて今は落ち着いていた。

カミュとは相変わらず、化学実験の際にほんの少し喋るだけだった。実験のパートナーとしての接点しかないカミュには、やはりミロに対する風評が本人の本質を表していないように見える。実験中のミロは慎重であり、真面目であり、知的好奇心の塊でもあった。その集中力故にたまに突拍子もないことをやらすが、それはクラスメイトが言うように目立ちたいがため奇を衒ったものでは決していない。カミュにはその性格が好ましいものに見えていたと、とかく落ち着きを見られてしまふミロが気の毒に思え、化学実験以外の接点を探してもいた。しかし、いつもアイオリアと共に飛び回っているミロの生活とカミュの生活は噛み合わないことが多く、三週間が過ぎててもまだ互いに友人と呼べる距離にはほど遠かった。

彼らの新たな接点が生まれるのは、四週目の月曜日のことである。それは、カミュにとつて思いがけない失敗から生まれたものだった。

霧のような、細かい雨が、赤錆色の煉瓦の校舎に降り注いで

いた。

最後の生物の時間、始まって十分ほどでレポートを提出して生物棟を出て来たカミュは、誰も居ないグラウンドを見送かし、ハウスの方へと歩き始めた。

授業中の学校は、人影もなくまるで静かで、まるで別の場所のようだった。

たまたま以前に宿題の範囲を間違え書いておいたレポートが、今日役に立った。クラスメイトは、今一生涯レポートを書いている。皆が授業をしている時間に外を歩くのは、何か特別な機会を貰ったようで嬉しかった。

音楽棟の横を過ぎて、芝生の中の小径を歩いて、ハウスに向かう。その途中で、ふと気付いた。

今日のオーケストラの練習は、音楽棟最上階の八角堂だ。

そして、八角堂には、グラランドピアノがある――

不意に、カミュは雨の中を走り出した。息を切らせてミス・ハウスにたどり着き、自分の部屋へ戻って楽譜の入った鞆を取り上げる。そのまま、またハウスの外へ走り出て、一直線に音楽棟を目指した。

ここでは、ピアノが弾きたければ、練習室を予約しなければならない。

練習室のピアノは決して悪いピアノではないが、アップライトだった。家ではグラランドピアノを弾いていたカミュは、たまにどうしてもグラランドピアノが懐かしくなる。しかし、数が少ないグラランドピアノは、音楽奨励生に優先的に割り当てられる

ため、カミュはこの学校に入学してからただの一度もグラランドピアノに触ったことがなかった。

もしかしら。オーケストラの練習時間より前に、八角堂の鍵が開いているかも知れない。

しのつく雨で細く頬にはりついた髪を払って、カミュは八角堂のドアの前に立った。そつとノブをまわして押してみると、扉は音もなく開いた。

――グラランドピアノだ……

コンサートグラランドではないが、ベヒシュタインのセミグラランドピアノが、綺麗にカバーをかけられて八角形の部屋の中央に置かれていた。

そつと後ろ手にドアを閉め、カバーを外す。幸い、蓋に鍵はかかっていた。椅子の高さを調節し、譜面台をたてて、椅子に腰掛けた。

…何を、弾こうか。

持つて来た鞆に入っていたのは、ベートーヴェンのソナタアルバム、ラヴェルの小曲集と、バッハのフランス組曲だった。

…バッハがいい。折角のベヒシュタインだから、ベヒシュタインは、とてもまろやかな優しい音を出す。ベートーヴェンのような強いフォルテを要求される曲を弾くのは忍びない。

指ならしに、暗譜しているインヴェンションとシンフォニアを二、三曲弾いた。よく調整され、学生の力任せのタッチにざらされていないピアノは、こんな雨の日にも、澄んで柔らかな

音を出す。いつもなら初めにハノンなり何なりの指の練習をやるのだが、今日はそんな時間が勿体なかった。フランス組曲の楽譜を譜面台に乗せ、最初のキイに指を沿わせる。ベヒシュタインは、カミュが思う通り、自在に音色を変えた。

夢中に弾き続けて、何度目かの終止符にたどり着いた時、カミュはふと音後に視線を感じた。はつとして振り返ると、入り口のドアの脇に、ミロが楽譜を抱えて所在なげに立っていた。

「あ……ごめん！ ピアノ空くの待ってた？」

「え、いや、待つてない！ ごめん！ 聞いてんだ……」

聞いていた、と言われて、どきりとした。一体ミロはいつから聞いていたのだろうか？ あんなにも無防備な姿を見られてしまったのが、無性に恥ずかしかった。カミュは、理屈っぽい議論を好む割には、自分の感情を言葉にするのがあまり得意ではない。その埋め合わせであるかのように、彼の音楽には感情の色がかなり強く現れる。カミュにとつてピアノは自分自身に向かって語るための道具であり、特に人前で弾くと決めたとき以外は、ごく私的な日記帳のような意味合いを持つていた。

秘め事を見られたような羞恥心から早く逃れたくて、カミュは慌てて話をミロの方に振った。

「でも、その手の楽譜……」

「あ……これは……ちょっと触れたら触りたいなって思つて……別に目的が有った訳じゃないから気にしないでくれたら有難い。それより、このまま聞いていてもいい？」

冗談じゃない、とは言えず、思わず引きつった笑いを浮かべ

だが、結局、義理で続くものでもないことを、サガは知っていた。この学校のカリキュラムも、オーケストラの練習も、それほど甘くはないのだ。

だから、一言だけ尋ねた。君は、コントラバスが好きなんだね？と。

「はい。……ただバイオリンも嫌いじゃないです。……でも、本当に、オレもどうしているのか全然分からない……。だから、考える時間をくれるって言ってもらえるなら有難いです」

やっこのことでミロがそれだけ言い終えた頃には、話を始めてから既に三十分が経過していた。もうじき、団員が集まって来る。サガはとりあえず前向きな返答を貰った事にほっとして、ミロの肩を叩いて立たせた。

「有難う。ゆっくり考えてくれていい。決まったら、私のところまで連絡をくれるかな？ 寮の部屋は三階の三二四室。君と同じハウスだ。できれば、来週あたりには答を聞かせてもらえる和有難いのだけれど……」

ミロは、最後までしっかりとサガの視線を受けていた。そして、黙って椅子から立ち上がりそれを畳むと、ようやく一言口にした。

「分かりました。考えます。……失礼します」

カミュが再び八角堂に戻ってみると、既に団員は集まり始め

ていて、練習の準備が始まっていた。慌てて部屋を見渡すと、一番奥の隅でコントラバスに埋もれるようにして、ミロが一心に音階を練習していた。

その表情は、最後に見た表情と同じく、固く強張ったままだ。サガの用事が何であつたのか、その表情が全物語っている気がして、カミュは胃の底に鉛を飲んだまなふたりの後悔に襲われた。

きつと、ミロはヴァイオリンへの転パートを迫られたのだ。ヴァイオリンは今、切実に経験者を欲しがっているか。

心底、己の迂闊さを悔やんだ。ヴァイオリンは、経験者を欲しがっている。知っていたのに、なんと軽々しく喋ってしまったのだらう。ミロのヴァイオリンの経験を。

心の底に、サガとアイオロスの友情に対する信頼があつた。かなり早いうちにオーケストラへの入団を決めてしまったカミュは、コントラバスやヴィオラの五年生が躍起になつて人集めに奔走する姿を目の当たりにしてきた。アイオロスがどれだけ苦勞して新入生を集めて来たか。ましてミロは、その一人目だつたのだ。

まさか、そのコントラバスパートから引き抜くような真似はすまい……

その思いが、口を軽くしてしまつた。

今にして思えば、親友だからこそ、アイオロスはサガにミロの転パートを許したのかも知れないのに。

「カミュ、カミュ！ 四楽章からだ！」

ミロは気付かなかつた。

「そんな気後れをする必要はないよ。折角入つたのだから、是非遠慮しないで弾いてもらいたいな」

新たにやって来た上級生、ミロを呼び出したサガ・チェトウィンドは、ミロの台詞の言葉の言葉尻だけをとらえて言つた。勿論、このときサガはミロの遠慮の相手はコントラバスの上級生だとばかり思っていたのだが。

「ああ、先輩と待たせ合はれたんですね」

カミュが、硬直しているミロの代わりに話を継いだ。いい機会だ、と思つた。そんなに憶れているなら、ちゃんとそのことを伝えて、もつと近くに近付けるようになればいい、と思つたのだ。

「お前失礼、待たせたかな？」

「……待ってませんぞ！」

ミロが文字どおり真つ赤になつてその場にしゃがみ込む。軽い気持ちで、カミュはミロの擁護射撃をした。結果がどうあれ、カミュはそのつもりだつたのだ。

「ミロはピアノを弾きに来たんですよ。ヴァイオリンも経験者だそうです。サガ先輩に気後れして言えなかつたみたいですが」
だが、その一言が放たれた途端、ミロの真つ赤だつた顔は一変して蒼白になつてしまつたのだ。

「いや、違ふんです！ ピアノは、ホントちよつと触つてみたかつただけで、ヴァイオリンは……もう、聞かなかつたことになつて下さい!!!」

ミロの急激な変化に、サガも少し戸惑いを覚えたようだつた。微笑んでいた口元が少し真面目に引き締められ、彼の用件をつとめて事務的に述べた。

「いや、そのヴァイオリンの話をしに来ただけれどね……」

「……ええ……」

「カミュ、悪いけど席を外してもらえるかな？」

どうやら何か、自分はずいことを言つてしまつたらしい、とカミュが気付いたのはこの時だつた。カミュの認識では、ミロはあくまでコントラバスパートの人間だつた。ミロがいくらサガに憶れているといつても、今実際に楽を奏にコントラバスを学んでいるミロの今後を左右するものではないと信じていたのだ。

だが、他でもないサガが、直接ミロとヴァイオリンについて話がある、というのは……

「あ……はい、お邪魔しました」

いずれにしても、これ以上ここに留まることは出来ない。カミュは丁重に頭を下げて、八角堂を辞した。

「悪いね」

「……座らないか？」

カミュの姿がドアの向こうに消えたのを確かめて、サガは傍

らに畳んであったパイプ椅子を二つ取り出し、ミロの前に広げた。ミロはまだ、赤とも青ともつかない緊張した面持ちをしながらまっ俯いていた。

「さっきは済まなかったね。立ち聞きをするつもりはなかったんだが……まさか、カミュが居るとは思わなかったから。カミュはピアノを弾いていたのかい？」

とにかく緊張をほぐしてもらおうと、本題に關係のない話を持ちかけると、ミロは小さな声で返事を返してきた。

「弾いてました」

「どうだった？」

「下手かったです。凄く」

相変わらず俯いたままだったが、凄く、という最後の言葉に力がある。おそらく、カミュの演奏はそれなりのレベルだったのだろう、と、サガは少し目を見張った。

あの童虎の譜面を見ながらオルガンパートを弾きこなしてしまっただけから、確かにそれなりの力があるのかも知れない。「そうか……それは惜しい事をしたな。私も、もう少し早く来ればよかった。」

ミロにもう一度椅子を勧めて、自分も腰掛けると、サガはおもむろに用件について切り出した。

「時間が無いから、単刀直入に言うけれど、今、ヴァイオリンパートは経験者が必要としている。例年なら、十人とれば一人くらいは経験者がいるんだが、今年は全員が初心者なんだ。ヴァイオリンパートは必ずコンサートマスターを出さなければならな

いから、全員が初心者だと相当厳しい。かといつて、もし途中でから経験者が入団したとしても、それまで頑張ってきた他のメンバーを差し置いてコンサートマスターに据えるというのはかなり難しいんだ」

例年、この時期ほどのパートも新入生集めに必死になる。唯一の例外はヴァイオリンで、大抵希望者が定員を溢れるのだが、ヴァイオリンには他のパートにはない悩みがあった。未来のコンサートマスターになる人物を予め見定めつけておかねばならない、という点だ。

初心者が五年間必死で練習して、コンサートマスターに見合う実力を付けた例が過去にない訳ではない。しかし、そのために彼は重要な教科の単位を落としてしまった。また、全員が初心者となかなかコンサートマスターが決まらないという問題もあった。押し付けあいになるか、ポストの奪い合いになるか、表向き押し付けあっても裏で激しい工作が行われているか……いづれにしても、あまりいい雰囲気にはならない。

そんな事情から、ヴァイオリンパートは毎年必ず一人は経験者を入れるべしという条件が暗黙のうちに課されている。他のパートがとにかく新入生集めに躍起になっている間に、ヴァイオリンパートでは水面下での経験者勧誘が行われていた。今年もかなり人脈をたどって勧誘したのだが、今年はずっとも経験者が少なかった上、その殆どが室内オーケストラに行ってしまうって誰も捕まらなかったのだ。

「それで、連日皆で頭を悩ませていたときに、アイオロスから

君の話聞いた。君がどうやら彼楽器の経験者らしい、と。私も、確かに君は運指や運弓の飲み込みが早いと思っていた。ただ、ポジション移動はそれほど出来るわけでもないから、大きな楽器の経験者ではないだろう。ヴァイオリンの経験者はまずいな

いから、きつとヴァイオリンなのではないか、という話になったんだ。……その……もしい言いたくないなら無理して言わなくていいんだが……君は、とにかく、この学校に来るまでもヴァイオリンを弾いていた、と思つていいのかな？」

ミロはもう俯いてはいなかったが、両の青い瞳が内面の強い葛藤を浮かべて、じつとサガを見詰めていた。膝の上に置かれた両手は固く握りしめられ、唇は真一文字に横に引かれている。失敗したか、とサガは一瞬、ひやりとした。……やはり、ヴァイオリンを弾いているというのは、知られたくないことだったのか。

思わず息を潜めて返答を伺っていたら、小さな呟きのような声が返ってきた。

「思つてもいいです」

思つてもいいです、とはまた難しい返答だ。思つてもいいが、あまり公にしたくない、ということなのか、単純に言葉尻をとらえただけなのか……。

いづれにしても、経験者であることは確かなまようなので、サガはまさしく身体を張った努力で新入生を集めて来たアイオロスに心中で幾重にも詫びながら、今日の本題を口にした。

「それなら……本当に、不躰な質問で申し訳ないのだけれど……も

し嫌でなければ、答えてほしい。今、私が君に、コントラバスを諦めてヴァイオリンに来てくれと言ったら、誰かでも考えてみてもらえる余地はあるだろうか？」

ミロは、先ほどにもまして硬直したまま、じつと前目を見開いていた。驚くのは当然だろう。彼はコントラバスパートに入ってきたのだ。ヴァイオリンを弾く為にオケに来たわけではないのだから。

「こんなお願いは、君にも、コントラバスパートのメンバーにも本当に失礼だし申し訳ないと思つている。勿論君は私やヴァイオリンパートに遠慮せず、君が一番いいと思ふ道を選んでくれるといい。私がこんな話を君にしたのは、万が一、君の中でヴァイオリンとコントラバスがほとんど拮抗する選択肢であった場合に、ヴァイオリンパートに経験者が来てくれる可能性を諦めたくなかったからだ……だから考えた末やはりコントラバスがいいと思うなら、是非コントラバスで頑張つて欲しいと思つている。……どうだろうか？ 返事はすぐでなくて良いから、考えてみてもらえるだろうか？」

「……あの……」

漸く、小さな声で返答があった。

「……きつと、困ると思つんですけど……コントラバス……オレが入った事、本当に喜んでくれたし……。それに、やるつて言つたのはオレだし……」

サガは、何も言わず黙つて頷いた。そんなとはない、とは言えない。それは、事実だったからだ。

周りには男でそういうのやつっている奴つてあんまり居なくて…。結局それが分かるとからかわれるんだ。それで、バイオリンやっつてるって人に知られるのが嫌だった。バイオリンや、音楽つて、オレにとっつては凄く好きな事で、好きだつたら胸を張つていれたいんだけど、それは分かっているんだけど、好きなものだからこそ無神経にからかわれるのも辛くて、それで、ここに來たら授業で勉強する以外絶対に向うもんか、つて思つてた。」

踊り場の出窓にはめ込まれたステンドグラスから、薄い月明かりが零れてミロの金髪に散っている。カミュは、何か知らない生き物を見るように、じつとその光の中心に輝く二つの瞳を見詰め続けていた。何か、この少年と自分との間に固く存在していたものが、唐突に消滅してしまつたかのように感じられた。何故、彼は唐突に彼の内面を語り始めたのだろうか？ いつの間にか、自分は彼からこんな告白を受けられる程に近づいていたのだろうか？

「でも、オーケストラの練習見て、分かつたんだ。サガつて、凄く綺麗だろ？ 言つちや悪いけど、女の子みたいに綺麗だろ？ でもつて、バイオリンを弾いてる。でも、からかわれたりなんてしてない。寧ろ、凄く尊敬されて、大事にされてる。それ見たら、なんか、分かつたんだ。オレ、バイオリンでからかわれてたんじゃないんだつて。…バイオリンとか、音楽とかじゃなくて、オレ自身が、…ダメでからかわれてたんだつて。」

ミロの言葉は正しい。人の感情というものは、我々が考える

考え込んでいたら、童虎に肩を掴んでゆきざられた。

「どうした？ ほつとして、始まるぞ！」

「はい、すみません！」

慌てて、童虎の楽譜を借りて清書しなおした自筆のオルガン譜を広げた。今は音楽に集中しよう。いずれにしても、ミロとは一度話さねばなるまい。

…きつとミロは、ヴァイオリンの経験については語らなかつたのだらうから。

その日の合奏は、いつもより長引いて食事時間に食い込んでしまった。カミュは終わるなり初心者が集められている練習部屋に駆け込んだが、新入生たちは既に解散してしまつてミロの姿はなかつた。

翌日、カミュは昼食の時間にミロを訪ねた。ミロはいつも、アイオリアや同室の仲間たちと昼食をとっている。楽しそうに談笑しているところを邪魔するのは気が引けたが、時間を作つてもうえないか、と頼んだら意外にも今すぐでかまわない、と返答が返つて來た。カミュはミロと連れ立つて、音楽棟の裏の芝生に面した小径へ向かい、ベンチに腰を下ろした。

「つきまっついてくれてありがと。」

ほど外見や装飾に誤摩化されたりしないものだ。からかいたくなるのは相手の弱さが透けて見えるからであり、ヴァイオリンの髪の毛の色だのは、結局のところその衝動を止消化するためのこじつけに過ぎない。カミュはそのことを既に身を以て知つていたが、その苦い体験を誰かに告白することはおろか、自分の中で言葉にして反省したこともなかつた。

思い出すだけで自分自身に嘔吐感をもよおすような出来事を、何故にわざわざ言葉にしなくてはならないのか。

開き直りだと自分でも分かつていたが、そ、自覚したからとてどうなるものでもなかつた。

それを、今ミロはいとも簡単にやつてのけている…。

いや、決して簡単に、ではないのだらう。ミロはミロの理屈で、この件に関わつてしまつた人間に説明義務があると信じての行動なのに違いない。

「そう気が付いたんだけど、バイオリンはもう左肩オーバーしてたのだらう？ だから、正直どうしようかと思つたんだけど、ロスが初心者でも面倒見てくれるつてコントラバスに誘つてくれた。それで、オケなんてやつたことないから、少しでもまづいうのに触れられる機会があつたらいいつて、それがコントラバスだつたら、オレ、低部部が好きだからそれでも十分嬉しいと思つて有難く入団させてもらつたんだ。で、入つてみて、十分コントラバス楽しかつたし、みんないい人ばかりだつたから、ちゃんとコントラバスとしてやつていこうつて思つてたんだ。」

そこでミロは言葉を切り、ほんの少し、唇を噛んだ。言葉を

時間を作つてくれたことに例を述べたら、かまわないよ、と明るい返事が返つて來た。

「それで、話つて？」

「その…昨日のことなんだけど…。」

存外明るく見えるミロの姿に、ほんの少し戸惑いを覚える。カミュが誘いをかけた理由が分からない筈はなかつた。気を遣つてくれてるのを感じてるから、余計に辛い。

「…サガ先輩に君のことを色々話してしまつてごめん。軽はずみだつたと思つてる…。」

ようやくそれだけ押し出したら、びっくりしたような声が返つて來た。

「いや！ 君は何にも悪くないよ！ ただ…その…自分の気持ちの問題つてただだから恥ずかしいけど…だから、ホント、気にしないでいい。」

「サガ先輩の話つて、転パートのことだつた？」

「……うん…。」

ミロは、否定しなかつた。様子を伺つただけでなく、はつきりと転パートをもちかけられたのだとカミュは悟つた。

「ごめん、僕がよけいな事を言つたから…。」

「え…？ 何が余計な事？」

「君がヴァイオリンの経験者だつて漏らしてしまつたのだらう？」

サガ先輩、今年の新入生はヴァイオリンの経験者が一人もいないつて、随分前から経験者を探してたんだ。ヴァイオリンはやつぱり、いづれコンサートマスターになる人材を首てないと

いけないから：僕が余計なことを言わなければ、サガ先輩だってそんなにあからさまに転バートを持ちかけなかったかもしれない」

「え、そんな事！ いや、要は自分が弾けないから恥ずかしいっただけで、経験者とかそんな風に言われて誤解されると少し困るけど、でもそれは俺の問題だから：結局君は何も悪くないと思うよ。俺だってまさかそんな話だなんて思ってもいなかったし」

「でも、サガ先輩に頼まれたら、君はなかなか断れないんじゃないのか？」

あれほど熱意を込めて『憧れ』を口にした相手の頼みをそっくり簡単に断れるわけがない。少なくともカミュはそうだし、あのときのミロの情熱もその結果を想像させるに十分足るものだった。しかし、ミロははつきりと首を横に振ったのだった。戸惑いの欠片もなく。

「いや、そういうのは関係ない。断るんなら断るし……。ただ：ホント、自分の問題なんだ。多分……」

ミロのことを掴み難い、と思っただのは、これが最初だった。化学実験で見せた驚くべき集中力、尊敬する人物に対して、普段の派手な行動からは信じられないほどシャイな一面があるかと思えば、それほどの情熱を傾ける相手からの頼みでもきまっさり断れる、と言う。

「それならいいけど……」

ミロが本当にそう出来るのなら、これ以上自分が思い悩むこ

とに意味はない。ただ、カミュはそりしたと思っても出来ないことがある事を知っていた。案外ミロは、本当に尋常通り誰に遠慮することなく道を選んでしまふのかも知れない。だが方が一、迷ってしまうことがあるなら、その時に背巾を押せる存在になりたかった。多少なりとも、彼の前の道に分岐路を作ってしまった人間の責務として。

午後の始業の予鈴が鳴った。カミュは立ち上がり、再度礼を述べて右手を差出し、真摯にミロを見詰めて言った。

「こんなこと、僕が言えることじゃないけど、やつぱり自分が一番やりたい業をやるのがいいと思うよ。五年間続けたんだし、誰かに遠慮したりする必要はないと思っ」

Epilogue

一連の事件の決着は思ったより早く、四週目の水曜日について。そう、それはまさしく事件だった一人が溢れているはずのヴァイオリンパートに、人が足りなくて窮乏としているコントラバスから転バートが出たのだから。

アイオロスを初めコントラバスの上級生はがつくりと肩を落とし、ヴァイオリンパートの上級生はひっそりと集まって胸を

撫で下ろしていた。ただ二人、セカンド・ヴァイオリンのパートリーダーを勤める今回の人事異動の仕掛人だけは、役目と友情との板挟みになって胸中に苦い思いを隠していた。

カミュは勿論、上級生の動きなど知らなかったが、上級生の部屋のある三階から降りて来たミロを見て彼が心を決めたのを知った。ミロの頬は上気していたが、その眼差しは既に揺るぎないものとなっていたからだ。

「ミロ……」

仲間のもとへ戻り、いつものやんちゃな少年に戻ってしまっ前に、どうしても聞いておかねばならないことがある。カミュは、降りて来たミロを三階と三階の真ん中の踊り場で呼び止めた。

「……決めたのか？ 転バートの話……」

ミロは、まだ緊張の抜けない面持ちで、それでも少し微笑って言った。

「うん。そう。ヴァイオリンに入れて下さい、つて頼んで来た」

「ヴァイオリン……」

カミュは、一瞬息を飲み、それから僅かに瞳を伏せた。ああ、やつぱり……。

「君は、本当にそれでいいんだね？ 無理をしている訳じゃないんだよね？」

「無理なんてしてない。多分、コントラバスをこのまま続ける方がきつと無理になるんだ。……あ、でも、コントラバスに今までも無理に居たって訳でもないんだっ」

きつぱりとしたミロの返事を聞いた途端、カミュは、己の中に飲み込んでいた欺瞞の虚像が砕け散るのを感じた。

……分かってはいたじゃないか。こんなことを聞いたつて、ミロは無理なんてしてないと言うに決まっている。

分かっているのに訊ねてしまうのは、ミロの本当の気持を知りたいからだ。言葉を重ねれば、その内に透けて見えるかもしれない本心を見たい。なぜなら、己が安心したいから……。

ミロは本当に心からヴァイオリンを選んだのだと、安心して眠りたい。あるいは、無理をしていると分かったならば、ミロがコントラバスに戻れるよう、ミロの代わりに何度でも交渉しよう……。

随分と失礼な話だ、とカミュは思った。自分は何も曝け出さずに、相手の本心を知りたいなど。

これ以上尋ねるのはミロに失礼だと思い至り、それならよかった、と笑って言おうとした時だった。

ミロが、懸命な眼差しでカミュの双瞳を覗き込んで来たのだ。その真剣な瞳の美しさに、胸を掴まれた。何かを伝えようとする意志が、言葉よりも雄弁にカミュの意識に突き刺さった。また、あの不思議な予感が彼を包んだ。多分、これから何かが起こるのだ。彼の想像もしない何かが。

息を潜めて次の行動を待つカミュに、ミロが眼差しを上げたまま語り始めた。

「……オレ、ここに来るまで、バイオリンやつていたんだ。でも、

一

「俺達が不申妻なかつたはっつかりに……」
「任せてよ。」

かくして開戦の矢は放たれた。

新人生で混み合う中庭をすり抜けながら、アイオロス・ウィンセント・エインズワースは、今後の計画を着々とその頭脳に構築させていた。珍しくも真つ青な空が頭上に広がり、乾いた風が彼の棕色の髪を揺らしていた。

肩が軽く中年の紳士然とした男にぶつかった。

「Sorry」

と短く謝罪したが、彼の大きな歩は変わらなかつた。アイオロスはきつぱりと歩いた。彼のゆるぎなき伸びた体を覆つて余りある活力と高揚感、周囲に散逸し十目を止めずにはおれなかつた。

と、半分程渡り掛けた所で、彼は銀色の影を息咎め伸び上がるようにして一瞬歩を止めた。そしてぐるり中庭を囲む外廊を、学舎の裏に伸びる広大な敷地に点在するハウスに向かつて歩い

ていたのである。一人の少年に向かつて声を掛けた。

「サガ！」

銀色の頭髮が柔らかく巡り、淀みない足取りで近づくアイオロスに、サガと呼ばれた少年の新緑の瞳が優しく滲み答えた。彼は、サガ・エセルバート・チェトウィンドと云い、ソールズベリ伯の長男だつた。

「なに？」

すっかり目前に到着したアイオロスの視線は、サガを見下ろしている。

サガもその血筋から平均値より常に数インチは加算された身長を有しているが、夏期休暇からこちら、アイオロスの背は春の若木のように伸び続けていて、彼等の間にはいつの間にかはつきりと意識できる程に視線と角度が生じていた。

「お前、これから暇？」

二人の脇をすり抜けていった数人の生徒団が、ぎよつとしたようにアイオロスを振り返つた。

今年二月の事だつた。恒例のハウス対抗行事、取りを飾るのは大ホールでの晩餐会なのだが、これには必ずハウス毎に女装した生徒とエスコートする生徒を任立て票を競う。評曲されるのはエスコートする生徒の側なのだが、どうしても女装した生徒が騒ぎの対象となる。夜盆服(ローブデコルテ)をまとい正装した「令嬢」として登場したサガは、以来全校生徒の注目の的になつていた。

それまで、貴族と云う出自に加え物静かな生徒である彼に

生み続けることへの躊躇いは、しかしすぐ、に決意に取つて変わる。

「でも、サガに、バイオリンで経験者が居ないから考えてみてくれないか？とて言われて……。別に、自分が弾けるつて自惚れているわけじゃない。それは違ふんだけど、あの人の側で弾く事が出来たら、自分に取つてそれはどんなに糧になる事だろうつて、そう考えたら、情けないんだけど、本当に無責任だとは思ふんだけど、もし今からでも転向してもいいつて許してもらえんなら、一杯一杯頭下げて、そつちに行かせて貰いたいと思つた。」

ミロ、もういい。もう、そんなに曝け出さなくてもいいから。

そう、言つてやりたかつた。けれど声は出なかつた。

当たり前なことなのだ。軟弱とからかわれるのが嫌だということも、それが自分自身の所為であることも、安定な居場所を求める一方で、本当の望みを追求してしまうことも……。

だが、それらを素直な反省と共に認めることの出来る人間が、どれほど居るだろう……。

ある者は、それが生身の人間だ、と反省を忘れ、またある者はより見栄えのよい口実にすり替え、そしてある者は敢えて言葉にすることを拒み無かつた事にしてしまうのだ。カミュがそうであるように。

「もし、ロスとサガと二人が並んで楽器を弾いていたら、オレはどつちを見るだろうつて想像して見た。答えは、すぐに出たんだ。きつとサガだ。サガを一生懸命見ていると思う。コント

ラバス弾きになろうつて思ふんだつたら、オレはロスを見たいつて思ふなきやダメだ。だから、コントラバスは嫌いじゃない。寧ろ好きだ。でも、それは、バイオリン以上じゃない。」

ミロが、深く息を吸つた。

「自分にとつて一番何がやりたいか決まっているなら、それがやれるチャンスがあるなら、無責任でもいいつて決めた。ロスやコントラバスの人には一杯一杯頭を下げようつて。無責任でも、自分にとつて大切なものから逃げようまねは絶対にしてない。そういうふうにしかな出来ないつて、諦めた。」

それから、ふと優しい眼差しになつて告げた。だから、カミュの所為ということは何もないのだ、と。

カミュはしばらくの間、息をつげずにいた。滔々と流れるミロの言葉に胸が飽和して、ひとつひとつの言葉を感懐で捉えるにはまだしばらく時間がかかりそうだつた。このように語ることは、ミロにとつて何の苦もないことなのか。そうではない、とカミュは思う。言葉だけの反省は誰にでも出来る。だが、ミロの自省は、実際に悩み、傷付き、後悔と謙虚に塗れた者の生の肉声なのだ。

ごく自然に、頭を垂れた。それはカミュが本当に心から脱帽した、人生で最初の瞬間だつた。

「ああ、なんだ。安心した。それじゃ、本当に君は次から君の意志でヴァイオリンを弾くんだ……」

「うん。最初からそうだつて言つてるじゃないか！」

ぶつとミロがふくれた。確かに、彼は昨日カミュに宣言した

言葉を守り通したわけだ。その子供っぽさがおかしくて、カミュもついに破顔した。

「矢札：そのうち、君のヴァイオリンを聞きたいな」

「ええ？　なんで？」

「君、僕のピアノ聞いただろ？　だから、君のヴァイオリンでおあいこ。」

ミロがぼちくりと大きな目をしばたく。こうして見ると、さっきの存在感はどこへやら、どこにもいる普通の少年に見える。

「ええっ？　そんなのあり？」

「なしでもいいけど、君がヴァイオリン聞かせてくれないなら僕も二度と君の前では弾かない」

「ううっ……」

ミロは、先輩の部屋に行くのに合わせて折角櫛を入れた髪を両手で掻きむしった。そこへ、階下から焦れたようなアイオリアの声が飛んだ。

「おい、ミロ！　いつまで話し込んでるんだ？　ナポレオンの人数足りないんだ、早く降りて来いよ！」

「いつけね、忘れてた！　ナポレオン抜けて来たんだっ！」

二段飛びで階段を降りかけ、ふと踊り場に取り残されたカミュを振り返る。それから一秒ほど首をかしげ、再び踊り場に戻り、カミュのシャツの袖を掴んで勢い良く引つ張った。

「リアー！　ナポレオンメンバーもう一人追加！」

「ミロ？！」

カミュもつんのめりながら、階段を駆け降りる。

「馬鹿野郎！　六人になっちまったらまた面白くねーだろ!!」

階下から、アイオリアの怒鳴り声と、少年たちの笑い声が響いて来た。

四

一週間後、美しい組文字とカリグラフィーによつてコントラバスの応募を募るTシャツは、学内中に知らぬ者はなしという状態になつていた。

出来あがつたTシャツを両手で広げ、サガに感嘆の言葉を惜しまなかつたアイオロスは、今では毎日制服の上からそれを被りハウスでの朝食から、就寝の時間まで、何処に行くにもそれを身に付けて歩いてた。

教授連には、持ち前の機知とユーモアで対処し、なんとか彼の目論見通り苦笑の中に三週間の許可を取り付けている。最初は冷やかしばかりだった言葉掛けも、徐々に彼の成果を尋ねるものに変わり始めた。

「アイオロス！ 新入生は入つたか？」

「まだだ。中途採用も受けてるぞ？」

同学年のデスマスクに按配を尋ねられ、笑つてアイオロスは答えた。お互い手を振り合つて別れ言葉棟に向かうとリハール室からなにやら雑然とした雰囲気が出ていた。

ひよいと中を覗き、アイオロスはまさかという思いに包まれた。パークッションパートに新顔が居るのだ。慌てて中を突き切り同学年のチェロパート、シュラ・アレクサンダー・コーツに尋ねた。

「何？ 見学？ それとも決定？」

「決定だ」

「ちらと黒い瞳をアイオロスに向けてるとシュラは短く答えた。『参つた！ 嘘だらう…』」

アイオロスは前髪を掻き上げ、果然の体でパークッションパートを見詰めた。パークッションなど、普通は来ない。もともと募集人数も少なく、一学年に一人も居れば十分というパートだ。それなのに、何故あそこには新入生が居て、コントラバス・パートには余りにも馴染んだ顔しかないのだ。

物欲しげにパークッションをちらちらと盗み見ている上級生達の姿が無性に悲しかった。彼らの視線を辿れば、鮮やかな紅深の髪をした少年が、童虎に付き添われ楽器の間に埋もれていた。

喘ぐ様子ををし、立ち竦んでいるコントラバス弾きに、更に追い討ちをかけるチェリストの一言が続いた。チェロパートは経験者一名、奏者一名の希望が既に出ている。

「サン・サーンスのオルガンも奴で決定だ」

「…マジかよ」

がつくりと首を落とし、掻き上げていた手を首裏に回していたアイオロスは暫くじつと瞑目していたが、やがて短く息を吐くと言った。

「しゃーない！ まだ入らんと決まつたわけだし…」

黙つて同室の友人を見遣つていたシュラが、面白そうに口

二

遠巻きだつた連中が、以後急速にサガ・チエトウィンドとの接点を求めて奔っていた。そして、入学からこの方ずつと同室で「友人」であるアイオロスへ抱く他学生等の心情は、今まで距離を置いてきた彼等自身の後ろめたさとする替わり屈折した羨望になつていた。

おまけに、それまで漠然だつた貴族の出という認識が、ソールズベリ伯爵の嫡子と言ふ認識にもすり替つた。そんな存在に、いかにも砕けた話し様は、彼等の大分の驚愕を引き起こした。アイオロスにして見れば、それは入学当初から一貫して変わらない、ごく当たり前の態度であるのにもかかわらず。さて、暇かと尋ねられたサガ・チエトウィンドは、馴染みの深い友人であるアイオロスにしか見せない笑顔で空いていると答えた。

「じゃあ、すぐ部屋に戻るから待つて」

気持ちよくサガの都合を確保出来たアイオロスは、サガの肩を軽く叩くともと来た道を今度は早足で戻つて行つた。アイオロスの暴挙を目にした集団から小さく避難の色が飛んだが、サガも気にすることはなく、優雅と呼べる足取りでその場を離れた。

「これに、書くのか？」

サガは、サイズの真つ白なTシャツを見つづけた。

サガが部屋に戻つて十分後、勢いよく扉を開けて入つてきたアイオロスの手にはシヨップの袋があった。

「どう。これに、デカデカと広告を書く。新入生募集！ 大歓迎！ コントラバス！ つてな」

今度はまじまじとアイオロスの顔を見て、サガは口を開いた。

「まさか、それを来て歩くのか？」

「イエス！ と大きく笑むアイオロスにサガは圧された。

「授業は制服で受ける決まりだらう？」

「どう。だから、制服の上に着る。制服の上にシャツを着ちゃいけないなんて規則はないだらう？」

アイオロスは、得意顔で言い放つた。サガは自分の良識を

晴にはない考え方に、深く息を吸い直して呟いた。

「それは、どうかも知れないけれど…」

「まあ、最初の一発が勝負だな。目をつむつてやろう、つて教授に思わせればいいんだ。三週間か、二週間の間」

「新入生歓迎会までつて事？」

「どう。とにかく今年は何が何でも入つて貰わないと…」

腕組みをして深く椅子に座るアイオロスは響め面を呟いた。

「腕組みをして深く椅子に座るアイオロスは響め面を呟いた。」

「やばいなんでもんじゃない。」

九月、パブリック・スクールの第四学年以上の生徒達は自クラブへの新入生勧誘に躍起になる。特に、第五学年の学生は引退を控えた上級第六学年、今後一年間指揮をとる第六学年、新入生からやつと二年を経た第四学年に挟まれ一番自由度が高い学年で、上二学年生から正式に勧誘の指揮を任されていた。アイオロス・エインズワースは、スクールチーム・オーケストラのコントラバスに所属していたが、この私立学校に入

学するまで、楽器の類いには触れた事も無かった。入学当初、アイオロスは、同室となったサガが敬遠され、クラスの異分子のように在った事と、世間に疎い様を見かね、子分でも従える気持ちで面倒を見て居た。その折りサガがこの学校のオーケストラに入ると言い出したので、取り敢えず付添といった軽い気持ちで見学を訪れた所を、当時から大柄だった体格を見込まれ強引に引き込まれたのだった。

楽譜もまともに読めなかつたものが、こつとよく続いたのは、気さくな上級生の魅力もさることながら、数十人からなるオーケストラという楽器に、彼が魅了されたということだろう。オーケストラは不思議な楽器だ。幾種類もの楽器が鳴つたり、止まつたり、揺れたりしながら広大な一瞬の幻を作り上げる。如何に録音に残しても、それは過ぎ去つた影のようなものに過ぎず、その中に楽器として埋もれていた自らの情熱は、眺めるだけでは味わえない。個性に溢れる人間と楽器達が、ま

さしく呼吸を合わせて築き上げるものがオーケストラの首だ。その中で、コントラバスは基礎の部分を受け持つ楽器であり、他の高音楽器を更に軽々と歌わせてやるパートだ。テンポをキープしつつ、全体に目を光らせ、骨格を揺るぎなく積み重ね、構築される音楽を抱え上げる。

これ程面白味のあるパートも無い、とアイオロスは考えるのだが、世間ではそうではないらしい。とんとオーケストラのコントラバスには人が集まらない。

人が集まるのは、バイオリンやフルート、トランペット、チェロやトロンボーンなど、より個性的で独創性の高い楽器だ。

現在のコントラバス・パートの構成は上級第六学年が二名、第六学年一名、第五学年の自分が一名の計五名だ。

昨年の新入団員は無く、間の悪いことに第六学年のクリス・ロージャーは来年からアメリカに渡る事が決まっていた。十二月の定期演奏会終了後、一挙に二名にまで激減してしまうと言う事態に、パート内の危機感はかつて無いほどに高まっていた。

「俺達が不申妻なかつたばかりに……」

昨年新入生を確保出来ず、その上転校まで決まってしまうたクリスに深々と頭を下げられ、アイオロスは言い切つた。

「任せて下さい。」と。

そして、アイオロスの新学期は始まつたのだ。クリスは、アイオロスにコントラバスの楽しさを教えた最初の先生だった。クリスの丸めた背の向こう、ふと見上げた窓の外を、雲

が早足で流れていた。

「ほりつと待つてたつて新入生は来ないよな。よし！ サガ、それ頼んじゃつていいか？ 俺一巡りしてオケに行くから」
サガのいいとも、厭だとも聞かぬ間に、アイオロスは回想の輪を断ち切つて立ち上がり扉に向かつた。慌てサガは呼び止めた。

「構わないけど、本当にこの通り書けばいいの？」

「そう！ 俺が書いたんじや読めないから、読めて、目立つて格好よければなおいいつて感じ」

「君の言う『格好いい』が私にはよく理解出来ないと思ふんだけど……」

「構わないよ、サガのセンスでやつてくれ」

「どういふのが一番難しんだよ」

アイオロスは、構わない、と再三繰り返して部屋を出ていった。後に残されたサガは、ため息をついて真っ白の布を見つめた。

三

スの誘いにも消極的だ。

そろそろ練習の時間が始まる。そう思つて一先ず区切りを付けようと踵を返しかけた時、アイオロスの目に慣れた弟の、真新しい制服をまもつた姿が飛び込んで来た。

アイオロスの弟、アイオリア・エインズワースは、今年から兄と同じこのパブリック・スクールに通つこととなった。アイオロスとは髪の色も瞳の色も異なる上に、ストレートと癖毛という髪質の違いも手伝つて、まず一目では兄弟と見られない。彼等の両親を見て、人は初めて皆納得したものだ。つまり、アイオロスの榛色の癖のない髪と琥珀色の瞳はまったくの父親りであり、軽波打つ明るい金栗色の髪とピーコックグリーン色の瞳のアイオリアは母似なのだ。

その弟が、丁度中庭の向こう側を、友人と思しき少年と二人連れに歩いて来た。よほど気が合うのだろう。弾けるように二人して笑い歩く姿は、兄としてのアイオロスを少なからずほつとさせた。

弟より小柄で飛び跳ねるように歩く、恐らくこの学校で始めて出来たアイオリアの友人は、夕日に映える素晴らしい金髪をしていた。その印象が、とても強くアイオロスに残つた。

人好きされる気さくな笑顔で、アイオロスは目ぼしい新入生に声を掛けていた。新学期が始まりまだ三日と日は浅い。どの新入生もまだふらりふらりと落ちて着きが無く、アイオロ

差し出された布を手を取って見ると、布は輪になっており、そこには太々とヴィオラ・パート募集中とかき巡らされて居た。ご丁寧に安全ピンも付けられている。

「……何だ？ これ。」

アンドリユーは乾いた笑顔を見せた。その後ろに、同じように乾いた笑顔が四つ、アイオロスに向かって並んでいる。アイオロスのきりとした眉は手加減無く寄せられ、ヴィオラの面々は彼の冷やかな視線の餌食になった。

五

食事の後に呼び出されたアイオリアは、約二週間ぶりに対面する兄の姿に口を開けて見入ってしまった。

「あなた、馬鹿みたいに口を開けて冗責を見るな。」

「だって、ロス……ないだ見かけた時よりもっと凄いくてなっていない？ そのTシャツ……」

アイオロスは眉間に皺を寄せ、被っているTシャツを見下ろした。

一番初めに描かれたサガの美しいモノグラムやアラベスクは、様々の弱小部活動の募集書き込みによって乱されていた。またさらに、書き込みだけでは飽き足らず、チラシを上から張り込まれ、背中の裾に、折角だからと物理教官自作のレポ-

ト提出期限を告知する屋ひれが張り付いている。

アイオロスはちらほらと食堂から出て行く学生達を目の端に捕らえながら、弟のコメントには答えず、腕組して廊下の壁に寄りかかると尋ねた。

「お前の部屋にフェアファックスって子がいるだろ」

「うん。……何？ ロスに何かやったの？」

「……何かやるような奴なのか？」

「……悪気はないと思うけど……」

アイオリアの表情は、一瞬硬くなり、次に恐々と頷うようなものに変わった。言葉は常に無く切れが悪い。

「ミロって、お前より頭半分小さい、くしゃくしゃな金髪頭している奴だよな？」

そうだと返ってきた答えに、いつだったかの夕暮れの光景が蘇った。では、やはりあの時の少年が『ミロ』なのだろう。

「ロス！ ミロ、何をやったの？」

弟の心配と必死の籠った訴えにアイオロスは組んでいた腕を解いた。左手を腰に当ぐ、右手で額をすする。

「なんにもやってないさ。ただちよつとな、お前のトモダチは目立つっていつんで心配してる人間がいるってだけ……」

「心配？」

「そ、苛められたりしないかってそういう事だ。ま、十分やり返しているように見えるんだけどな」

アイオロスの言葉を聞いたアイオリアは、ああ……と得心のいった表情をした。それをアイオロスは見逃さなかった。

の端を上げると弓手で護面を捲りながら続けた。

「ちなみに、バイオリン・パートは定員を溢れたぞ」

「あーあ、あそこは別格だろ。比べる気にもならないね」

アイオロスは視線の先に、からこちらに固まって椅子に掛けられている新入生の間を、縫うように歩いては屈み込み、指示を与えている銀髪のサガの姿を捉えながら答えた。

「アイオロス！」

管パートの方から声が上がった。ファゴットのフレドリック・マコーマックだった。アイオロス、シユラ、サガ、デスマスク等スミス・ハウスの監督生を勤める上級第六学年のスコットランド人だ。

アイオロスは黙ってシユラに軽く片手を上げて席を外すと、フレドリックの隣に向かった。

だが、アイオロスは腕を引かれ、管パートから外れ、部屋の際にまで引きずられた。そして、潜めた声出で話しかけられた。

「アイオロス、お前の弟も今年入学して同じハウスだったよな？」

「ええ。そさですけど、何か？」

アイオロスは話の方向が見えず、当たり障りない返答をして宴会好きなファゴット吹き次の言葉を待った。フレドリックは、アイオロスに詰め寄る様に迫りながら尋ねた。

「お前、今年のうちの新人生見たか？」

「一通り見ると思いますよ」

「そうか。じゃ、お前、先週の日曜日に騒ぎを起こした新人生は見えたな？」

「ああ……あの……。ロウ・ハウスの四人組とスカート穿いて喧嘩した？」

アイオロスは首を捻って、ギョリと自分の顔に標準を当てるフレドリックの目を見返した。

寮の監督生だ。当然、その喧嘩の中に弟のアイオリアが居た事も知っているだろう。騒ぎを起こしたのは第五学年の四人と新入生三人。スミス・ハウスのハウス・マスターに連れ

られて戻ってきたのは、馴染みの弟と、短い毛をつんつん立たせたひよろりとした少年、目の悪そうな少年、それから、いつだったか弟と一緒に歩いていた金髪の小さいのだった。どうも、その小さいのが無理矢理真っ赤なスカートを穿かされたらしい、と言つことはあつという間で寮中に広まり、アイオロスも放談として耳に入れている。十中八九、フレドリックがこれから話題にのせようとしているのは、その金髪の小さいのだろう、とアイオロスは考えた。

そして、アイオロスの読みは違ふ事無く、フレドリックは、

「あの、金髪の方な」と叫びた。

「昨日もハウスマスターに、二回呼び出された」

「は？」

「昨日、町に出て、地元の子供と取っ組み合いやらかした」

「……」

「そのあと、シャワールームのドアにスカート穿いた似顔絵のピンクチラシ貼り付けられてる現場押さえて、貼ってた奴ら追い掛け回した拳銃、立て籠もった食堂のドアガラスを勢い余ってぶち破り、本人は救急車で搬送された」

「あ、それで」

今朝は食堂のドアの覗き窓にぼつかり穴が開いていたのか、とアイオロスは納得した。が、言葉には出さないうちに、横のフレデリックから、陰々とした気が迫っている。

「お前の、弟、仲良らしいじゃないか」

入学して一週間、同室の人間と「仲」がなかったらそれはそれで問題だろう、とアイオロスは思ったがこれも口に出すのは止めた。

「どうにか、ならないのか？」

微笑みながら睨まれても、返答に窮する。アイオロスは、思案の証に眉を寄せて見せて言った。

「弟にどうにかしろ、と言えろ」

フレデリックは肩で息を吸った。そして、

「止めるなよ！ 止めさせるよ！ 仲いいんだろ？」

蛇がしゅーしゅーと舌を鳴らすように言葉を吐いた。幾分その気迫に押されたものの、アイオロスはそれでも飄々と答えた。

「腹心の奴に手を出してるわけじゃないんだし、暫く様子を……」

「アイオロス！」

フレデリックの大声に、オケの面々が振り向いた。フレデリッ

クは、アイオロスの首に太い腕を回すと、それをぎりぎりとした締め込みながら囁いた。

「オマエナア、先輩の頼みが聴けないって言うのか？ 俺の、監督生としての面子を潰そうって言うのか？ さてはロウ・ハウスの回し者か？」

ギブギブ、とアイオロスはフレデリックの腕を叩いたが、彼の目の色は変わらなかった。

今年は新入生の当たりが悪かったのだ、と監督生を気の毒と思いつつ、アイオロスは件の新入生を少なからず面白いと思いはじめていた。小さいくせに全く物怖じしないらしい気性、無鉄砲に感情のままに動く朝氣、そうだったものが、アイオロスは嫌いではなかった。

今は、自分のパートの人員確保が最大重要事項だ。監督生の心痛は、監督生自身で解決してもらおう、と内定を出した時、彼の耳に先程までとは打って変わる声音が降った。

「霧蒼碧眼の美人なんだよ……。ちよつとヤバイんだってありや……」

弱つた……と渗む声。

『美人』と称したフレデリックの言葉に、知らずアイオロスの目はサガの姿を追った。

ヤバイというのなら、サガもこの二月からかなり都合の悪い事体になっていくと思うのだ。サガ本人が、上手く事を公にしないまよに務めているので気付く人間はかなり限られた者だけになっているが、件の仮装から上級生、同学年は言う

に及ばず、下級生からも誘いが来ているらしい。

その内勘違いした輩が、思い詰めたあまり傍迷惑な結果を選びはしないか、アイオロスはそっちの方が余程窮迫の事態だと思っている。あまり目に余るような者が出てきたら、アイオロスからフレデリックにそれとなく助力を願い出ようかと考えていた程だ。

「湖水地方の結構鄙びた所から出て来たらしいんだ。親類なんかもこつちには全くないらしいし……。兎に角、何かあつてからじゃ遅いんだよ。去年はバーミンガムの方で自殺があつただろう？」

自殺という言葉に思考を引き戻され、アイオロスは思った。ここまでフレデリックが食いつがるということは、ハウス・マスターか監督教官あたりから言い含まされたのかもしれない。

「分かりました。弟には言いつときます。ついでに俺も気を付けときます」

監督生に、またその裏に居るのであろうハウス・マスターや教官に恩を売っておくのは悪くない。打算に裏打ちされた親切を申し出るとフレデリックは安堵の息を漏らした。ようやく、首に巻きついた腕が緩み、アイオロスは小さくため息を付いた。

「弟からそれとなく、定量的に情報を聞き出してくれよ。名前は、ミロ・アーヴィン・フェアファックスって言うからさ」

フェアファックス！ 聴いた瞬間、アイオロスは吹き出し

そうになった。

フェアファックスとはつまり『Freak』だろう。とすれば、意味するところは『金髪』だ。しかも『Freak』という言葉自体が、美しいとか綺麗、清い、などといった意味合いを持ち、語尾に『Freak』を付ければ、フェアリー、つまり妖精となる。なんとも分かりやすい姓ではないか。そう思った所に、フレデリックに声が掛かった。

入り口に、新入生の顔と第五学年のファゴット奏者のイリヤの顔が並んでいる。つまり、音が出るまで三年と言われるダブルリードに入団希望者がやって来たというところだろう。手には黒く重そうなケースを持つていることから、少なくともアフレップでかじるか、本格的にやっていたのだろう。

宜しく頼むぞ、ともう一度アイオロスに念を入れてから、フレデリックはいそいそと呼ばれた方へと去っていった。そアイオロスは去る者の背を睨め付けそうになる自分を押しさえ張り付いていた壁から背中を引き剥がした。そして、練習を始めるべくパートに戻ろうと歩き出す。

その時、今度はワイオラ・パートの第五学年アンドリユー・シーファに呼び止められた。次は何だと足を止めかける。とても済まなさそうに、アンドリユーが十センチ幅の布を差し出した。

「アイオロス……、凄く悪いと思うんだけど、これもついでに付けてくれないかなあ……」

アイオロスは初めて相対したミロという人間に、にわかに興味を覚えた。一方で、スミス・ハウスの監督生兼オケの仲間であるフアゴット奏者、フレデリックに託ひた。これは渦中の源に十分なり得る、と。

こうも露骨に、そして簡単に人を信じ切った姿を見せる少年の幼さと、気さくにしゃべり出した相手への無防備な柔らかなさは、半端に覇気がある分厄介だ。この少年は十分征服欲の対象になり得るだろう。飾りのようにこの少年を傍らに置いて歩いてみたいと思ひ、それを実行に移す馬鹿がそのうちきつと現れるだろう。

だが、飼ひ慣らせれば、面白い。

「あー！つまり、なんだっけ？さうだ！オケの話だ！お前、やりたい楽器とかがあるんじゃないのか？」

毒を食らわば皿まで。とアイオロスは考えた。取敢えず、自分が面倒を見られる範囲に入ってきたら、この少年に手を尽くしてみようと、そう思つた。

「いや！特に：。ただ、オーケストラを生で、あんなに近くで聞いたのは初めてだったから：つい：。」

ミロの話振りは、ぼつり、ぼつりと言ひ流んだ。しかし、視線はしっかりとアイオロスを捕らえ戻らなかつた。これは、言葉に対して非常に慎重なのだ、とアイオロスは判断した。そしてその判断は不快なものではなかつた。

「で、どうだった？ お前、たしかリアと一緒にはラグビーに入らなかつただろう？」

「うん：。ラグビーは嫌いじゃ無いけど、上手くやっていけそうになかつたから：止めておいた」

「それで？ オケも上手くやっていけそうじゃないか？」

アイオロスはなんとなく、何を少年が気に止んでいるのか分かる気がしてゆつくりと再度尋ねた。

「実は、見ての通り、オレのパートは人手不足でな」

アイオロスは、ちよつと着ていたTシャツの胸を指して見せた。

「もう、ホント、この際誰でもいいから入って欲しい訳だ」

「：でも、俺、コントラバスなんて弾けないよ」

「初心者大歓迎、懇切丁寧に教える」と書いてある」

もう一度布を引つ張ると、アイオロスは笑つて続けた。

「教えるのはまずオレだから嘘は言わない。お前、今の身長の割には手も足もデカイし、骨もしつかりしているから弾くのには不自由はしないと思ひけどな」

何か踏ん切りがつかない様子だったミロの表情が、一息に明るくなつた。

「因にオレも楽器は初心者で、楽譜も読めない状態だった」

アイオロスがにやつと笑つてみせると、ミロも釣られて唇が弛んだ。そんな少年を見て、アイオロスはもう一度笑うと、今度は背筋を伸ばし改めてミロに向き直つた。

「さて、フエアアックス、どうだ？少しは考えてくれる気になつたか？もし、少しはやつてみてもいいと思ひていて断る理由がはつきり掴めないという状態だったら、一度楽器

「なんだ。心当たりがあるのか？」

「心当たりつていうんじゃないけど、まあ、からかわれやすいとは思ふよ。物凄く反応が過敏というか：普通だったらそこまで真に受けなくてもいいのにつて事でも真つ赤になつちやつたりとかするから：みんな面白がつてるんだよ：でも、すれてないつていうか、純粹な奴だよ」

十三の弟が『すれてない』だの『純粹な奴』だのと、一人前な口をきく、とアイオロスは可笑しくなつた。

「追いかけてくくらいなら可愛いけどな。流血は穏やかじゃない」

「うん。でも、ミロも分かつて無いんだよ。みんなは、半分は面白がつてるだけだし、羨ましいなつてのもあるんだ」

「羨ましい？」

「だって、女の子にもささじちゃん、あいつ」

アイオロスは盛大に吹き出した。

「なんだ、もうそんな話が出てくるのか？」

「うん。ミロを連れて街に出たいつて言っている奴結構いるよ。それで、こないだの日曜日に出たんだけど：」

「なる程な。まあいい客寄せにはなるだろうな」

「まだくつくつと笑いを納め切れていないアイオロスは、弟の顔を眺めた。

「元気が有り余つてるつてだけならいいさ。でも、気を付けろ。こないだスクール・チャーチでお前らが向かつて行つた奴ら、性質のいい連中じゃない。まともに相手していると痛い目を

見るぞ」

「お前も小さくなる必要は無いが、出来るだけ無鉄砲は止めてやれ、と言ひ残してアイオロスはアイオリアと別れた。

フレデリックへの義理はこれで果たした、と二人決め、アイオロスはコントラバスの新人生獲得に意識を集中させ部屋へと階段を上つた。

コントラバスに、一人でもいい、新人生が入つてくれれば：すれ違つた一人の少年にTシャツを冷やかされて口笛を吹かれた。この際、新人生じゃなくても一向に構わないんだが、と内心で思つたアイオロスは、片手をあげて笑顔でそれに答へた。新人生が入学し、一週間が過ぎていた。

六

翌週、そろそろ頭数の揃つてきたリハーサル室では、新人生に指事を与え終つた上級生等がアルトに取まつていた。三ヶ月後に定期演奏会を控えている団に、客演として確保するしかないと思つていたオルガニストが入団したのだ。練習への熱が格段に上がつていた。

アイオロスはバス椅子に腰掛けると、コンサートマスターのザツと学生指揮者の白いタクトを待たつた。シオンが深く息を吸ひ込み、部屋に音楽が溢れた。

アイオロスはアルトの一番後ろで、オーケストラ全体を眺めやりながら演奏していた。

ファゴットのフレデリックは、アイオロスが弟に一言いったと伝えた事と、先週末に金髪の新人入りが問題を起こさなかった事で随分落着いていた。また、パート員の問題がついに先週の土曜日に解決した事で、一心に木管に向かっていく。クラリネットもフルートもトランペット、トロンボーンとの連面も落ち着いて演奏に集中している。ホルンも一人入団が決まった。チエロは雑多な雰囲気だがこの状態が安定している印しだった。このパートにはあまり濃密感はない。ヴィオラの第五学年アンドリュウの顔色は少々青い。上級第六学年を含めてやつと六人というパートに、新人団員ゼロはきついであろう。

弦パートは、一学年一フルトは欲しい。しかし、学生オーケストラなど、バイオリンを知るものこそあれ、ヴィオラの名前など始めて聞いたという人間もいる程この楽器の存在感は薄い。結果、いつもバイオリンは人で溢れかかり、ヴィオラは蕙息吐息の状態が万年化している。発音が悪く、中間音域を支える楽器だからこそしっかりと人数を確保しておきたいパートであるのに、常にこのパートは人員確保に難儀していた。

いつも以上に音を外しているアンドリュウに、アイオロスは他人事ではない気鬱を感じた。コントラバスも、未だ入団希望者が現れていなかったからだ。

バイオリンの音が膨らんだ。コンマスであるシオンの堂々

アイオロスは前アルトに着席し運弓の確認をしていた先輩奏者に声を掛け、静かに楽器を床に寝かせてから慌てミロ・フェアファックスを追いりハーサル室を後にした。

「フェアファックス！ フェアファックス！」

音楽棟のアトリウムを、つんと頭を擡げて歩く少年に、アイオロスは大声を掛けた。二度無視されて、三度目にぐるり振り向きざまに青い瞳に睨み付けられた。脳裏に、ちらほらと入っているミロ・フェアファックスについての噂が弾けた。

曰く、生意気、不遜、自惚れ屋、気位が高い、喧嘩っ早い。

アイオロスは、ひとまず足を止めさせる事に成功した新人生に、俗受けする親しみを込めて話し掛けた。

「フェアファックス、さっきオケの練習を覗いていただろう？興味があるんならちゃんと中に入つて見ていかないか？」

親指で今来た階段を指すアイオロスを、ミロは尚も詰めた眉間を解かずに見上げていた。薄い唇は硬く引き結ばれ、少しの事では開かないという意志が取って見える。

「フェアファックスって呼ばれるのが気に入らないか？」

アイオロスはにやりと笑った。さてどう答えるか、と様子伺うとますます顔に皺を寄せて唸るような返事を返して来た。

「好きじゃ無い。ミロかアーヴィンがいい」

「よし！ じゃあ、フェアファックス、さっきの返事はどうなんだ？ オケの見学はもうしないのか？」

呆気に取られてアイオロスを見上げる青い瞳は、険を忘れ

とした演奏と、第二バイオリンのトップに座るサガの姿が鮮やかに集団の中で映えていた。再来年のコンサートマスターは、間違い無くサガになるだろう、とほんやりそんな事を思った。その時だった。アイオロスはサガに向かう一心な視線に気が付いた。静かにその視線の元を辿ると、わざと半開きにしていて扉の影から目の覚めるような金髪が覗いていた。

扉は、この時期少しでも新入生を獲得できるよき、音や練習風景が自由に見聞き出来るように開いている。中に入つて勝手に見学して良いという事になっていた。

しかし一向に金色の頭は扉から内へは入つて来なかった。そのうち、だんだんに少しずつ、少しずつ覗かせる頭髪の面積は広くなり、とうとう小さな不審人物の面が扉の影からはみ出した。

ミロ・フェアファックスだった。

アイオロスは適中した予測ににやりと笑いを浮かべる筈だったが、それは不発に終わった。

ミロは、呼吸も忘れていたのではないかといつた様子で、ただただひた向きに第二バイオリンの先頭席を見詰めていた。アイオロスはその後ミロ・サーンズが終わるまで注意をミロから放せなかつた。甘さの欠片もない、食い入るような眼差しがミロに対する第一印象となった。

曲が終わりに、学指揮の注意が渡り始めると、ミロの頭髪は扉の影からすつと消えていた。

「クリス……ちよつと外す」

緩み、その拍子に奥に隠された幼さが透けて現れた。年相応よりむしろ子供っぽいとも見えるミロの反応は、アイオロスを楽しませた。反撃の機会を与えず、さびに話掛けた。

「オレはアイオロス・エインスワース。あのオケのベースだ。それからお前と同じミス・ハウスの第五学年」

きつともつと驚いた顔が見られようと、姓と寮の名前を言ったのだが、どうだろう、ミロ・フェアファックスは、すうつと真面目に目を見開くと、つい一瞬前の警戒心を徹塵も残さず。

「ああ……！」

と、大きく声を吐いたのだった。

「リア……じゃなくて、アイオリアの兄さんか……」

ミロは、大きく息を吐いて肩の力を抜き再度アイオロスを見直した。

「ああ……気が付かなかつた……Tシャツの話は聞いてたのに……」

もう一度ミロはため息を付くと、今度は気恥ずかし気な微かな笑みを顔に浮かべていた。

今度はアイオロスが言葉を失う番だった。この二学年下の少年の持つ感情の起伏の激しさ、他人の視線を斟酌しない無防備さ、臨戦態勢から一切の警戒を解いてしまったあどけない状態へのこの落差。

この落差には、中間の棚は存在しないのか？

すつかり和らいだ態度でアイオロスを見上げる二つの青い視線には、友人の兄という人間への信頼と親しみか入つていなかった。

「成る程、吠えついたりしない、な…。つまり鼻も効くというわけか。で、嗅は誰がするんだ？」

急に隣のパートが賑やかになり、少々うんざりしているシユラが話を続けた。アンドリユーは吹き出し、サガは同調出来ずに、少し控えめな態度で話を聞いて居た。

「悪かつたな、まだ仔大なんだ。うちの。でも、そのうち見てろ。立派な…」

「なんだ？ピレネー犬ぐらいにはなつて人様の役に立つのか？」

「いや、そこまでは。でも、うまくいけばブラドルールくらいにはなるんじゃないかな。なつて欲しいというか……」

アイオロスとシユラの歯に衣着せぬやりとりで笑い出したアンドリユーが口を挟んだ。

「可哀相だよ。本人がいない前でそんなに言っちゃ」

「本人が居ないから言えるんぞ？」

「本人が居る前で言うよ。ん、意味は持つていない」

アンドリユーは一瞬言葉に詰まった。シユラは、アイオロスの大雑把で物事を軽視しがちな側面を気障りと判断していたし、アイオロスもシユラの四角四面で排他的な態度を揶揄するところがある。お互い敬遠しあっているが、一番ものの考え方が揃っているのは実はこの二人なのではないか、と口にしたら猛烈な反発を受けるような事をアンドリユーは思う。ちらり、とサガを見ると視線が合い、サガの口元に笑みが浮かんだ。それは暗黙の同意の信号だった。

アンドリユーは、くすりと笑い返す顔を見せた。
「でもさ、本当によく頑張っているじゃないか。器用だし、耳いいよね？」

アイオロスに訊ねる。

「ああ…。そうだな。耳はかなり出来てるな。集中している時は特に…。そういえばAの四四二と四四一の違いが分かっていたって言うてたかなクリスが…」

アイオロスを除く三人の視線が絡まった。四四二と四四一の違いを聞き分ける？

「それはバーフェクト・ピッチを持つてると言うに等しいぞ」

シユラが、アイオロスを探るまじりに言った。

「いや、チューナーで音を合わせて居た時に、レベルが四四一になつてた事に気が付かなかつたクリスに、いつもより低いつて不思議をうな顔をしてたっけなんだが…」

アイオロスが急に鋭さを増した空気をたじろいだ。
「だが、始めて弦楽器を触つたにしては、弓の扱いが慣れているな…。アイオロス、本当に奴は初め者なんだろ？」

弦楽器の弓は、楽器によつて多少扱いの差があるにせよ、毛を張つた細長い道具で、四本の弦を擦つて音を出すという原理は同じだった。始めての者は、まずその長い棒を自分の身体の一部の様に扱えず、四苦八苦するのだ。それをミロウエアファックスは、多少のきこちなさはあるものの、すでに聞ける程度の音を出していた

「コントラバスは弾いた事がないって言うていたさ。楽譜は母

に触つてから結論を出して欲しい。出来ればな。外から聞いているのと、音の中に入つて自分もそこに加わるのでは楽しさも全く違うと思う。オレは少なくともそうだった」

アイオロスの眼差しは、オーケストラの一員であるという誇りと喜びに暖かく、それはミロの、入学以来ずっと張り続けて来た緊張感をずつとやさしく柔らかいものにした。

「明日、明日からでもいいですか？今日はちよつと片付けなきゃいけない事があつて…」

「もちろんだ！」

言つて、アイオロスは右手を差し出した。ミロはその手をしっかりと握り返し、じゃあ明日、と言つたと全開の笑顔を見せ勢い良く頭を下げるとそのまま駆け出して行つた。

アイオロスの足も、最上階を目指して駆け上がりリハーサル室を目指した。そして、リハーサル室の扉を勢い良く押し開けるや否や、アイオロスは目指す友人を背後から強く抱き締めた。

「やつたぞ！サガ！コントラバス、一人ゲットだつ！」

休憩時間に突然背後から首を絞められ、サガは慌てて振り向いた。そこには喜びに輝くアイオロスの笑顔があつた。

「良かったね、今？」

つられて微笑むサガの姿には、どこかほつとした雰囲気があつた。

「さう！ たつたんだ！ さっきのサン＝サンスを扉の裏でずつと聞いている奴が居たんだ。追つかけて行つて口説いたら、

落とされてくれた！ 万歳だ！」

サガがもう一度おめでとう、と声を掛ける暇も無く、アイオロスはパートに戻り、そこでは勿論雄叫びが上がつていた。

苦笑を湛え眺めていると、コンサートマスターのシオン・メルベリ・ハーシェルと目が合った。

「曲を弾いている最中に『ずつ』と見て居たつて事が分かる弾き方つてどうなんだろ？」

無然としたその物言いに、サガは思わず失笑してしまつた。

翌日、練習開始数分前、金の髪をまとまり悪く跳ねさせたままのミロ・フェアファックスがリハーサル室を訪れた。あれが噂のフェアファックスかと好奇の視線もあつたが本人が全く取り合わず、真直ぐアイオロスの名前を訪ねた事で、彼はなんなくコントラバス・パートに収まつた。

アイオロスに楽器を教わっている姿は至極真面目で、持て余す楽器を一生懸命にさらつている姿がオケの中で見慣れたものとなつた頃、コントラバス・パートには常に無邪気に笑つているミロの姿が見られるようになつていた。

「こりゃ、笑えない事態だな…」

スクールが持つ七つの寮の内の一つ、スミス・ハウスの一室では第五学年の生徒四人が車座に集まって話合っていた。四人とは、アイオロス・ウィンセント・エインズワース、サガ・エセルバート・チエトウィン、シユラ・アレクサンダー・コーツ、アンドリュウ・ジョージ・シィファで、奇しくもみなスクールのチーム・オーケストラの団員だった。アイオロスはコントラバス、サガは第二バイオリン、シユラはサエロ、アンドリュウはヴィオラという選択だ。

「三週間終わって、入って無いのはヴィオラ・パートだけか？」
アイオロスの呟きに、アンドリュウはがっくりと頷垂れた。
「ヴィオラの場合、まず楽器を知らない奴が始だからな。はっきり言って新入生で初心者、バイオリン希望といたら恐らくバイオリンとヴィオラの違いなんぞ知らん人間ばかりだと思いが？」

シユラの淡々とした口振りにサガは苦笑した。
「そうだね。弦楽器がやりたい。でも、コントラバスもチェロも大きくて扱いが不安だ。残った楽器で知っているのは、バイオリン。だから、バイオリンに入ろう。そういう子が殆どだ、私もそう思うよ。」

サガの答えに頷くと、シユラはアイオロスに言葉を投げた。
「お前、手抜きをしているんじゃないだろうな？」

自らを広互塔にたてて新入生を募って来たアイオロスは、その努力の甲斐あつてか、今年は三人の新入生をコントラバスに誘致する事が出来た。三人と言う数字は異例中の異例で、

う他に、他の楽器と二つだけ異なる役目があつた。

コントラマスタの選出である。

コントラマスタとは、オーケストラの中で音楽に対する最高権力であり、指揮者の意図を音に変えて団内に伝える役目を担う。技術・責任、両面に於いて厳しい役割で、これだけはどうしてもバイオリン・パートから選出しくなくてはならないという決まりになっていた。技術があつても調和を知らない者では動まらないし、調和を知つても、技術がなくてはオーケストラという雑多な楽器の集団を一つの音楽に導いてゆけない。

それが、この先初心者ばかりの集団から選ばれるとなると、数年、学生オーケストラで学んだだけでは、いかにも重い責務だつた。何とかして、そこそこ弾ける。経験者を探し団に引き込むと言う作業は、水面下ながら団全体を進めて来たにもかかわらず、結果が出ずに今に到つていた。

重苦しい空気が垂れ込める中、今までほんやりとあらぬ方を見ているばかりだつたアンドリュウがアイオロスを見遣つて言った。

「いいな、君の所は。三週間目に入ってフェアファックスが入団してから週末に二人も希望者が来たじゃないか」

アイオロスに六つの視線が集中した。苦笑してアイオロスは答えた。

「ホント、有り難いよ。助かった、結構縁起ものかな、フェアファックスは」

正に快挙と言つてよい整子だつた。

「抜いてない。誠心誠意真心を込めてヴィオラに入つてくれそうな子には声を掛けてる」

アイオロスはワイシャツとジーンズといった格好で椅子の上に胡座をかき、困つたようにアンドリュウを見遣つて言った。サガが労を惜しまず作つたTシャツ広告は、指導員ら他教授との公約通り先週一杯その役目を終了する事となつていて、

「もう新入生歓迎会も終わっただろう？ 今はまだ止めたりまた入り直したりつていう人の動きもないし、難しいんだ」

「そうすると、やっぱり溢れているバイオリン・パートから人間を回してもらつてという線が現実的だな。サガ、バイオリンは正確には何人入つている？」

シユラの問いにサガは簡潔に答えた。

「九人だ。全員初心者」

「初心者ばかりか？ バイオリンも頭が痛いな。室内オケの面子で掛け持ちしてもいいつて奴は結局出なかつたのか？」

「出なかつた。でも、無理もないと思う。室内に入団出来る腕を持つていて、うちに入団したらその子が将来コンマスになるというのは予定じゃなく決定だ。室内とコンマス兼任は難しいだろう？」

ヴィオラは募集が無い事に苦しんでいたが、バイオリンは溢れる募集の中で、たつた一人でもいい、経験者が欲しい、と軋むような願いを埋められずにいた。

バイオリンというパートはオーケストラの中の一楽器とい

「そう思うよ。あの子、何だか色々噂されているけど、ちつともそんなことはないし、明るいいし、良く笑うし」
「まあ、オレ等とこじやすつかり末つ子扱いだからな。犬つころみたいによく懐いてくれて助かる」
くしゃりとアイオロスは笑つて見せた。ミロ・フェアファックスは、オーケストラでは非常に友好的に振舞つていた。

「そう言へば、フェアファックスつて名字で呼ばれるのが嫌いだつて有るんじゃないか？ なんでうちでは平気なんだらう？」
アンドリュウの首を捻りつつの疑問にアイオロスは大らかに一笑いすると答えた。

「分かんないか？ あいつ、すつげえ単純だぜ？ 自分が好意を持つてもらつてる人間には絶対吠えついたりしない」

「ぼかんとアイオロスを見つめるアンドリュウに、まあ待てと目で制し、アイオロスはシユラに聞いた。
「シユラ、お前もあいつの事姓で呼んでるよな？ 何でだ？」
「フェアファックスはフェアファックスだろう」

シユラは、詰まらない質問をするなど、いかにも面倒臭そうに答えた。
「だよな。で、バスの上級生連は、とにかく入つてくれた！ 万歳！ てなもので猫可愛がり。で、オレは単純にあいつの反応が楽しいからそう呼んでる。さてここには、あいつに対する侮りも三三擦りも、何にもない。悪意なく呼ばれる事には、あいつだつて反発出来ないさ」

しかし、次に飛び込んで来たのは、しつかりとした変声前の少年の声だった。

「自由時間に済みません。こないだの、月曜日の話の答えを言いに来ました」

フェアファックスの存外の行動と声の大きさに、部屋の住人全員の耳が一斉にドアの方へと向かった。

「きちんと考えて来ました。：パイオリンに入れて下さい。お願いします」

部屋に張り詰めていた空気が一気に弛んだ。続いてサガの静かな声が聞こえた。

「自分でお願いしておいてこう聞くのは失礼だと思うけれど、本当に君はそれでいいんだね」

「はい」

短いのはつきりとした答えが返った。たっぶり一呼吸の間サガはミロを観察していたが、やがてはつと息を付くと、笑顔で手を差し伸べた。

「ありがとう。パイオリン・パートは君を歓迎するよ」

始めは遠慮がちに、しかし、すぐにしつかりと握り返してきたミロの手にサガはもう一度笑った。徐に、手が離れた後、ミロは安堵して弛んだ姿勢をすぐにまた引き締めてサガに訊ねた。

「すみません。アイオロス：先輩の部屋を教えて貰いたいです。自分で、決めた事とお礼を言いたいです」

「アイオロスなら：」

言い淀んだサガの後ろから、此所にいるぞ、とアイオロスは

のつそりとミロの前に姿を現した。

「お前が決めた事は、さつきちゃんと聞かせて貰ったからもういいぞ」

そう言っただけでアイオロスはミロに些か苦味の覗く笑顔を笑見せた。が、ミロの方は目を見開いたまま硬直していた。なんだ、知らなかったのか。そう呟くと、アイオロスは自分の身体を斜にずらして部屋の中を見えるようにしてやつてから更に加えた。

「ほら、あいつらも同窓だ。便利だろう？」

ミロの視界の先にはオケで見なれた上級生の、手を振っている姿と無表情にこちらを見ている姿が見えた。

アイオロスは、なんとか自分を立て直し詫びの一言でも述べようとしている後輩に向かって破顔した。本当に、この少年は分かりやすいと、そう思った。

「ああ、もういいぞ。お前は焦って何かをしようとするオボロが出るからな。一つだけ注文だ。走るパイオリンにはなるな下が泣く。それから、パートが変わったからといって遠慮する事はないぞ。何かあったらオレのところに来い。そいつは、案外世間に疎いから頼りにならないぞ」

にやりと笑ってサガを指差すアイオロスに、ミロは少しだけ泣きそうな笑顔を見せた。

「オレ、本当にコントラバス好きです。ただ、パイオリンには負けたけど」

上がピアノを弾かれているから読めるとは言っていたけどな

困ったようにアイオロスは答えた。アイオロスはあまり細かい事は気にしな質なので、このように尋問されると答えるに窮するのだ。アイオロスにとってミロは、やつと出来た初めての後輩という以外の何者でもなかった。

「実は、何か弦をやっていたとか：ないかな：？」

アンドリューがあまり期待を込めないようにそつと疑問を投げかけた。

「何かつて、何を？」

「シユラがその問いに乗った。」

「コントラバスは始めてなんだろう？ だったら、チェロかパイオリンか、ヴィオラとか：」

「：チェロ：はどうかな：。どうもあいつはチェロ奏者には向いていない気がする：。」

「向いて居ないから入らなかつたんじゃない？」

「：。。。でも、そーいやあいつ、変な事を言っただけな：」

「アイオロスは記憶を辿りよせ話した。」

「最初の週で健康診断とかやるだろう？ あいつ、それで聴覚検査の時に左耳が突出して広い聴覚域を弾き出して、三度計り直したとかつて：。特に高音域が減多にいないって呆れられたつて、言っただけな：。」

「左耳：」

四人の推測が一点を指して駆け上がった。パイオリンは、楽器の尻を左顎と鎖骨で挟む様にしてバランスを取り音を出

す。

「サガ、お前の耳は？」

アイオロスの問いにサガは静かに答えた。

「通常の域よりは聞こえているみたいだけれど、特に左耳だけがつて事はないよ」

「アイオロス、サガはオーケストラで弾いている。自分の音も、外の音も聞こえている筈だ。単純に比較は出来ないぞ」

「でも、じゃあ、ずつと独奏ばかりやっていたら、そうしたら、そーいう事つてあり得るのかな：う？」

誰もが思っている事を口に出さずに居た。

「とにかく、本人に確認してみるのが先決だな」

シユラの言葉を聞いたアイオロスの表情がさつと変わった。僅かな変化だったが、見詰めたサガが慌ててシユラに問った。

「シユラ、本人に確認するつて：。」

「簡単な話だ。フェアファックスがパイオリンの経験者であった場合、パート転向を打診する。人間が余っているパイオリン・パートはヴィオラへ転向してもいいと言いたいような人間を一人程作る。コントラバスは、例えフェアファックスが抜けても二人残っているわけだから、取りあえずはオケでいいぞ」

「淡々と、誰もが最良の対処だと納得出来るが、そー一筋縄では括つてしまえない事をシユラは言っただけだ。そして、アイオロスに同意を求めた。」

「：その通り」

アイオロスは両手を挙げてシユラに賛同した。

「多分、それが今オレ達に見えている中では一番真つ当で善い案だと思ふ。転向を促したい奴の意志は十分尊重するつて条件付きでな」

そして、おどけた仕事と表情を真顔に戻し言った。

「明日、ドウコやシオンに相談してから動こう」

三人をぐるり見渡し、異論が無い事を確認するとアイオロスには、よしつとかけ声を掛けて立ち上がり、歯を磨いてくると言ひ置き部屋から出た。シユラもアンドリユーも何も言わなかつた。二人ともこの三週間、どんなにしてアイオロスが新入生獲得の為に走り回つたか知つていた。あちらこちらのハウスに顔を出し、誰にでも声を掛けて居た。確かにアイオロスは気安い質の人間だったが、常にあの派手なTシャツを被り、衆人の注目を集めながら気楽を装うのはそれなりの努力を払つていたと推察される。その上、自パート以外にも募集にも一役を買つて出ていた。

黙つて扉を見つめるか、本に手を伸ばすかする少年達の中、サガだけが扉を開けアイオロスの後を追つた。

アイオロスが洗面室に降りようと階段に差し掛かつた時、サガが追い付き、彼の腕を取つた。

「アイオロス！ 君は本当にそれでいいのか？」

アイオロスは苦笑して答えた。

「いい悪いも：フェアファックス次第だつて言つただろう？ そりゃもしかしそつちに行つちまつたら：まあ、かなりがっ

かりはするが、それがいつてフェアファックスが希望してそうなつたら、団にとつてもそれがいいわけだから、仕方が無いし、気にしないさ」

そう言つて、アイオロスはまだ自分の袖を掴んで放さないサガの指をそつと外した。

「何？ お前も歯磨き？ じゃないよな、さつき磨いて来てたもんな。気にするなよ。部屋に戻つてみるよ、きつとアンドリユーが、なんでみんなワイオラの経験者かもしれないつて少しだつて思つてくれないんだ、つて泣いてるぞや」

くすりと小さくサガが笑つたのを合図に、アイオロスは階段を降りた。この話がどうなるか、アイオロスにはサンルサを覗いて居たあの時のミロの瞳が既に答へたのではないかと、そう思えてならなかつた。

翌日、パートリーダーとコンサートマスターのシオン、団長のドウコ、常任指揮者である音楽部のブレイン教授を交えてこの事が話し合われ、結果、現在過剰人数になつて居るバイオリンからワイオラへの転向を了承してくれる生徒がいなにか働きかけてみる事、ミロ・フェアファックスにもパート転向の意志は生まれなかつた事、が決まつた。

交渉にはサガが当る事になつた。ミロへの話はアイオロスが行つてもよいと言つたのだが、ミロの誤解を生じさせる恐れがあるのでこれもバイオリン・パートの募集をまとめていたサガが行う事になつた。

話は、来週の月曜日、練習前の時間を空けてもらひ訊ねて行くと、そう決まつた。

八

一番嫌な役をやらせてしまつた。と、アイオロスは思つて

いた。今週の月曜日、霧雨の夕刻に、サガはアイオロスが連れて来たミロ・フェアファックスにバイオリンの経験と転向の意志を訊ねていた。他にも、三人、バイオリン・パートからワイオラ・パートに転向してもらつても構わないかと訊ねていた。うち、二人からその日のうちにパート移行承諾の返事を貰つて居た。しかし、今回一番揉めたミロの返事がまだない。

月曜日の練習時間前、サガに話を持ちかけられたのだからミロは、その日とうとう硬い表情を崩す事なく練習を終えて行つた。昨日は、普通に振る舞う事に神経を注ぎミロの姿があつた。そして、今日は…。

何かを決心していたようだった。いつもより念入りに楽器の手入れをし、仕舞つて居た。その仕様はともコントラバスを慈しんでいるようで、余計に悪い予感があった。

最悪、オケ自体を辞めると言ひ出さなければいけないのだが…。容姿とは裏腹に、存外真面目で頑な後輩をアイオロスは思つ

た。一言だけ、本当に彼自身がしたい道を取れ、とアイオロスは言つたが、今日の練習も終わり、夕飯も済んだ今、一週間ぐらい考へて貰つて構わないと言つたから、と話すサガの元にミロは答へを持って現われなかつた。

一週間も答へのない少年ではない、とアイオロスは踏んでいたので、こうして待つだけと言ふものは存外辛いものだった。

同室のシユラは読書に耽り、アンドリユーはベッドに寝転

び雑誌を捲つて居る。サガは今年の新入生の教材作りに没頭して居た。

サガに、一番嫌な役をやらせてしまつた。ともう一度アイオロスは思つた。先週、自分を追い掛けて掴んだ腕もそのままに、本当にそれでいいのか？ と訊ねたその時の何とも言えない必死の様が目蓋に残つて居る。

早く来い。とアイオロスは胸の内、ミロに呼び掛けた。と、丁度その時、軽いノックの音に続いてまだ変声期前の少年の声が部屋に通つた。

「ミロ、フェアファックスです」

サガがすつと立ち上がり、ドアに向かつた。まだ細い背中が緊張しているのが手に取るように分かる。

そんなに緊張しなくても大丈夫なのに…きつとフェアファックスならバイオリンを取る。

アイオロスはドアが開き、続いてサガが部屋を出る音が聞こえるのを待たつた。

「ガかつてる。頭張れよ。バイオリンは音符の数が二倍はあるぞ」
 笑いあってお互いに就寝の挨拶をした。元氣よく上級生の部屋ばかり並ぶ廊下を駆け出し、少し行つたところで注意され、静かに歩き直して階段へ向かい、やがて一応敬意を表して何度も櫛を入れて来たのであろう頭が見えなくなると、サガは静かにドアを閉めた。

アイオロスはサガと顔を合わせずそのまま部屋の中に戻ると、自分のベッドへダイブした。うつ伏せに寝転がるアイオ

ロスの表情は見えない。

「まあ、順当な寝着だな。コントラバスには今度の犬は少々血統が良すぎたんだ」

「でも、僕としてはフェアファックスがヴィオラに来てくれても全然構わなかつたのにな…」

「お前等なまろ…」

枕に押し付けた口から漏れるアイオロスの声は酷くくぐもつていた。それでもベッドから起き上がろうとしないアイオロスをそのままに、チェリストとヴィオリストの二人は席を立ち、サガに良かったなどと声をかけシャワー室に向かつて行った。

ドアの閉まる音がして、部屋の中はシンと静まり返つた。一人残されたアイオロスは、思つていたよりずっと気落ちしている自分に呆れていた。彼等が戻つてくるうまでには吹っ切らなければ、そう考えていると、幽かにドアの開く音がし、陶器の擦れあう音とタージリンの香りが鼻を付いた。

「飲むかい？」

驚いて顔を上げると、ベッドの脇にサガがティーカップとプランデーのミニボトルを載せたトレイを持って立つて居た。

「…お前…そんなの何処から持つて来たんだ？」

アイオロスの目はミニボトルに注がれている。アルコールは上級第六学年にならなければ持ち込みは禁止だ。加えて、上級第六学年といえども、自室へのアルコールの持ち込みは許可されていないハウス毎に設けられたバーに預けてある。

「前からあるよ？ 君が気付かなかつただけで」

あまりにもしれつと答えるサガに、アイオロスはがばりと飛び起きた。

「前からつて、お前のか？ それ！」

「そうだけども…」

「アイオロスはがつくりと頂垂れた。」

「…いつの間…」

それだけ言うのがやつとだつた。サガを、入学した当時のままの印象で考えてしまうのはアイオロスの悪い癖だつた。入学当時、学校に通つた事もなければ、同年齢の子供どうし

で遊んだ事もないというサガは時々遠方にくれ、そんな時に頼るのはいつもアイオロスだった。

「紅茶に入れる？ それともストレート？」

それが、今はざらりと酒を持ち込んでいると言い、こんな事を聞いてくる。サガの友人の幅が広がったと結果と、喜んでいいものやらどうなのか。アイオロスの頭はキシキシと痛んだ。

「…ストレート…。でも、紅茶も貰う」

サガは、手近にあったグラスにブランドーを注ぐとアイオロスの目の前に差し出した。そして、言った。

「…ありがとう？。責任を持って育てるよ」

アイオロスは一瞬驚いたようにサガを見詰めたが、直ぐに口の端を持ち上げ、にやりとして言った。

「どうして？。何を言ったって血統がいいそうだからな」

「血響育きを育てるのは君のお株だったのにな…。でも、ミロはバイオリンを弾いてもバイオリン・パートには居着かないと思うよ」

「血響育きは一匹で十分だ。いつの間にか駄犬にまみれていない知恵を仕入れてくる」

無然としてアイオロスは答えた。しかし、一つ気になる。

「居着かないって、上手くやっていけそうにないのか、あいつ？」

「違ふよ。それだけ君に懐いているってこと。まずコンバの時、はベースの席に混じっているだろうな」

半分は自分への慰めだと分かっているけど、自然アイオロス

の顔は綻んだ。
「それでもいいぞ？ あいつ、サン＝サンスの時、誰をずっと思っていたか知ってるか？」

アイオロスは紅茶を一口含むと、にやりと笑んだ。

「あいつは、お前をずっと思ってたんだ。それこそ熱烈にな。気が付かなかったか？ ホント、鈍いよな、お前って」

珍しく、サガが赤くなった。赤くなったといつても、ほんの少し、耳の先に朱が差した程度なのだが。

「君と違って、ちゃんと指揮者を見ていたのね。…でも、ミロが遊びに行ったら、暖かく迎えてやってくれないか？ それこそ私では、バイオリン以外のことは大して教えてやれないし。それに、ミロが君を見上げる瞳も結構熱烈だと私は思うよ」

「コントラバスの心意気は、来る者拒まずだ。そつちの手に余ったらいつでも末っ子は引き取る」

笑って答えたアイオロスの瞳は静かで優しかった。

「…ミロは、いいベース弾きになったと思うよ」

サガの口から、胸に密かにしまっておいた一言が、その優しい瞳に門を外されて溢れ出た。ミロには、どちらの素質も確かにあったのだ。ただ経験があるというだけで、バイオリンに絞らなければならぬ理由など、本当はなかった。サガはそう考えていた。

「当然だ。オレが教えるんだからな」

ベッドに腰掛けサガを見上げるアイオロスの瞳が、照れを

含んで弛んだ。

そんなアイオロスを見て、サガは、もう大丈夫だろうか、と思う。またいつものように、両足で大地を踏み締めて、誰もが頼る基幹になれるだろうか、と。

不意に、ある衝動がサガの胸の奥底で生まれた。自分より背も高く、いままで寧ろ彼が頼りにして来たはずのアイオロスに対して、頭を撫でてやりたい、と思ったのだ。今はまだ強がって、やっと顔を上げている魂を、親が子にするように、あるいは、人が大切な誰かにするやうに。

サガは身を屈めてアイオロスの手から空になったカップを受け取り、トレイの上に片付けた。そして身体を起す直前に、ほんの一瞬、右手でアイオロスの髪を梳いた。

「…」
考えもしなかったサガの行動に、アイオロスの言語機能は一瞬止まった。

「カップを洗ってくるよ」

サガは素早く身を躲し、そのままドアのノブを回した。背中にアイオロスの罵声が聞こえたが構わず押し開けた。アイオロスは追って来なかった。

サガの脳裏に、一瞬だけ目にしたアイオロスの真っ赤になった顔が焼き付いていた。

アイオロスは、ドアの閉まる音と共に、もう一度ベッドに倒れこんだ。

こうして開戦の矢は、静かに的に当たり、それぞれの新時期が流れ出した。

ス、ミスター・パロウ」

彼女の声は、昼間の教室で聞く調子と全く同じだ。細長い眼鏡の奥から、三人を観察すると、彼女は告げた。

「ここが、第一ゲートです。質問に答えると、代わりにスタンプが一つ押されます。代表で答えても、相談して答えて下さっても結構です。ただし、正解の回答を得られなかった場合は、スタンプは押しますが、マイナスの点数をつけます。以上です。了解できましたか？」

ミス・クレジオは、にこりともせず、「一言い切ると、問題用紙を三人の前に押し出した。

「……フランス語だ。」

フランス語は、彼らの必須授業でミス・クレジオは彼らの教官だった。思い当たって後ろに控えている人物を確認すると、みなフランス語の教官だった。

用紙には、単語の格変化を問う問題と一枚のイラストが印刷されていた。

ミロとアイオリアはお互いの顔を見合い、それからカミュに視線を移した。

「僕がやろ。」

カミュが問題用紙をするつと二人の手から奪い、一歩前に出た。

カミュの母親はフランス人だった。カミュにとって、フランス語は第二の母国語だ。代表で答えてもよいなら、このゲートはもらったも同然、とカミュは内心で拳を握り締めた。

ミス・クレジオが軽く頷き、質疑応答が始まった。

全てフランス語でのやり取りに、ミロとアイオリアは目を丸くするばかりだった。あつという間に問答は終わり、ミス・クレジオがA五判の地図を差し出した。

カミュは、地図を後ろでぼんやりと立っていた一人に見せると、次の目的地に向かって走り出した。

「あいつ、意外とこういうのに燃える奴だったんだな。」

アイオリアが横を走るミロに耳打ちした。ミロも頷くことで同意を示す。すると、前方を走るカミュから言葉が投げられた。

「やるからには優勝を狙わないとつまらないだろう？ 僕はこのメンバーなら狙えると思うよ。」

「でも、折角夜に出歩けるのに、直ぐに終わったらつまらないじゃないか。」

カミュの言葉に思わずミロは口を挟んだ。

「ゴールしてから好きなだけ歩くのはかまわないよ。幸い明日は午前休だし。」

本当にゴールしてから好きなだけ歩けるのかな、と呟くミロに、アイオリアは、本当に何事もなくゴール出来ればいいけれど、しみじみ思った。

コの字型の校舎の中庭を突ききり、三人は図書室へ向かっていた。途中、二、三のグループとすれ違ふ。彼らの走る姿を見慌てて駆け出し館内に消えていくチームもあった。

Dring dring doozy,
The cubs in the well,
The dogs away to Bellingan
To hury the hain a bell.

ディングル・ディングル・ドゥージー

ネコは井戸の中

イヌはベリンゲンへ行つた

子供に鈴を買うために

ミロは、息を詰めて手に握るカードを見た。青地に、銀色の
ルーン文字「アンサズ」(オーデン神)が記されていた。スミス・
ハウスの食堂では、あちらこちらで少年達がカードを見せ合っ
てパトナーを呼び合っていた。

毎年十月三十一日の晩、各寮の新入生達を集めてちよつとし
た肝試しが催される。一チーム三〜四人の編成でスクールの敷
地内を指示に従って進み、四つスタンプを集め、帰着する速
さを寮毎に競う。一位から三位までには特別に点数が加算され

るので、一年の終わりに決定する寮対抗の学校杯獲得に絡む
最初の大会だった。

ミロは、ちらちらと手の中のカードを確認しては、またパト
ナーを見つけていない雰囲気少年達を物色した。誰でも
思う事だろうが、ミロもまた、少しでも自分と親しい友人と
一緒になれたらいいのに、と願っていた。人間の好き嫌いは
しないようにしているが、折角夜の校舎を自由に歩きたい
と許可が出たのだ。楽しくやりたい。そう思つて尚も首を精
一杯伸ばし続けていると、ミロの手の中からカードをひよい
と掴み上げたものがいた。

アイオリア・エインズワースだ。彼は、ミロのカードのマ
ークを確認すると、ひよつと自分の背後に首を回して言った。
「見付けた」と。

ミロは慌てて全身で振り返つた。アイオリアの隣に、濃い
グレーのタートルネックのセーターと、真っ黒なパンツ姿の
カミュ・パロウが居た。いつもただだぼの服を着ているミ
ロとは違い、カミュの服はびつたりと彼に合い、長い手足を
引き立たせていた。

「よろしく」
カミュが、ミロに友好的に微笑みかけた。よろしく、と、
つられてミロも口の中で返事を返した。制服姿よりも一層大
人びつて見えるカミュに、ミロは少しばかり戸惑ったのだ。

カミュとは、化学のクラス、課外活動のスクール・オーケ
ストラで一緒だった。けれど、カミュといつも行動を一緒に

しているポール・リッジウェイにとややら快く思われていない。
それで、入学してから二ヶ月にもなるが、ミロがカミュと話し
た回数はそれ程多くない。

「なに編み合つてんだよ！」

アイオリアが、らしからぬミロの態度を笑い、彼より頭ひと
つ分低いミロの頭頂を極き混ぜた。

出発時間の欄にスタンプを押してもらい、三人は配られた懐
中電灯一本を手に寮から校舎に向かつて歩き出した。各寮の生
徒がそれぞれの寮から五分おきに出発していた。薄闇の向こう
から馴染みの友人達の声が聞こえる他、芝を折る足音、微かな
虫の声など、昼間の喧騒はひっそりと何処かに消えていた。空
気の厚さが増し、ぼつりぼつりと灯る光が彼方に在るようだっ
た。

先方に見える校舎は墨色に染まり、濃藍の空に歪んだ洞窟の
ように立つ。無言の道行きを破つたのはアイオリアだった。

「ミロ、お前幽霊見たことあるか？」

「ないよ」

ミロはきつぱりと言つた。故郷のニア・ソリーでも夏の夜は
遅くまで外で過ごしたものが、そんなものにお目にかかった
事はない。

「ロンドンに居たお前の方が見る機会があつたんじゃないの
か？」

ミロは、カミュにも聞いてみたかつた質問をアイオリアに向
けた。

「俺もカミュも見たこと無いよ。じゃ、このチームは安全だな」

何が？ と首を傾げたミロに、カミュがアイオリアの言葉を
受けて説明した。

「幸い僕は見えない性質だからいいんだけど、実は兄が見える
方だね。昔から、この手の催し物で結構危ない目に遭つてるん
だ。迷信だと馬鹿にする人は多いけど、素人が遊ぶ半分に手を
出すのは本当は危険なんだよ。この学校、結構古くていくらで
もその手の伝説はありそうだしね。でも見えない人間ばかりな
ら、相手も手出しのしようがないから大丈夫だろう」

ミロは、カミュの思いがけない一面を見たように感じて、そつ
と彼の顔を盗み見た。カミュは、至つて真面目な顔をしている。
彼がそう言うのだから、きつとそういうものなのだろう。ミロ
は自分の出した結論を、するりと飲み込み三人の先頭を歩いて
行った。

三人が、校舎の正門にさしかかると、そこには机と数人の教
官が立っていた。真夜中にも拘わらず灰色の髪を一筋の乱れ
なく結い上げ、モスグリーン色の襟の高いスーツ、胸元に琥珀の
ブローチをあしらつたミス・クレジオがきちんと椅子に腰掛け
彼らを迎えた。

「今晚は、ミスター・ウェアファックス、ミスター・エインズワー

イオリアの気が僅かにミロから逸れた。その時、ミロは、嬉し
そうな声を上げた。

「あ、やっぱり居た！ ほら、あそこだよ！」

ミロの腕を掴んでいたはずのイオリアの腕は、すりと落
ちた。ミロが、再び走り出した。

「待てよ！ ミロ！」

イオリアの、怒気を孕んだ声がミロの背中ではね返った。

何故あれほどまでにミロの足は危なげなのか。

カミュの照らす懐中電灯の光を頼りに進む二人の足元は、刻
一刻と不確かなものになっている。つまり、人が踏み入ってい
ない場所を進んでいるということだろう。それともミロは、本
当にこの道に慣れているのか。

だが、時に立ち止まり、きよろきよろと辺りを見回してはま
た唐突に駆け出す様を見ていると、どうしてもそうは思えない。
「イオリア、さっきから不思議に思っているんだが……」

「何？」

走りながらイオリアは応えた。カミュも勿論走っている。
しかもそのスピードは決して遅くない。

「サガ先輩は、どうして懐中電灯を持っている我々の方に来な
いんだと思う？」

「俺はさっきからもっと怖い事考えてるよ……」
カミュの気が一瞬凝った。

「君は、さっきちゃんとミロの腕を掴んだんだろう？ だつ
たら、それは、ナシだ」

「察しがいいな、相棒。でも……実は、だんだん自信が無くなっ
てきた……」

カミュは、ぐくりと唾を飲み込んだ。先刻イオリアがミロ
の腕を掴んだ。その事実を頼りに思っただけで走っていたからだ。

自分は、まだ『見た』ことはない。少しでもその手の感覚に見
込みがあれば、いくらでも兄と同じ光景を共有する機会があつ
た。二度心に言い聞かせて、カミュは返答した。

「足音が聞こえてるんだから、そっちは大丈夫だろう。……問題は、
ミロが追いかけているものの方だ。こちらは僕にも君にも見え
ていないし、足音も聞こえない。……第一、サガ先輩が、ミロ並
みに夜目が利くなんて事、あると思うか？」

ミロの行く先に、懐中電灯の灯りは見えない。イオリアは、
一瞬体中の毛穴が縮まったように感じた。

「カミュ、とにかくタッシュだ。ミロの奴をとっ捕まえてここ
を出るんだ！」

イオリアは一気に加速した。柴が連々音を立て、体は左右
にぐらぐらと揺れた。運動部でもないカミュが、そんな大変条件
の中、自分にびつたりとついてくることに、イオリアは内心
で舌を巻いた。そしてミロは、ウサギのようにジグザクに走り、
なかなか思うように追いつけない。

正面玄関から入り、右翼の図書室を目前に階段を駆け上つ
ている時だった。鋭い悲鳴が暗い校舎で木霊した。三人の足
は止まった。彼らの視線は互いの顔を交差し、揺れた。

と、カミュが手摺りに掛けていた手をさつと引いた。何か、
冷たく塗れたものが甲に触れたのだ。じつと口の手を見詰め
るカミュに、他の二人の視線は集中した。

「なんだ。驚かないのか」

のんびりとした声が上がってきた。さつと首を折って
見上げたミロが、声を弾かせた。

「ドウコウ！」

「よう、頑張ってるな。お前ら一緒のチームか」

駆け上がると、二階の踊場から階下に向けて釣り糸を垂れ
たドウコの姿があつた。折角パロウの悲鳴が聞けると思っ
たのになあ、と笑うパート・ライダーに、カミュは僅かに眉
を寄せた。しかしドウコは気付かず、気前よく種明かしをした。
針の先に、水に濡らした『Devils tongue jelly』つまり、菊弱を
吊るしているのだ。

「……先輩も趣味の悪い……」

カミュは、つめていた息を吐いた。盛大に驚くのは糧に障
るの何でもない風を装っていたが、気味の悪さに息を呑ん
だというのが本当のところである。

「何処で手に入れてきたんですか、そんなもの……中華街にだつ
て滅多に売ってないでしょう！ 日本人街ならともかく……」

何々と笑うドウコはあつさり答えた。

「そんなもの、一年前から準備してるに決まってる。おい、ミロ、
あんまり弄るな。それはまだ使えんだからな」

自分の横で、黙って初めて目にする菊弱を両手でぐちゃぐ
ちゃと触るミロから、ドウコは大らかにその玩具を取り上げた。
勢いを削がれた格好で三人は図書室に到着した。部屋の中に
はジャック・オランタンが暖かくそこかしこに配置されている。
「いつ作ったんだろう。オレも作りたいかったな」

「茶巾になれば嫌でも準備させられるさ……」

ミロの悔しげな声を受けて、イオリアが些かうしろし
りした調子で答えた。いくつかのテーブルに歴史の教習たちが腰掛
けている。既に三組のチームが試験を受けていた。三人は、空
いている一番奥のテーブルに回った。小柄で丸い眼鏡をかけた
ミスター・モリスンがにこにこ笑いかけていた。

「座りたまえ。きつと時間が掛かるからね」

ミスター・モリスンの言葉に戸惑いながら、三人は椅子を引
いた。ミスター・モリスンは、テーブルの上にゆつくりと両手
を上げ軽く組んだ。

「さて、我が大英帝国は、これまで七十代の首相を迎えてきた。
十人の名前が言えれば合格。二十人ならプラス十点。全部言え
たら三十点とハウエル歴史官にノミネートするよ」

にっこり笑って、モリスン教官は言葉を切った。

「まずは、マーガレット・サッチャーだよな……」

ミロが呟いた。

「その前が、ジャイムズ・キャラハン、エドワード・ヒース……」

カミュが更にそれを受けた。
「有名なのは、サー・ウィンストン・チャーチル、アーサー・ネヴィル・チェンバレン、ロイド・ジョージ、デイズレイ、初代のウォルポール……これで何人？」

とミロ。

「八人だ。後は、グラッドストーン、小ビット……これでクリアだな」

カミュが折っていた指を止めて言った。

「駄目だ、二十人は狙えない」

「あと二十点、欲しいか？」

ふと、それまで沈黙していたアイオリアが口を開いた。なにやら思うところがあるらしく、天井を見上げ複雑な顔色を表していた。

「あと二十点か」

カミュは、アイオリアを振り返った。二組の視線を横顔に受けて、アイオリアは一息に初代から現首相まで、七十人の名前を挙げきった。

「……しかし凄いな……まさか、本当に七十人全員覚えていたとは思わなかったよ」

無事第三ゲートへの地図を手にし、図書室前の広場の外灯にそれをかざしながら、カミュはアイオリアへの賞賛を惜しまなかった。

「君のおかげで三十点追加だ。大分寮に貢献したな」

「冗費も言えるよ……。じいちゃんが軍人で、覚えるまで許して貰えなかったんだ。ついでに、第二次世界大戦時のイギリス将校の名前も全部言えるけど、何の役にたたないよ……」

肩を落として咳くアイオリアに、カミュは小さく笑った。

ところでミロは、少しばかり気落として二人のやりとりを見ていた。カミュは、第一ゲートで、アイオリアは第二ゲートでそれぞれ十分に力を振るった。第二ゲートで挽回が出来ればいいのだが……と。

ふと空を見上げると、細い新月が僅かな光をほんしんと降らせている。校舎を見、後ろから聞こえる次の目的地を耳に挟んだ時、ミロは、敷地内に横たわる森を抜けて行くことを躊躇した。目的のシアター・ホールへはくると森を守り進まなくてはならない。しかし、森を突き進めれば距離は半分で済むのだ。

「ミロ、でも今日は月も細いし、道を外れると足元もよく見えないよ。森の中は足場も悪いだろうし……」

カミュが小首を傾げてミロを見る。

「あるいは、よく知っている抜け道でもあれば話は別だけど……」

「知ってる。ついてきて」

ミロは短く返答すると駆け出した。

残された二人は、慌てて、薄く金髪を顔かせて走る小さなミロの後を追った。アイオリアが、走りながら、なんて事を言ってくれたのだ、とカミュを責めた。

「何が良かったんだ？」

中ではたりとお互いの顔を見合った。足音が消えたのだ。

「ミロ」

アイオリアが言った。

「ミロ」

カミュも声を出す。

しかし、ミロからの応えは返ってこない。口の横に手を添えて、徐々に大きな声でミロの名前を呼び出した頃、やっと二人の許にミロの声が届いた。

今度は声を頼りに進む。ぼつんと立ち尽くすミロの姿が現れたとき、二人はそれぞれに胸を撫で下ろした。

「迷ったんだろう？」

ぎくぎくと下生えを踏みつけてミロの側に立ったアイオリアは、ミロの頭を軽く殴った。カミュもほとと息を吐いて、その傍に立った。

「何事もなくて良かったよ……。いきなり足音が消えたから、洞か窪みにも落ちて怪我をしたかと思っただ」

「サガがいたんだ！ それで、そっちに行こうと思っただけだよ！ 息失った」

途方に暮れたミロの表情に、カミュとアイオリアは、再びお互いの顔を見た。こんな場所の、こんな時間に、オーケストラの先輩であり、兄の友人である人が何故居るのか。このイベントには、有志の上級生が、先程のドウコのように下級生を飾がらせる役を担い、校内に一定人数配置されているが、こんな森の中にまで乗配するであろうか。様々な思惑に気を取られ、ア

曹く、先を行くミロの足音を頼りに進んでいた二人は、森の

「あいつは兎死と野牛兎だから大丈夫だよ」

でも森の中は足場が……」

「どのみち今更遅いさ。喋る間に真面目に走らないと、あいつ見失うぞ」

なるほど、野生兎と決め付けられるだけのことではあつて、既にミロの姿は森の深い闇に融けかかっている。取り残された二人は、それぞれに興味の異なる溜息をついて、全速力でその小さな人影を追い、闇に潜った。

ミロの青い眼からは、涙がこぼれそうだった。それで、サガは得心した。おそらく、ミロは誰かと自分を見誤ったのだ。と。ミロの気を静めて落ち着かせてやれば、解決の糸口は見えるだろう。そう考えた時、「騒がしい限りだな。デュラハンがこの寮に立ち止まったのか？」戸口から、悠然とした声が響いた。

デュラハンとは、人が死ぬ前になると出現し、街中を走り回るといふ妖精である。女の姿だが首は無く、その首を脇に抱えていることもあるという。走り回るときには、コシユタ・パワーという首無し馬に引かれた黒い二輪馬車に乗っている。デュラハンはこの馬車で、街のいたるところを走り回った後、目的の家の前で立ち止まる。馬車の音に家の者がドアを開けると、桶一杯の赤い血をかけられるという。そういう話だ。

さて、戸口に立っていたのは、ジュディ・ハウスの第五学年生、シヤカだった。長い髪を括る事もせず背中に垂らしている。インドのマハラジャの息子で、彼の母が英国人であった。多くの召使に囲まれて育った故か、このシヤカもまた、サガとは異なる趣ながら常に泰然としその所作を荒らす事のない生徒であった。

「騒がしい限りだな。デュラハンがこの寮に立ち止まったのか？」

とシヤカは言ったのだ。その彼に、事の経緯を説明しようとする学生達の動きが、ざつ、と鳴った。だが、シヤカはそれを腕の一振りで押さえた。

「うるさ過ぎて全て聞こえた」

とシヤカはびしやりと言った。そして、すると凍えきつたミロの傍らに寄り、片膝を付いた。

ミロは、背骨に柔らかな温度を感じた。シヤカが、ミロの背に腕を回している。シヤカの指が触れた部位を、ミロは暖かいと感じていたのだ。

「フェアファックス、落ち着いて思い出したまえ。君は、その白い人の顔をしっかりと見たのか？」

シヤカの声は部屋に満ちた熱を下げた。何拍かして、ミロは答えた。

「しっかりと見たわけじゃない。ただ、なんとなく、凄く綺麗で、優しい感じがしたから、サガだって…そう思ったんだ…」

「なるほど。それで、大を君は以前から森で見かけたと言っていたが、それはどうか？」

「そういえば、音の感じて大だっと思ってただけで、ちゃんと姿は見えてなかったかも…。でも、今日はちゃんと見たわ。」

あれは、ジュディ・ハウスだ。

萬の絡んだごじんまりとした影に見覚えがあった。サガの姿は、一瞬見えなくなったが、建物の影が伸びる中に入ると、白い服が際立った。そして、ハウスの裏に当たる一つの窓で、ふつっり消えた。

ミロは、すぐさまその窓に駆け寄った。窓は開いていた。少し高いが、指はかけられた。十本の指に力を入れて、ぐつと体を持ち上げた。その瞬間、頭上と背中から名を呼ばれた。

「ミロ！」

と。

ミロはバランスを崩し窓枠から転げ、拍子にカミュとアイオリアを下敷きにしていた。

「お前、何でこんなところから入ろうとしているんだ？」

窓から、顔が覗いた。頭頂に大きなごぎりのオアジェをつけ、血のりで大胆に顔を染めた、アイオリアの兄であり、カミュとミロのオーケストラの先輩でもある、アイオロス・エインスワースだった。

アイオロスの長い腕で、三人はジュディ・ハウスの中に次々と放り込まれた。アイオリアは荒い息の収まるのを待たず、取り敢えず一番身近な人間に苛立ちをぶつけた。

ミロを、真っ白なサマードレスを纏い日傘をさしたサガが、ゆつくりと先導する。途中、小さな犬もサガの足元をまわり突き始めた。それを見て、ああ、そうか、とミロは思っ。ミロはよく、十曜か日曜に、こつそうこの森に入ってはバイオリンを弾いていた。練習室は予約を取らなければならなかったが、その手続きはミロにとつて有難くない作業だった。彼は、自分の気の向いたときに、気の向いたように弾き事が好きだった。そのうち、あまり人気がない森の中に何度か分け入り、気に入りの場所を発見した。へんり雑木に囲まれた中、ぼつかりと開いた小さな空き地だった。ニア・ソリーでも丘陵の景色のいい場所を選んで気ままに弾いていた。外で弾くことには抵抗はない。気持ちよく、二三曲弾き終わると、いつからか子犬が現れるようになった。いつも藪の影から外には出てこなかったが、そのうち慣れれば寄ってくるだろう、とミロは構わず弾き続けたものだった。

ああ、そうか、とは、今、サガの足元にじゃれ付く犬が、その犬だと気付いたからだ。茶色のちりちりの長毛種。何と言っ品種だったかなかなか思い出せないが、もう一つ気づいた事がある。サガも、彼の憧れる上級生も、この森でこつそりバイオリンを弾いていたのかもしれない。そすると、あの子犬にとつてはサガが主人なんだろう。なんだか嬉しくて、小さく笑った時、突然森が開けた。

サガが、少し先に見える建物に向かって静かに歩いていた。

「屈辱！ なにやつてんのさ、こんなところで！」
 「アイオロスは一瞬だけ弟からの視線を反らしたが、直ぐに彼を見下ろすと、にやりと笑って指にはさんだものを見せた。」

「お袋には言えませう。」
 とアイオロスが言うと、アイオリアは、今から煙草など吸っていたら末は肺癌で死ぬと脅したが、彼の兄は歯牙にかける様子もない。

ミロは、暗い廊下を漂う煙草の臭いに、鼻の頭に皺を寄せた。「それにしても速かったな。お前らが一番だぞ。裏から来るとは思っていなかったから、たつぷり脅かせなかったのが残念だが、ま、同寮だ。いいとするさ。」

アイオロスは、喋りながらとんと進み、三人を従えてジュデイ・ハウスを突き切った。途中、白い布を被った巨大でオーソドックスなお化けや、吸血鬼、ミイラ男、アイオロスと似たり寄つたりのなんだか知れない、とにかく血だらけの上級生がうろろろし、彼らは口々にアイオロスにそれが今年の優勝者なのかと確認していた。時々同じスミス・ハウスの上級生ともすれ違つたらしく、彼らはアイオロスと手を打ち鳴らし勝利の感情を叫び声に変えていた。

着いた先は厨房だった。そこには処狭しと観葉植物が置かれその真ん中に、ハモンド校長が満面の笑みで座っていた。ぼろの白衣と爆発した白髪の髪は、昨年公開されたロバート・

ゼメキス監督の映画、バック・トゥ・ザ・フューチャーの博士を模したものらしい。周りを囲むヘッド・マスター達が妖精の格好をしているところを見ると、まるで「勝者の楽園へようこそ」といった趣向で、見るものを唖然とさせた。
 「素晴らしい速さだったね。きつと我が校始まって以来だな。さあ、カードを見せてくれたまえ。」
 ハモンド校長は、色水入りのフラスコを並べた机の上に左手を差し出し、掌を上に向けてカードを握っているアイオリアを手招きした。

アイオリアは、びくりとも動かなかった。そして、我慢きれず、といった風に口を開いた。

「ハモンド校長……、それが。」

アイオリアは低い声で言った。

「なんだね？」

ハモンド校長が訝しさに笑顔を半分消して応えた。

しんとした厨房に、アイオリアの声が渡った。

「まだ途中なんです、俺たち。」

アイオリアは、俯いたまま、印の欠けたカードを机の上に差し出した。もつと早くに言うつもりが、あまりに上級生が騒いでしまったので言えなかったのだ。

ハモンド校長は、驚いたように目を見開いて、かけていた伊達眼鏡を外した。

「しかし、この場所は秘密になっていたろう？ 最後のゲートを通らずに、どうやってここを探り当てたんだね？」

悄然とするアイオリアを庇い、ミロが言った。

「オレです。オレが全部すつ飛ばしてここに来たんです。これたのは……」

ミロは言い淀んだ。これを言えば、恐らく彼が一番に敬愛する先輩に迷惑が掛かる。ミロは、與う限り言葉を選んで校長に言った。

「オレが、森の中を突っ切つて第三ゲートを目指して、そこでサガの姿を見かけてここまで追っかけてきましたんです。ごめんなさい。」

ミロは、おもちやの人形のように勢いよく頭を下げた。「何だつて？ サガとは、第五学年のサガ・チェトウィンドかね！」

ひゅうつと、頭垂れた三人の背後から口笛の音がした。勿論三人を連れてきたアイオロスだ。そしてさらに、なかなかやるな、と囁いたのを、ジュデイ・ハウスのケヴィン・ウオーターが聞き咎めた。

「ちょっと待て、チェトウィンドが同寮のメンバーをわざと案内したのか？ 反則行為だぞ！」

ケヴィン・ウオーターは、頭先から爪先までゴシック・ホラーの帝王、ドラキュラ伯爵の衣装を身に纏う。彼の漆黒のマントの向こうから、徐々にスミス・ハウスの不正を責め立てる声が膨らみ、本来見逃されていた身置も植木に上がり始めた。

「スミス・ハウスは滅点だ、いや、いつそ全員失格だ！」

とパーク・ハウスのジョン・ブリッジが叫べば、

「お前らだつて自分のハウス贖罪してただろうが？」

とロウ・ハウスの何某からも返る。きりが見えなくなり、とうとう誰かが叫んだ。

「チェトウィンドを呼べ！」

と、カミュとアイオロスが冷静に話を聞いて欲しい旨を付けていたが、効果は上がらなかった。

数分後、押し出されるようにしてサガ・チェトウィンドと御付役をこなしていたアンドリュー・シーファが衆目の前に晒された。サガは、確かに白いネグリジェのようなドレスを身に着け、長い金色の髪を被っている。

サガは、好意の見られない視線を順々に追い、無言のまま顔を動かさず、説明を求めた。

アイオロスが代表して事のあらましを存すると、自身スミス・ハウスに向けられた猜疑にサガは表情を硬くした。アンドリューもスミス・ハウスである。アンドリューと常に居た事は、森に足を踏み入れば居ない証明にはなるまい。

アイオロスが、自身の代わりに、汚れていない靴、真っ白なままのスカートの裾、これらを取り上げて弁証を試みていたが、ぐるり取り巻く顔の一つも納得の色に染まっていない。

ふと、不信ばかりの色の中に、凍りつく色を見つけてサガは言葉を飲み込んだ。ミロが、真っ青を通り越し、蒼白の顔色でサガを凝視していたのだ。

ある観察（マイケル・ガーネットの手記より）

「君は、耳がいいな。微笑が浮いた。

「君は、耳がいいな。では、その白い貴婦人の足音はしたか？」

「聞いてない」

「君は、足も速いと聞く。君が全力で追いかけて追いつかないのだから、彼女の走る姿はかなりの勇姿だな」

「いや……。凄く綺麗な後姿だった。走つてなんか、いなかった」

「みっしりとした沈黙が、部屋に枝を伸ばした。その枝に、絡め取られたかのように、誰も動かない。ただ、シヤカのみが、するりと立ち、ゆうろりと衆人を見渡し笑んだ。」

「さて、尊君、これで解決だ。昼には姿が見えず、闇にその姿を表し、音もなく現れまた消える。実にハロウィーンに相応しい訪問者ではないか？」

「数拍後にながった意味をなさない様々な叫び声は、あつげに取られているサガ・チエトウィンドの肌もゆすつた。」

「そしてその耳に、
「おめでと。幽霊とてつくり本質、おまけに女」とのアイオロスの言葉が届けられた。」

「どうしよう。オレ、サガに凄く悪い事しちゃったよ……」

「ミロが言った。
「お前の早とちりは一生治らないな。サガも、一年くらいしたら、もしかしたら、忘れてくれるかもな」

「アイオリアが応える。
結局、彼らのゴールは無効になった。回答で得た得点は失わなかつたものの、暗い森を走り回り、不正を行ったと一方的に攻め立てられ、拳骨に背中に冷水を浴びるような心地を味わった。」

「アイオリアの不機嫌は、無理もない。
「まあ、でも、好意的な相手でもよかつたじゃないか……きつとミロのヴァイオリンを聞かせてもらつたお礼に、協力してくれただつたりだつたんじゃないかな。幽霊にも聴かせられる腕なら大したものだよ」

「一方、心霊体験の怖さを知っているカミュは、むしろミロがいてくれて良かったと思つていた。彼女たちの静かな夜を騒がせたことは事実であるし、もしかしたら——本当に『もしかしたら』だが——いざとなつたら森の端くらいは掠めて走つたり自分も考えないではなかつたからだ。」

「おつぱり、是非僕等も一度聞かせてもらわないとな。ミロのヴァイオリン」

「むつぷりとしたアイオリアと、ひたすら自分を責めているミ

ロの間で、カミュは殊更明るく言い終えた。

ミロは、スミス・ハウスに向かいながら、何度も何度も後悔と反省の念を口にしながら、ジュディ・ハウスを出る時、サガに向かってこれ以上ない程に頭を下げ、精一杯謝り続けた行為も、こうして静かな夜道を歩いているとまだまだ足らなかつたようにミロには思えるのだ。

「どうしよう、カミュ、明日の練習……」

ミロは、声を絞り出した。カミュとミロは、新入生ながら十二月の演奏会の舞台に乗る。二人は、新入生だけで固まって練習するのではなく、上級生の間に混じりそれぞれの仕事をして

なしていた。ミロは、セカンド・バイオリンに配置され、そのグループのリーダーがサガだった。ほとぼりが冷めるまで顔を見ないで済ませられる間柄ではない。

「そんなに心配しなくても、サガ先輩はいつでも人の失敗を気にする人じゃないと思うよ？ 濡れ衣も晴れたことだし」

すっかり他人事のカミュは、さらりとそう言つて笑つた。実のところ、あのシャカが華々しい登場をする直前、サガがミロに向けた眼差しをカミュは見ている。

それは、自分を窮地に追い込んだ相手を非難するものでは決してなく、むしろ失敗をして動揺している後輩を守ろうとする親鳥の如き眼差しだった。

サガは、誰が見ても間違いないミロに好意を持っているのに、肝心のミロだけがどうしてもそれを理解しない。

「だから、その分頑張つて弾けばいいんじゃないかな？ きつとそれが一番サガ先輩も喜ぶよ。……ただし、また幽霊を呼び寄せるのは勘弁してほしいけど」

その途端、カミュの右袖がさらに重くなった。更に、というのは、ジュディ・ハウスを出てからこちら、ミロががっちりとかミュの右袖を掴んで離さなかつたからだ。

「……おい、ミロ、ジャケットの型が……ずれる」

同様に、左袖にしがみつかれていたアイオリアが無黙と言つた。

「だつて……！」

「だーっ！ うるさい！ お前も少しは寒い気分を味わえ！」

お前が幽霊と追いかけてこしている間に梅達がどんな透気味悪い思いをしたか……！」

ぶるっ、とアイオリアが身震いする。カミュはまあまあ、とアイオリアを宥め、ミロの手を自分の袖からそつと外した。

アイオリアに反論しようとしたミロの言葉が飲み込まれた。

ミロは、左手に温かい指の感触を覚え、立ち止まった。

「これで、どうかな？」

カミュは、固く縮こまつているミロの手を開き、自分の手の中に握りこんだ。ミロは驚き、口ごもつた。その顔をカミュは、微笑みの中に一片の真剣さを込めて見下ろした。

「服の袖は、いつのまにか別のものになつてるかも知れないからね。僕はこの方が安心できるな。……また、僕等の寮まで道のりは長いし……」

アイオリアが暫く凍り付き、それから無言でカミュに俯つた。両手を友人の手に預けて歩く、なにかしみじみとした暖かいものが胸の内に満ちるようで、ミロはずつとこつたままだった息をふうつと吐いた。今は、この手の温かさが何より嬉しかった。

入学してから一ヶ月、やつと自分の居場所を見つけたように、ミロは思つた。

細い光の中、三人の少年が手を繋ぎあつて寮への道を歩く。少しづつ小さくなる三つの影を、茶色の小型犬がいつまでも見送っていた。

影もなく、長い毛をそよ風にゆらされることの無い犬が。

すると、背後で高い声が上がった。フェアファックスはヒアスをしているらしい。「オレ、ガキの頭体弱くて伯母さん達が魔除けだって言っただけだ。取ると塞がると塞がると会った時面倒臭いからそのままにして。」

ハウが物珍しそうにフェアファックスが取って渡したヒアスを、手の平でひっくり返しながら見ている。こういうタイプはいつか自分から進んで開けそうだ。

「開けた時、痛かったか？」

ほらな。

ハウは、外されてどこか寒そうなフェアファックスの耳朶を伸ばしながら聞いている。フェアファックスは、赤ん坊の時開けたから分らないと苦笑交じりの返事。

彼は、本当に体が弱かったのだろう。エインズワースからデブ・ウィリアムの手にと回ったヒアスに付いた石はラビスラズリだ。小さいけれど、あんなに青が深くて金がつきりしている石は安物じゃない。身体が小さいのもきつとその所為だろう。フェアファックスは、どんな下らない質問にも極めて愛想良く答えていた。感心な人間だ。きつと、周囲から大事にされて育ったのだろう。掃き溜めに鶴とはこの事か。

始業日。朝は同室の者が揃って寮の食堂で朝食を取った。同室だからといってつるむのは如何にも小心者のする事で気に入らないが、昨日到着したばかりのフェアファックスに居心地の悪い思いをさせるのも大人気ない。ボクは、静かに見本的な姿勢でテーブルで食事を進めた。ふつと、物凄いい赤毛が目に入る。隣部屋のパロウド。カミュ・ルーファス・パロウド。実に気さくな態度と落ち着いた物腰で、この寮の新生活の中では階段に大人びている。隣にはキンキンと高い声で話す茶色の巻き毛の小さいのがまわり付いているが、嫌な顔一つしない。なんとなく、詰まらぬ。

二十分もして、食事を片付け席を立つ段になり見回すと、フェアファックスがまだ食べ終わっていない。ヨーグルトと牛乳、シリアル、そしてフルーツだけなのに……。体が小さい子供は大体食べるのも遅い。焦らずに完食する事を薦めると、真っ直ぐに

マイケル・ガーネット。これがボクの名前だ。いつか、その後二十年もしたら本屋にこの著者名の本を平積みにしてみせる。ボクは、作家を志している。

だから、自分の為に、この記録をしたための。まずは自分の日常を文章にする。これは大作家への欠かせないトレーニングと肝に銘じて。

本当は、この学校に来るのはボクの本意じゃなかった。一流の作家を目指すのなら、ロンドンを離れるべきじゃない。ボクは、断固たる態度で父に抵抗したが、敢無く放り込まれた。経済的自立を盾にとつて扶養者を御するやり口は、大人のもつとも卑怯な攻撃方法のうちの一つだ。ボクは、決して自分の子供にはしない。

チェリングクロス駅から列者が動き出した時、ボクは自分の未来がどんな暗闇に飲み込まれていくまで、不安と理解されなかつた悔しさで一杯だった。景色はボクに纏う事無く平らに、緑色に染まりながら伸びていった。油り着いた先も、第二次世界大戦の爆撃から取り残され、旧態依然の赤レンガの町と石畳。ボクは、休暇を取りに来た老人じゃない。もつともつと刺激を受けて鋭敏に感覚を研ぎ澄まさせていかなきゃならないんだ。

それから駅よりバスに揺られて十五分。ボクは、校門の前でがっくり肩を落とした。

だだっ広い緑の芝生。灰色の石造り校舎、そのずつと奥に茂る雑木林。その間に光る寄宿舎の屋根。こんな田舎で、どんな事件が起こるっていうんだ？ どんなインスパイアが？

父は、ボクの将来を遣す気なんだ。部屋にはもう三人の少年が居た。

一番声を掛けてきたのは、ボクより三センチは優に高いアイオリア・エインスワース。ボクだつて結構背の高い方だったのに、次いで、ダークブラウンの髪を刈り込み前だけつんつんと立たせたエドマンド・ハウ。「エディって呼んでくれ」と、気取つて手を差し出したが、誰が呼ぶか。馴れ馴れしい奴め。最後に、ウィリアム・パンキンとおすおすとした声が聞こえた。デブだ。やだよ。やだよ。こういう奴は足を引つ張る。名前だけ名乗つてさつさと窓際の一番端のベッドに直行した。ベッドは五つ。扉から入つて右側の壁を頭に三つ。左は大きな二段ベッドだった。エインスワースは間違いないこの二段ベッドだろう。

さて、目指したベッドの上には既に荷物が置いてあつた。デブがこわこわといった風で人の顔を伺っている。

「オレ、爺さんの遺言で、絶対窓際で寝なきゃいけないんだよな」

ちろつと眼鏡の端からデブ・ウィリアムを見たら、彼は荷物を移動した。エインスワースとハウが呆れたようにボクを見たが、構うもんか。ボクは、もう、ビタ一文だつて謙る気はないんだ。ボクは、来たつてここに来たんじゃない。

三日経つた。何にも無い毎日。明日からやつと授業が始まる。相変わらず部屋は四人。土壇場で入寮を止める生徒もいるさうだから、もしかしたらそういう事かもしれない。

十三にもなつて、まだ居るんだ。親から離れて生活できない奴が。例えば、デブ・ウィリアム。ヨレヨレのテディ・ベアなんか抱えて寝てる。あーやだよ。

机に向かって書き物をしていると、最初は好奇心に任せて覗き込んできた連中も、連れない態度で応じてやつた結果、近寄らなくなつた。せめて、授業でも始まればまだ気が紛れるのに、書く事が無くなつて、指が紙の上で止まる。刺激がなきゃ作家になれない。気分が苛立つた。

と、その時、ドアをノックする音がした。エインスワースが立ち上がった。ハウも声を上げる。扉が開かれた。一人の少年が立つて居た。

ボクは、断じてゲイじゃない。これは、聖書に誓う必要もない程明白な事実だ。だから、ボクが多少顔に火照りを感じ、ほんのこく僅かだが、所謂「上がつてしまつたような状態に近い高揚を覚えたのも、それは、彼が、真つ当な量感から判断した場合、

通常のこの年頃の少年より美的なものが優れていたからだ。ボクだけじゃない。普遍験がしいエインスワースも、お調子者のハウも、一瞬は確かに見惚れていた。自分の外見に見劣りを感じているデブ・ウィリアムなど口を開けて見入つていた。

彼の名前は、ミロ・アーヴィング・フェアファックス。癖つ毛とも、巻き毛とも見える華やかな金髪と、白い華奢な体の少年で、真つ青な瞳をしている。睫毛なんて閉じたり開いたりする度に音が出さうだ。レオナルド・ダ・ヴィンチやラファエロの天使を連想させる。名乗つた声も、澄んで明るく、文学的表現を使うなら、鈴の転がるような、というものに違いない(表現者は、時に大胆に、羞恥心を捨てる事も大切だ)。もしかしたら、聖歌隊でソプラノをやつているのかもしれない。

オレンジ色のリュックサックと、長方形のごついバックが、小柄な体に不釣り合いで、一層何物か大きく見える。ブルージェリーを基調にした繊細な幾何学模様セーター(アイルランド風)とフルーゼンズ。どれも多ボクボク余計に彼の華奢さが目に印象付けられる。もしかしたら、数人の男兄弟の末っ子なのかもしれない。人懐こく出された手を握ると、指の長い、大きな手だった。手の甲には青い血管が透けて見えていて、冷たく乾いていた。

空いているベッドは一つしかなくて、エインスワースにこつて微量の妬心を感じる(作家は自身の心に正直でなくてはならない。ただし、これは本當にごうごうすらすらとしたもので、無視してもいいくらいだ。本当だ。)

早速に、ベッドの周りに彼らは群がり下らない質疑応答のやり取りが始まつた。聞か気はなかつたが、狭い部屋的事、聞かえつてしまつたので書き留めておく。

氏名、ミロ・アーヴィング・フェアファックス。家を手伝つていて本日到着。三人兄弟で妹一人。ハイランドの父とイタリア人の母。イタリア語、流暢。何処から来たのかと問われて、「ビーター・ラビットの故郷から」と答える。

三人は分からなかつたようだが、ビーター・ラビットの故郷と言えは湖水地方だ。ロンドンのユーストン駅からオクスンホルムに三時間。そこから単線で確か二十分くらいでウインダミア駅。ウインダミア駅が湖水地方の拠点駅でそこから先は車か歩くしかない。ウインダミア湖を挟んで駅と反対側にビーター・ラビットの作者、ビートルクス・ポターが居る構えたニア・ソーリ村がある。まったく、そんな事も知らないのか? 教養のない奴らだ。ボクが声を出して説明してやると、エインスワースとハウ、デブ・ウィリアムが感服したといった様子でボクを見詰めた。フェアファックスは、嬉しそうににつつりと笑つた。悪くない。ボクは満足して机に椅子を戻した。

のだろう。

今後、彼が、この小さい体を張るような事態が発生しない事を祈る。大体なんなんだ。エインズワースの奴。ファースト・ネームで呼んでおきながら、本来、その馬鹿デカイ図体したお前が立ち向かうべきだろうが！ イライラしながらグリーンピースをより分けていたら、フェアファックスが、食べると言つて来た。羨がいんだな。ボクは、グリーンピースだけは駄目なんだ。その日の体調によつては、セロリとかピーマンとかクレソンとかも駄目な時があるんだが。

と、フェアファックスがアイオリアの皿にポークソーセージを入れてやつた。

…いつの間になんか仲良くなったんだ？ そういや、ハウまでフェアファックスの事をファースト・ネームで呼んでいる。その上デブ・ウィリアムまで。なんたる侮辱！

三目。

ミロ、と呼ぶことになった。短くていい。

彼の姓をからかいの対象として口にする輩が増殖している。フェアファックスというのは、金髪を意味する所もある名前なのだ。今や、彼、ミロと友好的な関係である者のみが、彼をファースト・ネームで呼んでいる。

さて、ミロは余程エインズワースと気が合うのか、今日は奴と二緒にラグビー部の見学に出かけていった。あんな野蛮なスポーツの何処がいいというのだ。人間には知恵があるのだから、欲求不満などは知的刺激で解消するべきだ。ただ闇雲に走り回つて過剰エネルギーを消費するなど、動物と同じではないか。ミロもきつとエインズワースに無理矢理誘われたのだろう。今や、ミロは集団に発生するちよつとした注目点になつていたので、連れて歩けば当然エインズワースも注目される。

見た目のいい子はよくそういった扱いを受ける。酔くなる前にそれとなくミロに気を付けるよう注意しておいてやつた方がいいかもしれない。

と、彼らが帰つてきた。エインズワースはもう決めてきたらしい。意気が揚がつている。が、一方のミロは眉を寄せ、目の縁に少し陰を滲ませていた。エインズワースは恵まれた身長から歓迎されたらしいが、ミロはマネージャーにしておいたらどうだ

こちらを見返して領いた。瞳を見開くと、余計に彼の顔は幼く見えた。

始めの教室へ、五人で移動する最中、すれ違つて級生にフェアファックスは口笛を吹かれたり、無遠慮な視線と値踏みにもみくちゃにされた。だんだんと苛立つているのがよ分かる。気の毒に、と思つたその瞬間、高らかに上がった口笛の主を、彼は激烈に睨み返した。

……そんなに、我慢し切れない程ストレスが溜まっていたのか？ 今度は助け舟を出そうと心に決める。病弱な子供に、過度のストレスはいけない。あらゆる病気を併発させるのだ。無神経に彼を冷やかす無知な生徒と自分は違う。そんな自分は、きつとフェアファックスの目には頼り申妻のある存在として写るだろう。実際、病弱な子供は、どんなにそれが卑劣な評論だとしても、子供社会の中では弱者であり、恩寵から見放された者となつてしまふのだ。

教室に着くと、空いている席は前列だけになつてた。エインズワースがきつと腰掛、フェアファックスがその隣に座つた。次に、と出した足を押しつけて、ハウがその隣に座つた。君、今、ボクの足に圧力が掛かつた事に気付いていないのか？ 失礼な奴だ。むつとした隙に、デブ・ウィリアムがハウの隣に腰掛けた。長いすが揺れた。こいつの隣か？ かなり気分が悪かつたが、教官が入つて来たのでなるべく離れて腰掛けた。白くて、プロフヨしていて、おなじ白いでもフェアファックスとは大違いだ。ちらつと横に視線を走らせると、水風船のようなウィリアムの体に隠れて、フェアファックスは殆ど見えない。ボクは、見守りしいモノは嫌いだ。作家は感性を大切にしなければならぬ。大事な武器を、ボクは今非常に不愉快なモノで冒瀆されている。次からは決して二の足を踏むまい。

ボクは、イライラしながら自分の名前が呼ばれるのを待ち、クールに返事をした。ボクの後に、ミロ・フェアファックスと教官の馴れ馴れしく陽気な声が出た。

と、そこで、ぎよつとする程デカイ声が出た。クラス中の視線が、フェアファックスに集中し、笑い声が炸裂した。

なんて失礼な奴らだ！ 緊張の所為で目く気分をコントロール出来なかつただけじゃないか！ 教官も失礼だ。笑いながら「元気のいい返事だ」などと言っているが、笑っている事で彼もクラスの共犯者だ。品性のない奴らの猿のような笑い顔を記憶に留めてやろうと出来る限り視線を滑らせると(作家はなんでも選り好みせず見るのが仕事だ)、赤毛のバロウだけが笑つていなかった。

……。いや、きつと最初は笑っていたに違いない。それで、ボクが笑っていないのに気付いて慌てて体裁を整えたのだ。こんな状況で、笑わないでいるというのは、それなりに人格が出来ていなければならない。そして、そんな風に出てくる人間は、そう滅多にはいないんだ。日頃から、覚めた目で状況を判断する訓練を自分に課していなければ、ほら、教官だって笑っているのだから。

午前中、四時限終えて昼食、ハウス毎のテーブルでの食事。テラス側の席でエインズワースという声が聞こえた。見違ると、第六学年の生徒が、非常に上背のある生徒がぞろぞろ呼ばれていた。焦茶のストリート。解け掛かったタイが無作に胸のポケットに突っ込まれている。あまり似てないが、どうやらこちらのアイオリア・エインズワースの兄弟のようだ。あちらは『アイオロス』とも呼ばれていたからな。

それにしても、よくもギリシア神話の風神の名前を子供に付ける親がいるものだ。……まあ、それなりに、整った顔立ちほしているが……。目付きの悪い黒髪の男と、気の弱そうな男、それから、一瞬白髪かと思ったが、どうやらとても色素の薄い髪の男へ背を向けられているので顔は分からないが、と親いらしい。

さて、こちらのテーブルに目を戻すと、相変わらず進みの遅いフェアファックスの食器が目に入る。どうやら、人の話に耳を傾けている時は、手、のみならず口も止まってしまうらしい。おまけに左利き。物書きには観察力が大切だ。頭の中で呪文のように唱えつつ、こちらとフェアファックスを見る。熱心に話して耳を傾ける表情は、とても好感の持てるものだった。

しかし、何故今朝から二度目、食堂から校舎に戻る方向を間違えるんだ？ 方向音痴なのか？ だが、間違えようにも、こんなに単純な方向、間違えられる筈が無いと思うんだが……。まさか、明るい表情とは裏腹に、無意識下に於いて登校を拒否するよくな、何か内向的な形質が影響した行動結果なのだろうか……。

授業開始二日目。

昨日は、寮内のシャワー室や食堂、給湯室、図書室、監禁室、ハウス・マスター、医務室を案内して歩いた結果、フェアファッ

クスが極度の方向音痴だと分かった。あまり、一人で出歩いた事がないのだろう。人間の感覚器官は使わなければいとも容易に退化するのだ。だから、ボクも自分の感受性が鈍らないよう、日々努力しなければいけない。

さて、フェアファックスだ。きつと、湖水地方などという辺鄙な地域から出てきたばかりで物珍しい事が多々あるのだろう。彼は、宛に角何処の扉でも、曲がり角でも曲がり角で入りたがる。結果、意図する場所に辿り着けないのだが、神は二物を与えないものなのだろう。彼は、ギリシア神話を借りるならば、きつと美の神に愛されている少年なのだから、泣き所があっても仕方あるまい。いや、寧ろこの極端に不安定な方向に対する論理的推察の脆弱さは神の戯れというものなのかもしれない。

まあ、元気に走り回れるのはいい事だ。

昼食を取りに、食堂を自指して駆け出す彼の姿を見てさき思う。心配性のエインズワースが、また迷うとかなんとか大声を出して後を追ったが、知らないのか？ まとわり付くものはいつか拒絶されるものだ。

ゆつくりと食堂に向かっていると、突然鏡、フェアファックスのファースト・ネームを呼ぶエインズワースの声が屈いた。流石に緊急事態かと思ひ駆け出すと、フェアファックスが、ブックエンドで固く縛った教科書とノートの塊で、上級生に殴り掛かっていた……。

何事だ？ いったい何があったんだ！

現場に到着した時には既に、上級生の三人は駆け去った後だったが、フェアファックスの瞳は炯々と怒りに燃えていた。昼食を取りながら事情を聞いた所、足の悪い新生（ローズ・ハウスのトリガラみたいな奴だろう。作家は人間観察・記憶力に優れていなければならない）が、どうやら件の三人の上級生の内の一人にぶつかり、上級生が彼の教科書を取り上げ彼の頭上で回し投げをしていたらしい。それを、フェアファックスが奪い返した。

ハウは、上級生を殴るなど何事だと大層な剣幕で、しきりにフェアファックスをバカ呼ばわりした。

何故、彼の必死の行動を正当に評価しない？

もちろん、こうした閉塞的な集団の中で、年齢によるヒエラルヒーは覆しがたく、一年の差が圧倒的な体力・腕力の開きを生じてしまうこの特異期に於いては、屈辱的であろうとも無難と思われる選択肢があるのは確かだ。だが、先程パワー・ハラスメントの被害者となった少年より、フェアファックスは小柄だった。その彼が、三人の上級生に立ち向かったのだ。まずは褒め称えてやるべきなのではないのか？ 見ろ、彼はまた興奮で唇が赤い。言葉使いまで荒く聞こえるのは、余程緊張を強いられた

パロウは、母親がフランス人とかで、必須のフランス語の授業でかなり得をしていた。しかし、ボクは、独学でアプレップの頃からラテン語を勉強してきたんだ。物見遊山の気分での課を選択したなら、きつと後悔する。この学校は、芸術・古典に力を注いでいるのだから、ボクは、ぐいっと顎を上げて黒板を睨んだ。

三十五分後…。あのキンキン声飛び跳ねるようにパロウの横で口を動かしていた。

「ラテン語の授業って、もつと難しいかと思つていただけ、思つたほどじゃなかったね。歌で散々勉強したし、面白いや。」

こいつ、やっぱりボーイ・ソプラノをやっていたんだ。それで、歌つて言うのはきつと教養音楽に連いない。

「いや、今日はまあ最初だから簡単だけど、そのうち難しくなるよ。覚えていない格変化もかなりあるし。テキストが古典ギリシア文学だから、知らない単語も結構あるしね。聖書のテキストを扱ってもらえたら、今まであやふやだった部分も分かりそうなんだけどな。」

……パロウめ……!

何が、『そのうち難しくなるよ』、だ！ 何が聖書のテキストだ！ 知つたかぶりの、高慢ちきめ！ お前は今、ラテン語を旨流したんだ！

ボクは猛烈に腹が立つた。無茶と赤毛のカカシとチビねずみの横を抜いた。彼らはびつくりしていた。ふんつ！ お前らなんか、ラテン語の高尚さが分かつて堪るか！

ボクは、ラテン語の教科書を胸に抱いて寮に戻った。だから、こんな田舎の学校なんて、来たくなかつたんだ。勉強のトップレベルの集団でしか味わえないあの洗練された空気が懐かしい。なんだつてボクはこんな無意味な場所に居なくちゃならない？ 部屋の窓を開け、黄色くなり掛けた木立を見ていると本当に鬱々としてくる。ボクの居るべき場所はこんな所じゃないのに、誰もそれに気付かない。慰めもしない。

自らの不遇を省み、ボクはそつと眼鏡を外した。気を落ち着かせる為に、眼鏡用の織布で厚いレンズを円を描くようにして磨く。もしかしたら、これはボクに与えられた試験かもしれない。偉大な人間程、その人生は試験に満ちている。人生の暗闇の中で一人苦しみに耐えるしかないボクのこの状況は、選ばれた者の証なのかもしれない。

理解されない、孤独なパブリックでの生活を経、独力でオックスフォードに入り、そこで王立文学協会賞をかつさらい華々し

と問われたのだ。失礼な話だ。どうして自分の肉体に自信のある人間は、他人の肉体についてさうも冷酷であるのだろうか。彼らには想像力が乏しい。やはり、もう少ししたミロには記者クラブが文学部を勧めてみよう。両方ともボクが入っているから面倒をみてやれる。

四目目。

エインズワースの兄が、奇天烈な姿をしているを目撃する。制服の上から恐ろしく大きいTシャツを被り、そのTシャツでスクール・オーケストラのコントラバスを募集していた。彼の嗜好は見掛け倒しか、と鼻で笑つてしまつた。あんなにスポーツ万能です、みたいな自信たっぷりな態度を見せているのに。いや、まてよ、でかい奴ほど動きは鈍いつて言うからな。それに、今日分かつた事だが、兄エインズワースはまだ第五学年だった。人間、デカけりゃいってもんじゃない。なのに、彼は上級生からも一目置かれているようだ。結局は、みんな見かけで判断するのか、とさう思うといつそ気の毒にもなってくる。人間は、所有する知性で正當に判断されるべきだ。

今日の昼食時、ハウがボクの眼鏡を面半分は掛けて目を回していた。眼鏡の度数とボクの沈着さをロゴスの片鱗も無い言葉でからかつてきたが、ボクは相手にしなかつた。バカと話すとバカがうつる。ミロも手を伸ばして来たので貸したところ、まあ、びつくりしたみたいだけれど、それから虫眼鏡を使つて光の収束の話から化学の話になつたので、すつきりした。ハウの奴、少しはミロの爪の垢でも飲むがいい。

大変気持ちよく、本日の学科最後の化学の教室へ移動した。

化学は、実験台が机になるから一グループ四人だ。エインズワースやハウは二百歩ぐらい我慢してやつて同じ班でもいいが、デブ・ウィリアムだけはお断りだ。さう思つて、いくつか席取りのシミュレーションをしつつ扉を潜ると、教官が既に班を決めて席を指示しているところだった！ びつくりして教官の机の上に広げられた一覽表を見る。

ミロの名前が在った。でも、同じグループにボクの名前は無い…。気落ちしつつ再度ミロの班を確認すると、パロウの名前が在った。ボクの唇は、ひくつと握撃した。他の二人はどうやら違うハウスの人間のようだつた。

仕方が無い。がっかりしながら自分の名前を探すと、在った。でも……！ デブ・ウィリアムと同じ班だ！ あの、デブでウスノロで、気の利いた会話一つ出来ない、未だにヨレヨレのぬいぐるみに鼻水を擦り付けてるような奴と！ 信じられない！ 一体何を考えてこんな振り分けをしたんだ？ 酷い！ 酷すぎる！

ボクは顔から血の気が引いていくのを感じた。酷い屈辱だ。こんな屈辱、今まで受けた事がない。このボクが、プレップでだつて人一倍努力していたボクが、こんな低レベルの奴と同じ班だなんて……！ もし、これでボクの成績が下がつたら、断固抗議してやる！ 化学なんて、実験の手際良さと観察力とそれらの結果を纏め上げる大胆な言語力が必要なんだ！ 一体教官は何を考えているんだ？ このボクに、ウスノロ・ウィリアムの面倒まで見るというのか？

ボクが、突然ふつてわいた不遇をなんとか理性で沈めている間に、教官はずんずんと今日やる実験の説明を進めていた。なんて無能な教官！ 生徒の一人が、彼のその愚鈍な配慮のお陰でここまで精神的苦痛を味わされていくというのに……！

教壇には、何時の間にか山盛りのガラス管が現れていた。毛細管とスポイトを作るのが今日の課題らしい。作った器具は、今後の実験ですつと使用される。半分以上聞き逃してしまつた。でも、みんなそんなものだろう。作業開始の音がした。ボクは息いで机の上に手を伸ばした。

掴んで、振り向いたその瞬間、ボクの手からガラス管は床に落ちて碎けた。マイケル・ガーネット！ と教官がボクの名前を呼んだ。ボクの名前を！

これじゃまるで、ボクの過失のようじゃないか！ 誰かがボクの腕を押し込んだ！ 悔しさと胸が支えた。ウスノロ・ウィリアムが気にすること無いよ、とかなんとかボクに声を掛けてきた。なんたる侮辱！

カッカする気持ちを抑えながら、ウスノロ・ウィリアムを無視して実験台に向かった。ボクは著しく不愉快な思いをさせられたので何度も失敗した。その結果、なんとも歪な実験器具が出来上がり、これをこれからの授業で使っていくのかと思つたらんざりした。実験の途中、何度もミロの班を見やつたけれど、ミロは特にバロウと話している様子も無く、真剣にガラス細工に没頭していた。

うまく行かない作業をとつと終わらせ、ノートに実験記録を記入しようとした矢先、小さな悲鳴が耳を突いた。ミロだ。

慌てて首を回すと、バロウがわざわざ机の反対側から回つてきてミロの手を覗き込んでいる。そして、さつさと氷の入つた

ボウルを引き寄せてミロの目の前に握えた。実に無駄の無い動きだつたけれど、ボクは非常に面白くない。だつて、バロウの奴その後何をしようと思う？ 教壇に絆創膏を取りに行き、わざわざ自分でミロの指に巻いてやつたんだ！ 普段会話もした事無いくせに、なんて奴だ！ ミロもミロだ。上級生や同学年の生徒にちよつとからかわれただけでも直ぐに嫌な顔するくせに、大人しくバロウのなすがまになつてている！

面白くなかつた。物凄く残念だ。正当にボクの能力を評価しない学校側と、結局眼鏡も掛けていない、すらつとした赤毛のバロウの言いなりになっているミロ。

君だつて、散々見かけでは嫌な目に遭っているだろうに、ハンサムだつて言われてまんざらじゃなない様子のバロウには下手に出るんだ。それに、エインズワース。そりゃ、あいつは物凄く運動神経がいいけど、ボクの知つてる星の名前の半分、いや、三分の一だつて知らないに違いない。

エインズワースはちよつと自立つ兄貴が居てもやほされてるだけだし、バロウなんかいくらハンサムだからつて、赤毛の上には、ソバカスだつてあるじゃないか。

その晩、ボクは夕飯を彼らと離れて取つた。部屋に戻つた時、その事について尋ねられたけど、別に、と返した。

そうさ、別に、大したことじゃない。今まで我慢して一緒に食べてやつていたんだ。ボクが居なくなつて、会話にウィットが無くなつてつまらないだろう。ザマアミロ。

五日目。

これで一週間分のカリキュラムが終わる。午前の最後の授業は選択科目で、ボクはラテン語だ。将来、文学の末端を担うからにはやはりラテン語だろう。エインズワースとミロはスペイン語、ウスノロ・ウィリアムは倫理、ハウはデザインを選択している。この授業は種録式の講堂で行われる。曇りガラスの入った窓は白っぽく柔らかな光を教室に通し、格調高い雰囲気を出している。いい感じだ。授業への期待に胸が膨らみ掛けたその時、目の端に赤い色が侵入して来た。

あの、バロウだ！ おまけに、チビのキンキン声もつ付いている。まるでバロウの腰巾着だ。折角の向学心に水が入つた。

後三十分も無い。
シャワーも浴びず、みすばらしい格好のまま、とにかく何か食べたくて食堂に入ろうとした。すると、食堂屏風の掲示板に、あるう事が、イラスト入りでさつきの出来事が滑稽な壁紙新聞として張り出されていた。

ボクの神経は焼き切れそうだった。
なんて、品性の無い集団なんだ！

息を吸い込みかけた途端、目の前を何かがさつと過ぎて、ピリツと紙の破れる音がした。音のした方を見ると、ミロが掲示板からひつpegした新聞を豪快に二つ、四つと引き裂いている。それを、エインスワースが引き取って、丸めて、屑箱に蹴り入れた。

ボクの繊細な神経は、すうつと縮み、目の前が暗くなるような心地を味わう。

成り行きで同じテーブルに座り、ボクはぼそぼそと食事を取った。

「あれ、マイケル、眼鏡はどうしたんだ？」

ミロが、大きな青あざを作った顔で聞いてきた。

「壊れた」

笑い掛けてやる気なんてさらさらなくて、そつげなく返事した。なんで、ボクはこいつらと一緒に夕食なんて食べているんだ。あつち行けよ、バカヤロウ！

「……ごめん。巻き添え食わせて……」

と、ミロは言った。

その声は小さく、目の前には彼の金色の旋毛があった。

ボクの怒りは硬いのだ。いくら君が殊勝に許して来ても、誰が許してなんかやるもんか。なおも黙ってその旋毛を見つめてみると、彼は、まっすぐにボクの瞳を覗き込んで言った。

「ごめん。本庄ごめん。オレ、目だけはいんだ。だから、授業、全部隣に座るよ、ノート、ちゃんとマイケルの分も取るよ」

そして、唇を白い歯が見えるくらいぎゅつ、と噛んで、今度はテーブルに頭が付くくらい深々とボクに頭を下げた。

視線がボクに集中した。顔に熱が集まる。頭と腕を、バタバタさせてこの熱をどこかにやつてしまいたい。ミロは、なおも深く

く文壇にデビュー。著作は全世界で翻訳され、みんながボクの生い立ちに興味を持ち、ボクは奇跡の才能と羨まされるんだ。

きゅつ、と眼鏡の縁を磨き終え、蔓を耳に掛けた。世界がすつきりと明るく見えるようになった気がする。無理解を気に病むのは止めよう……。確かに、その無神経な観察力はボクの繊細な心を傷つけはするが、瑞々しい靈感の泉は誰にも汚せない。あと、五年もしたら、きゅつとみんなボクの真実の姿の偉大さに愕然とし、今こんなにもボクを軽んじた事を死ぬほど恥じて後悔するんだ。激烈に、いい気味だ！

さて、時計を見る。午後は倫理の授業だ。ウィリアムは美術、ハウは初級ドイツ語、エインスワースとミロは音楽の選択だったはずだ。ミロが初日抱えていた長方形のゴッイ肩掛けバックの中身はバイオリンだったのだ。エインスワースも、ブレップではずつとトランペットをやっていたと言。

ふん、と、誰も居ないのでボクは短く鼻を鳴らした。ボクは、所謂表現芸術のうち、音楽と美術は苦手だ。美しさや素樸らしさはきちんと感受性に訴えるのに、手が思っただよびに動いてくれない。声だつてそうだ。ちゃんと頭の中では正しい音が鳴っているのに、いつだつてボクは笑われて来た。勉強でボクに敵わない奴らが、こころとばかりに嘲笑をボクに浴びせた。

笑うがいいさ。その代わり、ボクは言葉で美しさを、芸術の素樸らしさを表現して見せる。

きゅつ、と手を握り締めた時、階と窓の外から騒然とした雰囲気と、ボクの神経を一瞬で熱くする一言が飛び込んで来た。

「ミロ・フェアアックスが、スカート穿いて喧嘩してるぞっ！」

何事？！

ボクは窓から身を乗り出した。

グランドフロア、食堂のテラスからエインスワースが物凄い勢いで飛び出していったのが見えた。その後をハウとウィリアムが玄関から追う。野次馬も走り出していた。

ボクは、ずり落ちる眼鏡を抑えながら、もつれそうになる足をなんとか動かし、階段を駆け下りた。

ばらばらと集まる野次馬を追って、芝生の上を走る。

喧騒が大きくなる。

スクール・チャーチと池の間の芝生に、小山のような人集りが出来ていた。

人垣を掻き分けて、体をあちこちに捻りながら前へ進んだ。耳元に色んな怒鳴り声が聞こえて頭が痛くなる。おまけに、眼鏡が、

引つかかって、引つかかって中々前進出来ない。

進行方向中央部からは、地面に人が打た付けられる音や、なんだか嫌な鈍い音が聞こえてくる。

人垣には恐ろしくデカイ人間も混じっていて、ボクが無理矢理進もうとすると睨みつけてくる奴まで居た。ああ、上級生だ、と瞬時に分かったが、どうしようもない。ボクは既に自分の意図だけではなく、もつとよく見ようとする野次馬の欲求に圧され、途中下車など不可能だった。

鼻に、がばつと新鮮な空気が入ってきた。

やつとの事で体が圧迫感の無い空間に飛び出したのだ。

……

赤いスカートと、金髪が見えた。

エインズワースが、馬乗りになって誰かに殴りかかっていたかと思うと、今度は彼が下敷きになった。背の高さは変わらないが、体の出来具合が全然違う。ハウは何だか知らないが、必死になって誰かの足に嘔り付いていた。赤い色が、ひらり、ひらりと見えて、金色の頭が激しく動いている…。

ボクは、自分の頭がグラグラしているのか、足がゴムみたいにぶるんと揺ら振られているのか分からなくなった。何か、捕まるものはないのか？

ミロが、自分の倍はあるような体格の、紛れもない上級生に殴りかかっていた…。

ボクが眼鏡を押えて唾然としていると、スクール・チャーチの方から人垣が崩れ、さあつと道が開いた。ボクの背中が何かに押された。

あつ、と思うまもなく、ボクはミロ達の中に多々良を踏んで入り込み、後頭部をしたまふん殴られた。

なんて野蛮な連中だっ！

衝撃で眼鏡は芝生の上に転がり、ボクの目には涙が滲んだ。慌てて眼鏡を拾おうと芝の上に手を付くと、背中に誰かが倒れ込んできて、ボクはあえなく地球に押し付けられた。

苦しい……！

「何をやってるのかね！ 諸君！」

手を打ち鳴らす音と、有無を言わぬ声が響き渡った。司祭兼生活指導のルイス教官だ。遅いっ！ 来るのが遅いよっ！ ボクが眼鏡が、眼鏡が……！

フレームがぐにやりと曲がった眼鏡をボクは両手に抱き上げた。髪も服もぐしゃぐしゃだ。ボクはよろよろと立ち上がった。その目の前で、ミロが、真っ赤なひらひらのミニスカートを脱ぎ捨てて、地面に打ち付けた。

怖い……。

場が、しーんと静まり返った。

その中を、あのウスノロ・ウィリアムがびくびくと入ってきて来て、ミロにびしょ濡れのズボン差し出した。

どうやら、四人がかりで無理矢理スカートを穿かされて、ズボンを池に放り込まれたらしい。

唇の端を盛大に切ったミロは、それでも全滅痛そうなまぶらもなく、ルイス教官を睨み付けていた。教官は、ため息を付いて、ボク達四人と上級生（後で分かったが、第五学年の生徒だった）を講義部屋に連れて行った。

なんでボクまで？

その後、ボクらは飛んで来たハウス・マスターに引き取られ、またお説教された。

ボクは、誰にも危害は加えていない！

ハウは膝小僧を破り、エインズワースは手の甲とシャツを破っていた。ミロは右の口端がどんどん紫に腫れていき、制服のシャツが泥と擦り切れた芝草でボロボロだった。上着は殴り合いを始める前に脱いだので無事。

哀れなのは、ボクの眼鏡だ。奴らの傷はほつとも直るが、ボクの眼鏡は特注で、左のレンズにも傷が付いて、フレームも買い換えなきゃいけない。

誰かが、踏んづけたんだ！

もう、あまりの恥辱に唇が震え、言葉が出なかった。ボクは、何度も関係無いと言おうとしたのに、ハウス・マスターは、怒る素振を見せながらも、彼らの超絶に原始的な問題解決方法に耳を傾け、ボクが存在を明らかに無視していた。ハウス・マスター夫人のミス・ベネットがボクを看めるように肩に手を掛け、ホットミルクを飲ませようとした。失敬極まり、だ。ボクは至つて冷静だ！

結局ボクの弁は最後まで聞かれることなく、ハウス・マスターの部屋を辞した。夕暮れはとうとう過ぎて、夕食の時間終了まで

クールの学生なんだぞ！
相手は七く八人、体格も稱い。人数からしたらバトリック達の方が不利だ。警察を呼ぶべきなのか？ ボクが店内を見回すと、いつの間にかエインズワースがミロの横に来ていた。

「どうする？ 加勢するか？」

何を馬鹿な事を言っているんだエインズワース！ 止めるの間違いだろ！

ミロは、ちらつとエインズワースを確信するとじつと取っ組み合いを見詰めながら言った。

「もうちょっと。様子を見て、卑怯な事をしたら行く」

行くって、どこにだ！ ミロ！

ボクが二人の会話を訂正せよとしたとき、隣部屋のパーマーとリチャーズが、人数が不利だから加勢に行ってくるぞ、とまるでポストに手紙を入れてくるという風に店から出て行った。止めてくれ！ なんて下等な生き物なんだ！ あいた口が塞がらなくて、ミロの方を見ると、エインズワースのポテトフライとスープを交換している所だった。なんでキミ達はそんな態度で居られるんだ！

と、女の子達の声が上がった。喧騒の集団の中で、髪をぐしゃぐしゃに固めた少年が、バトリックの頭に自転車用のヘルメットを振り撃している所だった。ああ！ また、流血の惨事だつ！ ボクは目を離く瞑った。頬を、風が撫でた。一瞬の風だ。好奇心に負けて薄目を開くと、ミロが、ヘルメットを持った少年の脇腹に飛蹴りを決めてる所だった。。

ボクは暗唾なんてしたことはない。見る事だつてしないで来た。だから、よく分からないけれど、飛蹴りを決めるつて、どうだ？ もしかして、彼は、とても、こういう事に慣れている？ ボクの頭は真っ白になった。エインズワースが小走りに集団の中に溶け込み、ハウもそれに付いて行った。

結局、十分くらい後、何処にでもいる田舎の機嫌の悪い頑固爺に一喝されるまでそれは続いた。ぱつ、とお互い離れてからも遠ざかる相手に対してそれぞれ下品な言葉を投げかけていた。見苦しい事この上ない。おまけに、女の子達はこの騒動の間に何処かに行ってしまった。それでも、彼らは至くそれには頓着せず、お互いの野蠻さを称えあっているのだから救いようの無い愚か者達だ。だったらなんで女の子に話しかけるなんてミロに喚げるんだよ。低俗な共有体験をした事で、彼らは連帯感を持ちお互いに親しみを感じているようだった。ボクはその中には入っていない。

ボクの前に頭を垂れていた。

「君、短気なの？」

ボクは、緩みそうになる口を意識しないようにして、ぼそつと呟いた。するとミロは、ぱつ、と顔を赤くした。

「短気、って程短気じゃないと思っ。ただ、最初に泣き寝入りしたら、それってずっと続くだろう？ だから、今頑張つて戦つてかないとっと思っだけ」

「お前、頭張り過ぎ」

エインズワースが、横からミロの頭を小突いた。ミロが、擦つたぞうに笑った。そして、

「うわあああああ！ ミロ、流血してるっ！ 口が裂けてるっ！」

ハウが叫んだ。

笑った拍子に、ミロの口から、塞がっていた瘡蓋が弾け、ぼたぼたと血が滴ったんだ。テーブルと、ボクの靴の上に。。

イボと皺だらけの三人の魔女と一緒に、嵐をミロの口の中に突っ込んでやりたいと思っった。

六日目。

やっと一人になれると思ったのに、部屋ではミロがまだぐだぐだと寝ている。二段ベッドから細い足が棒切れみたいに突き出ている。

彼が来てから、ボクの周りは何時にも騒々しかったのに、それが、嘘のように今は静かだ。エインズワースとハウ、デブデブウイリアムが昼食を取りに行っている。

ミロは、何時まで眠っているんだろうか。キシキシという椅子に息を殺して足を掛けた。

飛び込んで来た寝顔は、こつちを向いていて、それは静寂と平安に彩られた柔らかな表情だった。閉じた目蓋から伸びる睫毛は本当に長くて、おまけにカールまでして、マッチ棒が五本は乗りそうだった。睫毛の根元の皮膚もほんのり青みが掛かっ

いて凄く綺麗だ。唇もうつすらと開いて、綺麗なピンク色。大きな青あみを除けば、これまでボクが見てきたどんな女の子より可愛いと思うのに……。ミロは時々、苛烈な怒りを見せる。あんな奴ら、ほっとけばいいのというレベルの相手にまで走り出して行……。

結局、ミロは一時過ぎに起きて、その日は一日ぼーっとしていた。

七日目。

もう、何をどう書いたらいいのか……。ボクの頭は飽和状態だ。まただ。また、ミロが嵐の目になった。事件は二つ。

今日の昼、街に繰り出そうと教人の新人生が寮を出た。メンバーは、ロース・ハウスの五人とミス・ハウスの七人。デブデブ・ウィリアムとバローウ、キンキン声は教会に行っていて留守だった。エインズワースが待つてみるか、と提案したがロース・ハウスのパトリックに急かされてバスに飛び乗った。ミロはしきりにバスに感心していた。来る時にバスを使わず、二時間掛ったのだと言った。本当は、歩いて一時間くらいだ。

街中に出て、マクドナルドに入る。ミロは、一回も入ったことが無いといって一緒に連中を驚嘆させた。中身がハンバーグだと説明された彼は、結局コーンスープしか頼まなかった。ミロの偏食はもうハウスでは有名で、ミロの側に行けば彼の食べない肉のおごばれに預かれると単細胞な子供が皿を空けて待つている。もつとも、殆どはエインズワースかハウの胃袋に消えるのだけれど。

ミロは肉を食べない。肉が美味しいとは思わないから、とあつけらかんと答えていた。彼が食べるのは、野菜や魚チーズ。そして、牛乳。牛乳は特に、水のように飲んでいてこれだけでお腹一杯になっているみたいだ。それから、お菓子も好きじゃないらしい。チョコレートもクッキーも、キャンディーも食べない。

それで、あつつ熱のスープを飲んでいただけけど、店内に、同じくらいの年齢の女の子達が居たんだ。今回のツアーの冒険者

パトリックがミロに、行って女の子達に話しかけろと命令した。なんで、とミロは嫌そうに顔を曇めたけれど、パトリックに背中をぐいぐい押されて結局彼女達の居るテーブルに行かされた。

女の子達はいぶかしむ視線をミロに上げたけど、ミロが何か一言言いつたら、忽ち弾けるように笑い出した。じりじりとパトリック達はミロの方を見ていたけれど、ミロは一向に戻って来ない。痺れを切らしたパトリックが、咳払いして黄色い声を上げている集団に近付いた。そして、得意満面で僕らと呼び寄せた。

ボクは、無視した。どうせボクが行ったって、女の子達はボクに話しかけやしないし、ボクの話に付いてこれる子なんて居やしない。あの子達の頭の中には洋服とか化粧とかの事しかないんだ。誰がそんなつまらない事に時間を割くもんか。

水が解けて薄くなった不味いコーラをチビチビ吸ってボクは時間を過ごしていた。と、そこにミロがやって来て、同じように残ったスープを黙って飲み始めた。

「なんであつちで話さないのさ」

「う？ だって話さないし」

ミロの一言にボクの心はふわつと軽くなった。そうだな、全然面白くないよな？ でも、最初は楽しそうに話していたじゃないか？

「あのブルートのチェック柄のシャツ着てる子の髪飾りが綺麗だったから、何処で買ったのか聞いただけだよ。妹にプレゼントしようと思つて」

ボクは、入っていた肩の力がストンと消えるのを感じた。その後、先般ボクが読んだ本の話になって、今度ミロにも貸してやろうって穏やかに話していたのに、それは突然やつてきた。

店の入り口に、ガラの悪い連中が締め切り無く立ち群がって、パトリック達に向かって野次を飛ばし始めたんだ。横のミロの様子をチラッと伺うと、彼は平気な顔して無視していたので、ボクは一瞬胸を撫で下ろした。でも、酷くなる悪態に、パトリックが切れた。

顔を真っ赤にして突進して行ったパトリックは、マントヒヒの様だった。たった一人でバカじゃないか、と思つた次の瞬間ロース・ハウスの残り四人も飛び出して、往來で掴み合いが始まった。

何をやっているんだ！ ボク等は金も教養もない公立学校の生徒じゃないんだぞ？ 十六世紀から続く誉あるパブリック・ス

Title : THE FIRST AUTUMN
Author : Seigi Sagame and Wakai

えいこくりようせいものがたり
英国寮生物語 (1)

薪朝文庫

B - 4 - S



平成一四年五月三日 初版 発行
平成一六年六月一三日 改訂版 発行

著者 祥曲星祈 ・ 和海

発行者 高橋 鼎

発行所 饅仔牛ともぐら舎

<http://moo-and-mole.com>
info@moo-and-mole.com

定価 六八〇円

乱丁・落丁本は送料当舎負担にてお取り替え致します。

印刷・製本 緑陽社
Printed In Japan

ISBN4 - 10 - 208802-3 CO197

何故、下らない事に足を踏み入れなかつたボクが、こんな疎外感にさらされなくちゃいけないんだ。絶対に間違つてい
結局、その後ぶらぶらと街中を歩きいくつかの雑貨店と駄菓子屋を回つた後、ボクらは寮に戻つた。

夕食までにはまだ時間がある。明日の予習でもしようかと、部屋に戻ると、ミロは先にシャワーを浴びてくると言つた。エイ
ンズワースは、食事の後でいいと言つた。と、ミロがボクの左手の側面を指した。汚れてる！ なんてこんなところが？ ハウが
ボクを鈍いといつて笑つた。ボクは無視してミロと一緒にシャワールームに向かつた。

ボク等が使用していいシャワールームは一階の西側で、朝七時から夜九時までだ。四年前に改装したとかで、割と綺麗で使
やすい。二重扉を開けて脱衣所に入ると、それまでボクの前を歩いていたミロが突然止まつた。

危ないじゃないか！

口にしやうとした瞬間、ミロの背中がピリッと緊張したのが知れた。恐ろ恐ろミロの視線の先を辿ると、個室の一つ一つの扉
に、スカートを穿いたミロの似顔絵と卓猥な文句の書かれた、所謂ピンクチラシがずらりと貼り付けられていた。

カタン、と言がした。

ミロが音に向かつて走つた。

ボイラー室に続く戸口から人影が見えた。
人影は二人だ。

彼らの消えた足元に、あのチラシが投げ捨てられている。

ミロが、猛然とタッシュした。

速い！

庭先で明らかになつた犯人二人は、ロウ・ハウスの新人生だ。ミロがぐんぐんと距離を縮める。追われる二人は、なんとか身
を隠そうと、ミス・ハウスに飛び込んだ。何事だ？ と、押しつけられた数人の生徒が追いかけてくるを見送る。二人は必死で
逃がっている。廊下は突き当たりだ。と思つた瞬間、彼らは左手の扉を引いて中に飛び込んだ。中は倉庫だ。ボタン、と言がし
て扉が閉まる。ミロが、扉に手を掛けたのとほぼ同時だ。閉じこもつた中から悲鳴が上がつた。

「貼つて来いって命乞されたんだ！ 言う事を聞かなかつたら僕達にも同じことをするって……」
「命乞されたら、逃げなきゃならないような後ろめたい事でもやるのかよ！」

ミロの体から、青い炎が立ち上がったように見えた。何故だか分らない、その場に居た誰もが動きを止めた。ミロの怒気が言葉と共に目に見えない風になってハウスの中を吹き走った。実際、ミロは、言葉と共にドアに左腕を凄まじい勢いで打ち付けていた。

殴打の鈍いけれど大きな音、それからガラスが割れ、床で更に細かく砕けるあの独特の耳に残る音、それらがいつべんに響き渡った。

誰も、動けなかった。

その中で、ミロだけが静かにドアを開けた。二人の少年がミロを見上げた。彼らの上にはガラスの破片が降りかかっている。

一拍後、泣き声二重奏がエコーした。

ミロは、びつくりした顔で二人を見下ろしていたけれど、ミロ……そりゃ、泣くだろう？ だって、君の左腕、スフラッタじゃないか……。

ハウス・マスターは勿論の事、チューター、フェロー、マダム・ベルリッジまで飛び出してきた。床には見る間に血溜りが出来

ミロは、困ったような顔をして自分の腕を高々と上げて肩口辺りを押さえていた。

結局ミロは救急車で運ばれ、部屋に戻って来たのは真夜中近かった。散々お説教されたらしく、ハウス・マスターのミスター・ベネットの声は掠れていた。ぐいっとミロを部屋に押し込みながら、彼らも二度と同じ事は繰り返さないように、と最後の注意を与えていた。ミロは、非常に素直に頷いていたが、ボクは、どうかと思っ。

ミロは、同じ事は繰り返していない。どれもこれも、ボクが初めて目にするこぼかりだ。それとも、いつかはやりつくして『同じ事』しか残らなくなる日が来るのだろうか。早速、白い包帯に落書きされているミロを見ながら、ボクは少し眩暈にも似た感覚を覚える。

一週間で、流血事故が二件……。駄目だ……本並に眩暈がして来た……。ボクはまろよろと自分のベットに倒れこんだ。

「マイク、俺、右でも子、書けるから大丈夫だよ？ ちゃんと約束は守る」

ミロがボクに声を掛けた。ボクの眼鏡は壊れたまま。新しい眼鏡が出来るまで一週間は掛かる。明日からまた一週間が始まる。ボクの目の変わりにミロはなると言った。でも、ボクは一週間後、無事で居られるのだろうか？ ミロの巻き添えで眼鏡が必要の無い体になっちゃった？ ああ、でも、明日からハンカチを一枚余分に持つて行かないか……あのデブデブハウスノロ・ウイリ

アムの奴、チョコレート・バーを食べたベトベトの手ドアを平気で開けていた。デブデブハウスノロの障ったドアノブなんて、ボクの手をそのまま掛けるわけに行かない。下手をしたら、奴は便所に行つても手を洗っていないかもしれない。母は笑い飛ばすが、空気感染の細菌よりも、皮膚感染の細菌の被害の方が深刻な事態を発生するのではないかと思っ。またデブデブとして纏めていないが、調査の価値はある。

なんたるバーバリスム。なんたるミゼラブル。ボクのユートピアは遙かな時間の先にある。

黄昏とはいえ、連合王国にかくも未開な土地があるとは……。野蠻で、衝動的で、暴力と沸騰する感情、脆い目を持つ人間達が暮らす土地。チャーチルが百年統治しても消滅しないだろう。

これを、子供の領域と言っ。